

Japanese Studies Journal

Contents

Reception of SHIGA Naoya in TAKII Kosaku's *Chichi* : A Comparative Study to *Wakai*

YUN, Mira... 1

The Emergence of "Toshi"

– The Role of MIYAZAWA Kenji's Younger Sister in His Reception as an Author –

HATTORI, Takahiro... 21

YOKOMIZO Seishi's *Yatsuhakamura* as the Story of Regaining Roots :

Consideration of the Yokomizo Vogue in 1970s in Japan

ARIMURA, Yuri... 42

Acceptance of Kyougi - Karuta Culture Among Thai People

– Focus on Ways of Memorizing –

DANGBUNGA, Chanakan... 66

The Representation of Thai-Japanese Relations in the Juvenile Novels

Nihonjin O'in

LOMVATANATHAM, Chomphonik... 82

Planning Kra Canal across the Malay Peninsular : Correlation and Conflict between Japan and Britain

HASHIMOTO, Yorimitsu...96

October 2018

Chulalongkorn University - Osaka University

No.
18

日本研究論集
第十八号

二〇一八年十月

チュラーロンコーン大学・大阪大学

ISBN 1306-8891

日本研究論集

目次

瀧井孝作「父」における志賀直哉受容—『和解』との比較を中心に—
尹美羅... 1

「妹」の登場—宮沢賢治受容におけるトシの扱い—
服部峰大... 21

「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』
—執筆の同時代背景を踏まえた横溝正史ブーム再考—
有村友里... 42

タイ人の競技かるたの受容—覚え方を中心に—
チャナカン・デーンプガー... 66

『日本人オイン』における日タイ関係の表象
チョンプーニック・ロムワタナタム... 82

マレー半島横断運河計画—クラ地峡をめぐる日英の相関と衝突—
橋本順光... 96

2018年10月

チュラーロンコーン大学・大阪大学

第
18
号



この雑誌はタイ国トヨタ自動車株式会社の出版援助によるものです。

The Japanese Studies Journal is published under the auspices of Toyota Motor Thailand, Co., Ltd.

目次

瀧井孝作「父」における志賀直哉受容

—『和解』との比較を中心に—

尹美羅... 1

「妹」の登場

—宮沢賢治受容におけるトシの扱い—

服部峰大... 21

「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』

—執筆の同時代背景を踏まえた横溝正史ブーム再考—

有村友里... 42

タイ人の競技かるたの受容

—覚え方を中心に—

チャナカン・デーンブガー ... 66

『日本人オイン』における日タイ関係の表象

チョンプーニック・ロムワタナタム... 82

マレー半島横断運河計画

—クラ地峡をめぐる日英の相関と衝突—

橋本順光 ... 96

Contents

Reception of SHIGA Naoya in TAKII Kosaku's *Chichi*:

A Comparative Study to *Wakai*

YUN, Mira... 1

The Emergence of "Toshi"

– The Role of MIYAZAWA Kenji's Younger Sister in His Reception as an
Author –

HATTORI, Takahiro... 21

YOKOMIZO Seishi's *Yatsuhakamura* as the Story of Regaining Roots :

Consideration of the Yokomizo Vogue in 1970s in Japan

ARIMURA, Yuri... 42

Acceptance of Kyougi-Karuta Culture Among Thai People

– Focus on Ways of Memorizing –

DANGBUNGA, Chanakan... 66

The Representation of Thai-Japanese Relations in the Juvenile Novels *Nihonjin*

O'in

LOMVATANATHAM, Chomphunik... 82

Planning Kra Canal across the Malay Peninsular :

Correlation and Conflict between Japan and Britain

HASHIMOTO, Yorimitsu... 96

瀧井孝作「父」における志賀直哉受容
—『和解』との比較を中心に—

Reception of SHIGA Naoya in TAKII Kosaku's *Chichi*:
A Comparative Study to *Wakai*

尹美羅*

大阪大学大学院日本文学専門分野 D1

要旨

瀧井孝作は、日本近代文学史において私小説作家として分類される作家の一人である。本稿では、瀧井孝作の「父」（1921年）を精読することによって、瀧井孝作作品における志賀直哉受容の一端を明らかにする。これまでの研究において、瀧井作品における志賀の影響に言及するものも少なくないが、その実態を浮き彫りにしている論稿はあまり見当たらない。志賀の『和解』（1917年）はこれまでにその内容の面から＜私小説＞として分類され、評価されてきた。これに対し、本稿では、瀧井孝作による志賀作品受容がより方法的なところに重点が置かれていた点に焦点を当てることとする。

キーワード：瀧井孝作、志賀直哉、私小説、『和解』

*YUN Mira, graduate student, Osaka University

e-mail: yunmira6@gmail.com

Abstract

TAKII Kosaku is classified as a “*Watakushi-shosetsu*” author in Modern Japanese Literature history. This paper argues to clarify the influence and reception of SHIGA Naoya’s seen in TAKII’s works by carefully reading TAKII’s *Chichi* (1921). In previous research the influence of Shiga seen in TAKII’s works has been regularly mentioned; however, there are few studies that have investigated this connection. SHIGA’s *Wakai* (1917) has been classified and read as “*Watakushi-shosetsu*” from the perspective of its contents. Regarding this perspective, this paper focuses on the importance put on the methods that came from the influence of SHIGA on TAKII.

Keywords : TAKII Kosaku, SHIGA Naoya, “*Watakushi-shosetsu*”, *Wakai*

1. はじめに

瀧井孝作（1894-1984）は大正期から昭和期にかけて活躍した作家である。「父」は1921年7月号の『人間』に掲載された瀧井孝作の短篇小说であり「処女作」¹である。²

¹ 「私の処女作は大正九年の十二月に出来上った『父』と云ふ五十枚の物です。（中略）『弟』が最初の作ですが、之は何の気なしに書いた回想記で、より『父』の方が構成的ですから私の心持から『父』を処女作と云ひたいのです。（中略）そう云う執著と長い期間との掛っているせいか、私は今迄の作の中では『父』に一番愛惜があるのです」（「処女作『父』について」、『文章倶楽部』、1924年6月）や「処女作『父』は私の作家としての文体を決定したやうなものであった」（「処女作『父』の回想」、『人間・復刻版別冊』、日本近代文学館、1975年）などと自身の言葉で述べている。

² それまでの作品が「折柴」あるいは「瀧井折柴」と俳号で書かれたのに対して、「父」は「瀧井孝作」の本名で発表された最初の作品で、以後、『海紅』誌上での句作を除いて、創作活動はすべて本名となった。のちに『妹の問題』（玄洞社、1922年）

瀧井の作風は、大きく二つに分けられる。一つは瀧井自身が「風景小説」³と命名するもので、「副物でない、風景を主にした小説」⁴という意味で、文学史の中で写生文に分類されるものと同じ脈絡で理解できよう。俳人として文学を始めた作家であるだけに、その「写生文」的特徴は彼の全作品に見られるが、晩年になるほど自然のほうに目を向け、作品のほとんどが地の文のみで構成されるなど、その特徴が顕著となる。

一方で、瀧井は日本文学史において私小説作家として分類されてきた。代表作『無限抱擁』を含め、本稿で取り上げる「父」をはじめとする十作品以上に及ぶ「父親もの」⁵の存在ゆえである。瀧井の「私小説」は、保昌正夫が「その『小説』には『自伝』の密度が濃く、『小説』と『自伝』とは一帯のところがある」⁶、「自己小説、身边小説の多いこの作家にあっては小説と随筆とは一連のものともみられる」⁷と指摘しているように、身边に題材を求め、

に収められ、次いで『良人の貞操』（新潮社、1923年）、『父』（高山書院、1941年）、自選短編集『山茶花』（大和書房、1975年）に収録される。

³瀧井は、「『野趣』あとがき」（『野趣』、大和書房、1968年）において、「私は、自然風景が無上に好きで、“風景小説”が有ってもよいと考へて、『山の姿』『松島秋色』などを書いた。これは新しい小説のつもりで、昭和三十三年四月の群像の“風景描写特集号”に、エッセイを書いて、“風景小説”を主張した」と述べている。

⁴瀧井孝作「風景小説」（『群像』、1958年4月）

⁵「父」は、志賀直哉の『和解』に発想を得た「父親もの」の第一作であり、以降、これに加え、「妹の問題」「ゲテモノ」「田舎の父」「父来る」「父の活計」「慾呆け」「悲しき老父」「山中釣遊」「金鉾の夢」「積雪」「父祖の形見」などが執筆される。

⁶保昌正夫「『瀧井孝作』編 解説—「自伝」抄 四十七篇」（『近代文学研究必携』、学燈社、1963年）

⁷保昌正夫「瀧井孝作」項（『日本近代文学大事典・第二巻』、日本近代文学館、1977年）

「『事実』と『虚構』の別」が「きわめて微妙である」点にその特徴があり、その面において評価されてきたと言えよう。

第一に瀧井君の文章です。あれは晦渋を極めてゐるやうですが、決して下手な文章ではありません。のみならず非常に凝った文章です。(中略)しかしあのごつごつした、飛驒の国に産する手織木綿の如き、蒼老の味のある文章は容易に書けるものではないのです。

(中略) 第二に瀧井君の作品は Trivialism に落ちてゐると云ふことです。成程志賀さんの作品などに比べれば、兎角瀧井君の作品はトリヴィアルな事実を並べることに偏してゐるかも知れません。しかし瀧井君の作品の面白味は一つにはトリヴィアルな事実を並べることに存するのです。たとへばいつか瀧井君のお父さんのことを書いた小説にしても、艶っぽい坊さんが出て来たり何かするのは或はトリヴィアリズムとも言はれるでせう。けれどもあのトリヴィアリズムを除いたとしたらば、瀧井君の作品はどの位美しさを減ずるかわかりません。⁸

引用がやや長くなったが、芥川龍之介のこの文章は、瀧井作品に関する以後の評価を理解する上で重要な資料となる。芥川は、瀧井の「凝った文章」に加え、保昌の指摘する「『事実』と『虚構』の別」が「きわめて微妙である」点に瀧井作品の特徴を見出し、「Trivialism」という語を用いて、これを高く評価している。このような芥川の同時代的評価は、のちの小林秀雄による「瀧井氏のものは如何にも読みづらい、と。正にその通りだが、一体読み易い名文などとは意味をなさぬ言葉である。名文に難解は付きものだ。(中略)この作

⁸ 芥川龍之介「瀧井君の作品に就いて」(未定稿、1926年6月、『芥川龍之介全集・第十三巻』(岩波書店、1955年)収録)

家程、風物と人間との合流を清澄な眼で眺めてゐる人はないであらう」⁹という評価や、山本健吉の「身边に激しい事件のなくなった生活の安定のなかで、氏の書く作品には写生文的態度のものが多し。（中略）かういふ記録的なものも、おのづから張り切った強い文体で書かれてゐて、随筆とは違った創作的文体を打出してゐる。読者に緊張を強ひる文体である」¹⁰という評価の中で、そのまま踏襲され、それに留まっているように思われる。

つまり瀧井作品における独自の文章を駆使した私小説的特徴は、これまで様々な文章の中で反復され、強調されてきたが、その具体的な作品分析は、『無限抱擁』を除けば、十分になされてこなかった。¹¹また、1920年に『改造』の記者として知り合つて以来、志賀直哉を生涯の師とし、志賀死後の『志賀直哉全集』出版にも関わるなど、瀧井の文学は志賀の影響下にあつたともいえるほどであつただけに、瀧井作品における志賀作品との関係性に言及するものも少なくない¹²が、その実態を浮き彫りにしている論稿はあまり見当たらない。

⁹ 小林秀雄「作家論・瀧井孝作」（『瀧井孝作・外村繁・尾崎一雄・上林暁集』、1929年）

¹⁰ 山本健吉「瀧井孝作集・作品解説」（『瀧井孝作・尾崎一雄・網野菊集』、1966年）

¹¹ 『無限抱擁』に関する主な論稿としては、近藤富「瀧井孝作『無限抱擁』論—写生的方法をめぐつて」（『国語と国文学』、2010年9月）のような文章についての論考や、作品内容に重点をおいた秋口千草「瀧井孝作『無限抱擁』を読む—松子の『精神』と母の『因襲』から」（『立命館文学』、2006年2月）のような論稿がある。『無限抱擁』を除く作品論については、近藤富「瀧井孝作『結婚まで』試論—身体とエクリチュール」（『文藝と批評』、2007年5月）や俳諧との関係性で論じられた藤田祐史「瀧井孝作『野趣』論：小説と俳諧」（『名古屋大学国語国文学』、2017年11月）などが挙げられる。

¹² 例えば、前掲した茶川の文章の中略した部分には、「成程志賀さんの作品などに比べれば」との一節が見られる。また小林も同じく前掲の文章にて「例へば志賀氏の文章の

このような問題意識から、本稿では「父」を取り上げることで、志賀直哉の〈私小説〉を瀧井がどのように理解し、自分の作品に取り入れていったのかについて考察を行いたい。

2. 瀧井孝作における〈私小説〉

「父」の考察に移る前に、瀧井孝作の私小説観について見ておきたい。以下は、瀧井の戦後のエッセイ「私の文学修業」（『文藝往来』、1949年7月）からの引用である。

私小説というものが目の敵のように云われたが、西洋風の小説ばかりでなく、小説らしくない私小説も面白いのではなかろうか。私自身でなければかけないもの。どうしても書いておきたくて書くもの。小説の形を真似たものでないもの。小説は、範囲のせまい限られたものではないから、私小説は、小説の範疇をひろげるもので、むしろ、進んだものもあるわけで、小説らしい小説、虚構のからくりの才気に見える小説も、面白さではよいだろうが、私は自然の一コマでも現れた、何気ない際立たない奥行きのある自然の感じに、敬服する方です。私小説は、事柄が平凡のみとは限られず、事柄が異常の場合もあってそれも書かれるわけですが、どちらにしても、真実な表現で、心のこもったものが肝心で。

「父」が発表された1921年とは時期的な隔たりはあるが、瀧井が同じ文章の中で、以前に書いた「文学的自叙伝」¹³の、「京都に二年半、奈良に四年半（稿者註：志賀が住む近くに移住し、文学修行をしていた時期を指す）、これ

明確を見る事は易い、だが、この明確な文章の朗然たる響きを聞く事は難いのだ」と指摘している。このように、瀧井作品の比較対象として志賀の作品を取り上げる評論がしばしば見受けられる。

¹³ 瀧井孝作「文学的自叙伝」（『新潮』、1936年5月）

はぼくの留学時代だと思っている。何の勉強したかと云われると、(中略)

『自然は昔も今も変りがない』この悠久が分った。そして作家としては、書くものは曲げずに歪めずに自然に做えばいいとハッキリ思うようになった」という自身の言葉に対して「私は、この心持は、今も些もかわりありません。自然にならえばよい、自然は立派な手本で、汲んでも汲んでも尽きない、美しいものがある」と述べている点から、引用部を瀧井の私小説観として見て差し支えないだろう。

ここで瀧井は<私小説>が取り扱う内容には、小説の範疇をひろげるものがあるとし、<私小説>を理想的な小説の形として肯定的に捉えている。これに加えて、次に挙げる資料からもうかがえるように、瀧井は志賀の作品から「本来の小説のワクからはみ出した」「小説として手法発想に、画期的なユニークなものがある」点に注目している。つまり、瀧井は志賀作品の、<私事>を彼特有の「手法発想」の中に織り込ませているという面を高く評価しており、彼にとって<私小説>の理想的な作家のモデルとして志賀直哉の存在があったことがうかがえる。¹⁴

¹⁴このような瀧井の発言には、芥川の志賀直哉観に通じる部分があるように思われる。例えば、芥川が自分の「初めて書いた評論」とする未定稿「志賀直哉氏の短篇(断片)」(『芥川龍之介未定稿集』、岩波書店、1968、その内容から1914-15年頃に書かれたものと推定される)では、「志賀直哉氏の短篇を一貫してゐる特色は、一言にして云へば知的な事である。氏の作品は、どれを見ても、巧妙なる建築家の手になった設計のやうに、整然たる面目を備へてゐないものはない。一読しただけでも、如何に作家が隅まで目を配って、油断なく組上げた作品だが、どの行を消しても、全体の釣合は破れてしまふ。又、どの行を加へても、矢張全体の釣合が狂つてしまふ。云はば、作全体が一つの方程式になつてゐるやうなものである。(あらゆる任意の加減乗除はこの式を破壊してしまふ。)」と「小説の方法」の面を評価しており、このような評価は、晩年の「文芸的な、余りに文芸的な」(『改造』1927年)でも見られる。また、「文芸的な、余りに文芸的な」での「志賀直哉氏は描写の上には空想を頼まないリアリストであ

これらの作品を調べてくると、志賀さんの作風は、本来の小説のワクからはみ出したところがあり、小説のワクをずっとひろげた、画期的の作家だともいえるのです。¹⁵

それから私は、小説というものが分ってくるにつれて、志賀さんの作品は、小説として手法発想に、画期的なユニークなものがあると考えようになりました。小説の方法に新分野を開いたものと見ました。¹⁶

一方、瀧井は「処女作『父』について」（『文章倶楽部』、1924年6月）の中で、「父」の創作過程において、芥川龍之介¹⁷に各章を見せて細かいところまで批評してもらった¹⁸ことを明らかにしており、本作品に熱意を込めてい

る。その又リアリズムの細に入つてゐることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一点を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしにトルストイよりも細かいと言ひ得るであらう」という評価は、瀧井の「書くものは曲げずに歪めずに自然に倣えばいい」という理解に近いと言えよう。

¹⁵ 瀧井孝作「志賀直哉ベスト・スリー—『和解』『暗夜行路』『いたづら』—」（『毎日新聞』、1954年8月2日）

¹⁶ 瀧井孝作「志賀さんの作品〈アンケート「好きな小説感激した場面」の回答〉」（『新潮』、1955年9月）

¹⁷ 本文でも述べたように、瀧井の作家活動における志賀の影響について言及するものは多く存在するが、芥川と瀧井との関係性を指摘するものは見当たらない。このような二人の創作活動におけるつながりは、両作家の作品を読解する上で、また両作家の志賀直哉観を理解する上で重要な手掛かりになるだろう。この点については、本稿では詳しく取り上げないが、今後の課題にしていきたい。

¹⁸ 「書き出したのは前年の秋で、最初（一）だけ出来、芥川さんに見せた処、其剛い文章を賞され「この調子でゆけば文壇近年での収穫であらう」とまで激励されたのでした。それから二、三と一章づゝ出来ると芥川さんに見て貰ひ色々の細い点まで批評して

たことが分かる。また、「父」は、瀧井自身「処女作」であることを繰り返し強調しているほど、前作「弟」が同じ「回想記」でも日記のように時系列に沿って地の文を中心に構成されるのとは大きく異なっており、一連の「父親もの」の中でも最も小説的構成に重点を置いた作品であることから、瀧井孝作にとって重要な意味を有する作品であると言える。

本稿では、瀧井孝作による志賀作品受容が方法的なところにあったことを踏まえつつ、「父」と志賀直哉の『和解』¹⁹を、その方法の面から比較し、考察を続けていきたい。

3. 志賀直哉『和解』からの影響

瀧井孝作は「処女作『父』の回想」²⁰の中で、「私の処女作『父』は、志賀さんの『和解』の骨子眼目、父子の異和としまいの和解、これに倣って書いた.....。私は、長男だが、家出をして、老父は田舎ぐらし、それがいつも頭に往来して、父子と家督、老父扶養の問題は切実で、私は後年になって、
「父」と同じやうな題材の作を幾つも書いた」と述べている。このように本作品は『和解』の「骨子眼目」に倣っていることが明らかにされており、また、志賀直哉の場合と同様、父との不和及び和解が瀧井の創作活動に多大な影響を及ぼしたことがうかがわれる。では、瀧井は『和解』のどのような面を高く評価し、自分の作品に取り入れたのだろうか。

貰ひました。さうして殆ど一年間かゝって漸々と出来上つたのです」。（「処女作『父』について」、『文章倶楽部』、1924年6月）

¹⁹ 1917年10月1日発行の『黒潮』第2巻第10号に掲載

²⁰ 『人間・復刻版別冊』、日本近代文学館、1975年

瀧井は志賀の『夜の光』に収められた諸作品に大きく影響を受けており²¹、その中でも『和解』に代表される<私小説>としての試みに多く言及している。とりわけ『和解』に関しては、「父と子との、当時の旧思想と新思想との摩擦、父と子との反発、そこに酔された不和の、和解に至る経路を描いた」²² 作品として、「弾力のある緊張味」²³を以って、「初めの父と子との自我のイガミ合ひも、中程の赤ん坊の死も、終ひの父と子との和解」²⁴をも描き出すその構成力を高く評価していることが分かる。言い換えれば、志賀自身の発言²⁵

²¹ 瀧井は「ぼくの文章は『今昔物語』と『西鶴全集』と『夜の光』等の影響が現れてゐる」（「文学的自叙伝」、『新潮』、1936年5月）や「私は、三十年余り以前に、小説を書き習ひの時分、机の傍には、志賀さんの短編集『夜の光』があって、読むたびに、目のさめるやうな啓示をうけて、文章の強烈なリズムからは、ぢかに力づけられる気がしました」（「志賀さんの作品<アンケート「好きな小説感激した場面」の回答>」、『新潮』、1955年9月）、「どの作品も、作者の気持が対象にズカにズカに迫って、スキマがなく、力強く、文章に厚味があって、浮いた弱い所が些もない。何度読んでも新しい感じがして、私はこの本から力づけられた。—この『夜の光』は、五十年余り経って今日読んでも新しい生き生きしたものだ」（「『夜の光』<アンケート「私をもっとも影響を受けた小説」の回答>」、『文藝春秋臨時増刊明治・大正・昭和日本の作家一〇〇人』、1971年12月）などと、様々な文章で『夜の光』について言及している。

²² 瀧井孝作「志賀直哉ベスト・スリー—『和解』『暗夜行路』『いたづら』—」（『毎日新聞』、1954年8月2日）

²³ 瀧井孝作「志賀さんの作品<アンケート「好きな小説感激した場面」の回答>」（『新潮』、1955年9月）

²⁴ 瀧井孝作「『夜の光』<アンケート「私をもっとも影響を受けた小説」の回答>」（『文藝春秋臨時増刊明治・大正・昭和日本の作家一〇〇人』、1971年12月）

²⁵ 「創作余談」（1928年）において、志賀直哉は「『大津順吉』『或る男、其姉の死』『和解』これは材料の点から云って一つ木から生えた三つの枝のやうなものである。

や多くの先行研究において、『和解』がその内容の面から〈私小説〉として分類され、評価されてきたのに対し、瀧井による同作品の理解は、より構成や方法の面に重点が置かれていたのである。これは、瀧井自身が「父」の制作過程において、芥川に「色々の細い点まで批評して貰う」など、文体と構成にこだわったということにつながるだろう。ここまで確認した瀧井孝作の文体や構成へのこだわりを踏まえながら、次章では「父」を読み解いていきたい。

4 「父」について—志賀直哉『和解』を補助線に

4.1 「父」のプロット

まず、「父」のプロットを確認しておきたい。

第一章 現在—過去の回想（明治三十四年～大正七年）—現在

正午の針がやや傾く時刻、「私」は母に関する不吉な電報を確認する—「私」の子供の頃の記憶～三度に渡る帰省—母の死を知らせる電報を再度確認する「私」

第二章 現在 自転車で郷里に向う「私」

第三章 現在—過去の回想（三度に渡る帰省）—現在

母の葬式後、父と「私」、父と叔母との不和を中心に展開

第四章 現在—過去の回想（帰省①）—現在

「私」の父への理解と二人の和解

一方、「父」の出来事を時系列に沿って整理すると、①「私」の生母が生きていた頃から、その母や兄、祖父、末の弟と祖母が亡くなり、父が二度目の後妻を迎えるまでの明治三十四年十一月～大正二年の六月末②大正三年四月、大正六年五月、大正七年七月の三度に渡る「私」の帰省③母の死を知らせる電

『大津順吉』と『和解』は事実、『或る男、其姉の死』は事実と作り事との混合である」と述べている。

報を確認し、郷里に帰った「私」と父との不和から和解までを描いた現在の順になる。

本作品のプロットだけを見ると「父」は「作品内部の時間が錯雑し」、やや複雑な構成を取っているように思われる。しかし、明治三十四年十一月～大正七年七月までの「回想部を抜き取って読めば」母の死から帰郷、父との不和と対立、和解という「少しも難解ではない」流れが確認できることも事実である。「父」の時間軸に関するこうした把握のあり方は、『和解』の時間についての先行研究の議論²⁶に、そのまま当てはまる。

『和解』を起こった出来事の時間の流れによって整理すれば、①一昨年の「自分」と父との衝突、昨年の慧子の出産と死、留女子の出産を描いた三章～十章②現在であり慧子の一周忌にあたる一章～二章③「自分」と父との和解を描いた十一章～十六章という順になり、①の回想部を除いては、時系列に沿っている。また、『和解』と「父」は主人公と父との不和と和解への過程を、それぞれ慧子の死、義母の死という別の軸の中に織り込ませている点でも一致している。言い換えれば、「父」における不和を深刻化させる機能をする義母の死や回想部の使い方は『和解』における慧子の死についての回想部の使い方に酷似しており、このような両作品の不和から和解に至る構成などから、志賀の影響がうかがえる。

²⁶ 下岡友加（「志賀直哉『和解』論—劇的な<和解>を生成するもの—」、『近代文学試論』、1999年12月）によれば、「『和解』の時間については、『時間的関係の処理が簡単ではなく、それがすらすらと理解されにくい』（須藤松雄氏）との批判がある一方で、『読み取るのに「難解な点」などどこにも生じてはいない』（山田有策氏）との反論もなされている。また、『作品内部の時間が錯雑し、一読明瞭というわけには行かない』が『挿入部を抜き取って読めば少しも難解ではない』（本多秋五氏）といった見解も存する。

4.2. 和解の立会人を必要とする主人公たち

「父」では、作品末尾における「私」と父の和解の場面において、薄島、和次郎叔父、土野の伯母夫婦が同席しており、「干鳥賊を裂いて肴に、火燵で親類等が盃を嘗めあ」うことで、二人の和解をより堅実なものにしている。同じく『和解』における叔父と祖母の和解の保証人としての存在は見逃せない。叔父は父と「自分」との和解の場に同席し、作品末尾に「自分」宛ての手紙²⁷を送ることでその役割を果たしている。「自分」にとって実母に代わって心の頼りにしていた祖母もまた、「腹から気持よさそうな顔を見せ」ることで、保証人としての役割を果たしたのである。

このような役割は、語り手の「私」と「自分」の必要性によってそれぞれ設けられたものであり、彼らは和解の立会人という存在を設けることにより、自分たちの和解を確かなものにしたのである。

「お父様にたまには酒の肴になる味いものでも送りなさい、ほんの僅か送っても喜ぶから、そうして置けば父様へわたしから善く言うことが出来るから……」何かの手紙の折に斯母は認めて来た。其様な心遣して父から私の衣服の費用を出させた。

……父様もこの頃気が弱くならしやった、と年寄った人の傍からいつか母の手紙が来た。老境でようやくあの剛い父の心が折れるのかと思つて、私は其時胸に泌泌するものを感じた。

²⁷ その内容は「先日の和解は全く時節因縁と深く感じ申候。父上も此度は大丈夫だろうと話された。君の手紙でも一時的の感じでもないと言う事もあるし、拙者も其場で左様感じた」とある。

一方、「父」における義母は、引用部からうかがえるように『和解』における父と「自分」の間に挟まれた存在としての母²⁸と同様、父と「私」との仲が悪化しないように努め、仲立ちをする存在として描かれている。また、叔母は「私」の三度に渡る帰省の回想場面に毎回登場し、「私」が感情的に寄り添う対象でありながら、父の不和と和解にも直接関わっている点から、『和解』の祖母の存在²⁹を連想させる。このように、両作品ともに、語り手が自分たちの不和と和解の過程に様々な人物を立会人として設けているという点は注目すべきであろう。

4.3. 居場所を失った「私」の孤独

瀧井孝作は、「志賀さんの生活」（『東京新聞』、1973年5月）の中で、

²⁸ 『和解』において母は、「母を呼び出すと、父は小さい連中を連れて箱根の別荘に行っていて、今日帰る筈だが今は祖母と二人だけだからよかったら、直に来てくれという事だった」という場面や「母は小声で、『お祖母さんもネ、此御様子ならもう心配はありませんから、今日はどうかこれで帰って下さい。ねえ、どうか気を悪くしないで。

（中略）こう云う御病気の中で若しお父さんと衝突でもするような事があると、それこそ、何よりの不孝になるのですから（中略）今はどうか止めて。兄さんの気持も落ち着いた時に穏やかに手紙で書いて上げて下さい」などの場面からうかがえるように、「自分」と父の不和が続いている間は、その関係が悪化しないように努め、「自分は母に命名を祖母に頼む事を頼」むなど、「自分」と実家をつなげる役割を果たしていることが分かる。

²⁹ 主に、十三章に描かれるように、「自分」にとって祖母の病気は「非常に心細い気をさし」、胸が痛む事であり、「自分」は「祖母の死を恐れ」ていることが分かる。またそれは、書き直している「夢想家」の「調子まで狂わしかねない」ほどであることから、「自分」の精神的な面において祖母の存在は大きいものであったと言える。

志賀さんの明治四十五年一月十日作の、「母の死と新しい母」は、一と晩で一氣にできた十八枚の短篇で、この表題も好いが、新しい母に対する素直な悦びの明るい名作で、大正三年作の未発表十二枚の、「或る男と其姉の死」と、同じく十九枚の、「死ね/ \」は、暗い深い深い孤独感の名作で、両親両親両親のラクガキからも、私には、涙ぐましい感じがした。志賀さんは、生母が居たら、といつも思はれたやうで、私も数へどし十三の春、生母が病死した方で.....。志賀さんの作品には風景描写が多いが、風景好きは孤独のせゐと思ふが、淋しがりやを口には出されなかった。

と志賀作品への感想を述べており、志賀作品における生母への思いを自分の状況に引きつけて考え、そこから生じたであろう<孤独感>について言及している。この<孤独感>はこれから考察する「父」における「私」と父との不和及び和解の経緯において重要な手がかりとなる。

而して、陸のものの刈株が既に色が変わり、私の願わない夕闇が眼を離す隙なく斯田舎のうえを閉ざし、馴じまない土地で、私は自転車のペダルを踏んでいたが、昼の明さを断切った、厳格な夜が咫尺を塞ぎ、私は一歩も動けなくなっていた。

引用部のように、第二章は母の葬式のため自転車で郷里に帰る私の道中の写生的な場面が一つの章を占めており、物語の展開には大きく関わらない場面ではあるが、風景描写と孤独感を結び付けることにより、居場所を失った「私」の孤独感を表わしていると理解できよう。

「父」における孤独の情緒は第二章に限られるものではない。本節では、作品全体における「私」の淋しさと父との不和との関係性について詳しく考察したい。本作品の中で、幼い「私」にとっての実母は、「兄を大事にし」、「妹には乳を離さないで惹かれた」が、自分には「幾分疎い存在であつ

た。その母は、三人兄弟のうち自分だけを父の手に残して、兄と妹を連れて家を出て行った。実母と兄の死後は、父が妹だけをかまいがり、どこまでも「私」とは直接話そうとしないので、「私」は疎外される気持ちを感じ、腹立たしく鬱屈していた。また、妹はこのような両親の最良には「眼が鈍く」気づかない存在であり、「私」の疎外感が増していくのである。つまり、作品全体において、郷里の飛騨高山の存在が「私」にとって「後に取残された」ものとなるまで、「私」を疎外し、淋しくさせる存在として実母、兄、父、妹が描かれているのである。

一方、これらの人物とは対照的に、「私」に愛情を注ぐ存在として義母と叔母が描かれている。

其朝食膳の上に浸し菜があつて、之は此帰省中毎日食膳に上つたが、斯母が裏の畑の畝から手折つて来た、自作の茎立菜であつた。(中略) 左ういふ小包を開く折に、私にはいつでも裏の菜畑が油然と目に浮ぶのであつた。(中略) 斯家の内で、不意に一人が欠けた、跡方なく奪去られた、其責を何処へ持つて往つていいのか？

引用部からもうかがえるように、<家族>から疎外感を感じ、実家から身も心も離れた「私」にとって、自分に愛情を注いでくれる義母は、郷里と自分をつなげてくれる糸のような存在であつた。その義母の死は、「私」に大きな喪失感を抱かせ、父との不和に必然性をもたらしている。

幼い時生母を失ふた私共同胞はずつと斯叔母の世話になり、殊に私は叔母の手許へ惹付けられがちであつた。叔母に慕しさと恩義とを、私自身其当時のまま感じてゐるのである。(中略) 私は叔母の気持にグイグイひきずりこまれるやうな気がした。子供達が内が淋しからうと思つて……、この叔母と同じ気持になつて、而して斯しんみりした気持を顧みない、父が無性に情けなくなつた。

それから、「私」に愛情を注ぐもう一人の人物としての叔母の気持ちに「私」の気持ちは「ずり込まれ」る。その叔母と父との不和は、そのまま「私」と父との不和へとつながっている。

つまり、実母と兄が亡くなることで深まっていき、義母の死後に激化する父に対する「私」の反感や作中に描かれている人物間の隔たりは、「私」の<家族>からの疎外感及び義母を失くした喪失感に起因するものであると言えよう。このような「私」の心境に起因する人物間の隔たりは、第二章に漂う孤独感とともに瀧井が志賀直哉の作品群の中から読み取ったものに該当する。

では、瀧井はこうした「私」個人の孤独感を、どのような「手法発想」で本作品に織り込ませているのだろうか。次節では、これについて詳しく見ていきたい。

4.4. 「私」から見た父の孤独

「私」は自分を「同じ家の者と思って」いない父の態度に傷つき、彼が自分を誤解していることに反感を覚える。しかし、「私」の父に対する反感は単純なものではなく、一方で父の自分に対する他人扱い、誤解を恐れていることが読み取れる。また、父に対し、相反する感情を抱く「私」の語りの中で、父は「私」と同様、「床の上で尿を」したことがほのめかされ、祖母の死後すぐ後妻を迎えるなど他人との関係性の中で孤独感に敏感な存在、「私」を含む他人から「後に取残され」ることに不平を抱き、そのことを恐れる存在として描かれる³⁰。すなわち、「私」は父を自分と似ている存在として描き出しているのであり、父と「私」の不和の原因の一端としてこうした父の孤独感が挙げられるのである。

³⁰ 「其風で父は、一層非道く私に不平を抱いてゐる。息子の私が、一人の父の傍にゐようとせず去ってしまふ。これは私が死者でないだけに、父の心は折折憤りにまでなつて、私に向つて来る」という場面などがこれに該当すると言えよう。

「私」は「父がきょうになって困憊した寧ろうろたえとる、其心根が叔母にはわからぬのである」と叔母や他人には分からない父の孤独感に対する理解を示している。また、作品全体を通じて不和が描かれる一方、年老いた父に対する同情の眼差しも看取される。³¹「私」の語りによって作られた父と自分との間の〈孤独感〉という共通性、その感情への理解から二人の関係性は不和を経て和解にたどり着くのである。

『和解』における和解も「自分」の心境による側面が大きい点で「父」のそれと近いと言えよう。

「京都の事はお気の毒な事をしたとは思って居ます。あの頃とはお父さんに対する感情も余程変って居ます。然しあの時私がああした事は今でも少しも悪いとは思って居ません」こう答えた。

「これまでは、それは仕方なかったんです。それはお父さんには随分お気の毒な事をして居たと思います。或る事では私は悪い事をしたと思います」

「うむ」と父は肯定いた。自分は亢奮からそれらを宛然怒っているかのような調子で云っていた。

(中略)「然し今迄はそれも仕方なかったんです。只、これから先までそれを続けて行くのは馬鹿気にいると思うんです」

両場面における「自分」の台詞に大差は見られないが、その結果は不和と和解という正反対の結果につながっている。この原因として、和解の時期が慧

³¹ 「父の顔がいたましかった。老眼が小さく縮んでゆくやうな深い皺だった」、「父に向はふとする私の心は挫けがちで、私は弱く意気地がなくなる気持のはうへ自身逐ひつめられるのを感じた」、「老境でやうやくあの剛い父の心が折れるのかと思って、私は其時胸に沁沁するものを感じた」という場面などからうかがうことができる。

子の一周忌であり留女子の出産後であること、「夢想家」などの創作活動が盛んになったこと、祖母の衰弱していたことなどが挙げられよう。留女子の出産もあり、創作活動が進むことにより、「自分」は自分の中の平和を取り戻しつつあったことや、衰弱した祖母への「自分」の格別な思いがあったからこそ「自分」と父との和解が達成できたのである。

このように、元来、それぞれ「私」と父、「自分」と父という対人関係に基づくべき<不和>や<和解>という問題を、主人公たちの個人的な心境の変化によるものとして描くという方法を、「父」と『和解』は共有しているのである。この点は、瀧井による『和解』受容の一端を示すものとして理解されよう。

5. おわりに

志賀と文壇、『白樺』同人との関係性から、『和解』はその中に表われる調和性が文化的・文学的状況と結び付けられ、解釈されてきた。³²これに対し、瀧井孝作が「父」において志賀直哉から受容したものは、回想部や家族の死などの別の軸を織り込ませたプロットの構成や語り手による立会人としての登場人物の使い方など、より方法的なものであった。また、その影響は、不和から和解に至るまでの経緯を貫くものとして、人物間の問題ではなく、主人公の心境の変化を据えている点などにも見られた。つまり、志賀の<私小説>において、作中の全ての問題やその解決は自然に<私>個人に還元されるという「手法発想」を瀧井は摂取したのである。瀧井によるこうした志賀受容は、芥

³² 徐己才は『和解』について、大正期における雑誌『白樺』とその人道主義との関連性から「このような文化的、文学的状況の中で誕生した『和解』は、人格修養との内容的関わりを持つことと同時に、近代の装置としての機能も持つてしまうのである」（「志賀直哉の『和解』論」→造られた<和解>）、『名古屋近代文学研究』、名古屋近代文学研究会、1998年）と述べている。

川の指摘³³しているように、志賀を摸倣する作家の作品群とはその着眼点から異質なものであり、不和から和解という「骨子眼目」をただ摸倣するだけでなく、「私自身でなければかけないもの」として理解し、自分の作品に取り入れている点などから瀧井作品の独創性を見いだすこともできよう。

最後に、本稿では、瀧井孝作の作品における志賀直哉の影響という面に専念し、志賀以外の作家からの影響や文壇の動向との関係などについては、さほど論及し得なかった。しかし、瀧井自身が「父」創作について、芥川龍之介からの直接的な影響に言及している³⁴ことなどを踏まえると、志賀以外の存在や事柄へと視野を広げたときに、瀧井孝作や彼の作品について新たに見えて来る問題は少なくないようである。この点については、今後の課題としていきたい。

<付記>

「父」の引用は、『瀧井孝作全集・第一巻』（1978年、中央公論社）、『和解』の引用は、『志賀直哉全集・第三巻』（1999年、岩波書店）に所収の本文に拠った。

³³ 芥川は「瀧井君の作品に就いて」（未定稿、1926年6月、『芥川龍之介全集・第十三巻』（岩波書店、1955年）収録）において、「わたしは瀧井君の作品をユニイクであると言ひました。ユニイクであると云ふ意味は誰も外に真似手のない価値を持つてゐると云ふ意味です。瀧井君の作品は決して志賀さんの作品を摸倣したばかりでは出来ません。寧ろ志賀さんの作品を摸倣した人々の作品よりも異色を持つてゐることこそ瀧井君の作品の身上なのです」と指摘している。

³⁴ 瀧井孝作「処女作『父』について」（『文章倶楽部』、1924年6月）

「妹」の登場
—宮沢賢治受容におけるトシの扱い—
The Emergence of “Toshi”
— The Role of MIYAZAWA Kenji’s Younger Sister
in His Reception as an Author —

服部峰大*

大阪大学大学院日本文学専門分野 D2

要旨

本稿は、多様な宮沢賢治受容を考察する一環として、妹トシの受容の変化を考察するものである。宮沢賢治について考える時、偉人、田舎、宗教といったキーワードと共に、彼の妹であるトシを思い浮かべる人は多いだろう。国語教科書の教材「永訣の朝」で有名なこの妹は、小説、ドラマ、映画等、様々な場所で賢治と共に描かれてきた。

本稿では、戦前、注目度の低かったトシが、いかにして注目され、現在のような、賢治と分かちがたい存在へとなっていったのかを、トシの語られ方を考察することで、明らかにする。また、トシの扱いの変化が宮沢賢治受容の中でどのような意味を持っていたのかについても考察する。

キーワード：宮沢賢治、宮沢トシ、作家像、受容史、1950年代

* HATTORI Takahiro, graduate student, Osaka University

e-mail : minedai4180@yahoo.co.jp

Abstract

This study examines changing perceptions of MIYAZAWA Kenji's younger sister Toshi as one of a variety of factors influencing MIYAZAWA's reception as a writer. Together with associations of greatness, rural life and religion, Toshi also no doubt comes to mind when many people think of MIYAZAWA Kenji. Famous for appearing in the poem *Eiketsu no Asa* (Morning of the Final Farewell), a fixture in Japanese textbooks, Toshi has frequently been depicted as Kenji's companion in novels, television shows, films and other media related to the author.

This study seeks to examine and reveal how Toshi, who received little attention in MIYAZAWA scholarship before the war, came to be treated as the inseparable presence in Kenji's life that she has become today. Moreover, it examines the significance of changing perceptions of Toshi in relation to MIYAZAWA Kenji's reception as a writer.

Keywords : MIYAZAWA Kenji, MIYAZAWA Toshi, characterization of the author, reception through history, 1950s

1. はじめに

宮沢賢治は実に多様なイメージを持った作家である。例えばそれは、「雨ニモマケズ」に代表される自己犠牲の偉人であり、東北の自然を愛した詩人であり、早逝した妹の死を哀しむ兄である。さらには、銀河、宗教、音楽、劇等、様々なキーワードが思い浮かぶ。なぜ賢治はこんなにも様々な特徴を持っているのだろうか。それは、生前、ほとんど無名であった賢治が、死後、様々な意図を持った多様な紹介者たちに紹介されることで国民作家になっていた事と無関係ではないだろう。では、具体的に賢治はどのように受容されて来たのだろうか。既に多くの研究がなされている宮沢賢治の受容史を年代順に確認したい。

宮沢賢治の初期受容は、賢治の死の翌年である1934年、岩手日報において、宮沢賢治天才言説が「宮沢賢治全集予約申込規約」と共に掲載されたことに始ま

る。この言説に影響を受けた人々が日本各地で賢治の会を作り、天才言説を下地とした賢治像が全国に紹介されていく¹。

1942年には、大政翼賛会文化部編の『朗読詩集、常盤樹他十二篇』に「雨ニモマケズ」が掲載される。解説には「この「私」を滅した、はからひや高ぶりの無い境地に人は容易に到り得ない。しかし斯ういふ人にして始めて万人の真の友たり得るのだといふことにわれわれはだんだん気づいてくる。この詩人は岩手県の農民のためにその一生を捧げた。」²との言葉があり、桑原三郎は、戦時色の濃い時代の要求に「雨ニモマケズ」の私を滅した境地が一致したと指摘している³。

戦後、宮沢賢治は国語教科書にその作品が掲載されることで再び知名度を高めていく。1950年代半ばには、伝記教材として扱われ、宮沢賢治は自己犠牲の人物像を再び全国へ広めていく⁴。

また、吉田司は年代ごとの賢治受容を以下のように考察している。賢治が次第に聖者化していく1950年代。出版業界と遺族、お抱えの執筆陣の学者がワンセットになった、権威が作った賢治イメージが普及する1960年代。様々な人の手作りの賢治像が流行し、後のエコロジーにつながっていく1970年代。聖なる賢治イメージが誇大化し、宮沢賢治が国民作家となる1980年代。そして、宮沢賢治生誕百周年が行われ、多様な賢治イメージが全国に広がっていく1990年代⁵。

受容史を確認すると、宮沢賢治が偉人像を保持しつつも、実に多様な受容をされてきたことが確認できる。ここで一つの疑問が思い浮かぶ。それは、戦前、時代の要求と合わせて読まれていた賢治が、なぜ何の問題もなく戦後に読み継がれたのかという疑問だ。賢治が再び全国に定着を始めた1950年代、そこには新たな賢治像を模索する動きがあったのではないか。

1 米村みゆき (2003) 『宮沢賢治を創った男たち』、青弓社

2 大政翼賛会文化部編 (1942) 『朗読詩集、常盤樹他十二篇』、翼賛図書刊行会

3 桑原三郎 (1987) 『少年倶楽部の頃—昭和前期の児童文学—』慶應通信

4 葛西まり子 (2008) 「伝記教材の中の宮沢賢治」、『国文学解釈と教材の研究第53巻13号』、學燈社

葛西は伝記教材が無くなった現在(平成16年)、宮沢賢治は、環境問題などを背景に「生き物」を尊重する作家へと変化していると考察している。

5 吉田司 (2002) 『宮沢賢治殺人事件』、文芸春秋

本稿では、現在、賢治と共に描かれることの多い妹トシに着目し、戦前から1950年代までのトシ紹介を比較することで、トシが如何にして注目され、受容史の中でどのような役割を担っていたのかを明らかにする。

2. 現在のトシの扱い

初めに、トシが現在どのような人物として扱われているのかを確認したい。『宮沢賢治大辞典』はトシについて、「賢治の二歳下の妹。明治三十一年。（一八九八）十一月五日生まれ。（中略）大正十一年（一九二二年）十一月二十七日死去（享年二十四歳）。（中略）賢治のトシに対する思いは、詩「永訣の朝」をはじめとする挽歌群からキリスト教色で彩られた童話『銀河鉄道の夜』まで及んでいる。そこには、賢治がこのように逆境の中で悩みつつも自己を成長させ誠実に生きようとしたトシの心の内を見つめ、自らをトシの「信仰を一つにするたつたひとりのみちずれ」（無声慟哭）として認識を深めながら、愛する妹の死後の行方を探し求めた姿を見出すことができる。」⁶と解説している。トシは逆境に負けず、誠実に生きた人物とされ、賢治はそんなトシの内面から強い影響を受けたとされている。この、誠実、逆境の中で自己を成長させるといった人物像は、偉人としての賢治にも当てはまる人物像であり、トシと賢治の人物像の類似が窺われる。

また、トシは当時としては珍しく日本女子大学を卒業した人物であった。トシはその高学歴故に、自律的な女性観、人間としての使命感を持ち、わが道を生きた人間として、『近代史を拓いた女性たち』⁷で紹介されている。

『宮沢賢治コレクション 6 春と修羅 詩 1』⁸の帯には、「「あめゆじゅとてちてけんじゃ」最愛の妹トシとの死別に際してに創られた「永訣の朝」をはじめとして」との言葉が記載されており、『春と修羅』収録の他有名詩を押しつけ「永訣の朝」が紹介されている。また、トシに対して「最愛の妹」との言葉が使われ、賢治とトシの間に深い関係があったことを連想させる。

⁶ 山根智子（2007）「宮沢トシ」渡部芳紀『宮沢賢治大辞典』、勉誠出版

⁷ 青木生子（1998）『青木生子著作集第10巻、近代史を拓いた女性たち』、おうふう

⁸ 宮沢賢治（2017）『宮沢賢治コレクション 6、春と修羅、詩』、筑摩書房

賢治とトシの深い関係は、宮沢賢治を題材にした、アニメ、ドラマ、映画、小説等の作品で様々な形で描かれて来た。宮沢賢治生誕百周年記念作品として1996年に放送された、『イーハトーブ幻想、KENJIの春』のVHS表紙では、賢治とトシが寄り添い合って手を取り合う姿が描かれ、お互いを支え合う姿が確認できる。2017年WOWOWで放送された魚及目三太の漫画を原作とするドラマ、『宮沢賢治の食卓』第一話試写会では、監督、賢治役、トシ役の三人が舞台挨拶を行い、賢治とトシが主役として扱われていたことが窺われる。さらに、ドラマ最終回は、トシの死を描く「天上のアイスクリーム」だが、原作では、トシは全10話中3話で死亡しており、最終話は、生徒の家の大根めしに衝撃を受け、農学校を辞めることを決意する「西洋料理と大根めし」であった⁹。原作と比べ、ドラマではトシが一層、重要視されていることが窺える。

現在トシは、賢治の最愛の妹であり、誠実な褒められるべき人格を持ち、まるで恋人のように、賢治を支え、導く人物として描かれている。

山下聖美は「妹」というキャラクターについて、柳田国男の『妹の力』を参考に、「妹」という言葉そのものが、兄妹相姦、兄を支える霊的存在、恋人の呼び名を連想させるとし、トシが聖女として語られてきたと評している¹⁰。

確かに、「妹」という言葉の持つイメージはトシにも影響を与えたはずだ。しかし、トシは賢治の名が知られ始めた当初から、褒められるべき人格を持ち、兄を支える特別な妹として描かれていたのだろうか。もし、トシの扱いが、ある時期を境に変化していたのならば、それは「妹」という言葉が持つイメージよりも、宮沢賢治の受容の一つとして、現在のようなトシ像が登場したと言えるはずだ。

3. 戦前におけるトシの扱い

3.1 賢治紹介の中のトシ

⁹ 原作でもトシは冒頭から、亡くなるまでの全話に登場し、賢治の相談相手として重要な位置を占めている。

¹⁰ 山下聖美 (2008) 「妹」というキャラクター—その系譜から、宮沢賢治、尾崎翠の作品をめぐって—『日本大学芸術学部紀要第48号』、日本大学芸術学部

戦前、トシはどのように扱われていたのだろうか。

トシを紹介した初期の文章として、宮沢賢治の母方の従弟にあたる宮沢幸三郎が賢治について回想した「スーヴェニール」¹¹が挙げられる。この回想では、祖母が亡くなった際、賢治が一晩中お経を読んでいたという話の後に、トシが死亡した際にも賢治が出家しようとした話が語られ、賢治の宗教性が紹介されている。その中で、トシの人物像は「としさんは目白の女子大学を一番で卒業された(中略)としさんはやさしい方で何時までも側について居たいほど親しみ深い方だった。そして理性的に洗練された女性にのみ特有のあのすつきりした清楚さと物分かりのよい素直さがたとへ様もない上品さと奥ゆかしさをとしさんの身にそなへしめて居った。」と紹介される。トシについては、当時珍しかった、女子大卒業という高学歴からくる秀才像と、その秀才さに見合う優れた性格が描かれるだけで、簡単な人物紹介に終始している。一方で、本文はあくまで賢治の宗教性や、人が嫌がることを率先して行う姿を描くことに重点が置かれている。

次に、賢治の教師時代の友人で花巻高等女学校に勤めていた藤原草郎の「宮沢賢治と女性」¹²を確認したい。本作では、賢治の女性観が考察され、賢治は絶えず、聖女、久遠の女性、叡智の女性を求めており、童話や心象スケッチにその女性像が描かれたとされる。そして、作品に描かれ、現実に存在する女性として、トシは、「この女性こそは宮沢賢治初期の最も良い理解者であつた。理想の女性でもあつた。」と紹介される。しかし、トシのどこが賢治の求めた女性の条件と一致したかは説明されていない。その後、伊藤チエ子、木村ユウ子といった女性が、賢治との恋愛エピソードが紹介され、さらに、聡明な女性、瞳の英知的なしかも純情な輝き、といった賢治の女性観との一致で描かれているのに対し、トシは作品に描かれたというだけの理由で理想の女性とされ、「無声慟哭」の一節から理解者として説明されるだけで、詳しい人物像は描かれない。

トシは、賢治の関係者として簡単な人物紹介がなされるだけの人物であり、現

¹¹ 宮沢幸三郎 (1935) 「スーヴェニール」『宮沢賢治研究一号』、東京宮沢賢治友の会

¹² 藤原草郎 (藤原嘉藤治) (1941) 「宮沢賢治と女性」『新女苑、第五号第八号』

(引用は継橋達雄編 (1990)、『宮沢賢治資料集成二巻』、日本図書センター)

在のような賢治に必須の人物としては描かれていない。

3.2 伝記の中のトシ

戦前、既に宮沢賢治は「雨ニモマケズ」に代表される偉人として扱われており、賢治についての伝記も多数出版されていた。では、伝記の中でトシはどのように扱われていたのだろうか。

賢治に花壇の設計を依頼し、友人でもあった医師、佐藤隆房の『宮沢賢治—素顔のわが友—』¹³では、トシの死後、生徒の就職斡旋に行った樺太旅行で多くの挽歌が読まれたことが紹介され、トシの幻を見る賢治の姿が描かれる。また、賢治の鋭敏な感覚に関する逸話として、賢治の枕元にトシの霊が現れた話が語られる。一方で、トシその人についての詳しい言及はなく、その死についても死亡した日が書かれ、「信仰を一つにするたつたひとりのみちずれ」との「無声慟哭」の一節が紹介されるだけで、トシがどのような女性であったのかは描かれない。本作でのトシの役割は、幻覚や幽霊を見る賢治の独特の感覚を紹介するためのものであった。

賢治の友人であり、姻戚関係にある関登久也は、『宮沢賢治素描』¹⁴の中で、入院中のトシを賢治が看病した話と、トシ臨終時の話を紹介している。看病では、賢治が甲斐甲斐しく妹の糞便の処理をした話が語られるが、その後、トシだけでなく他の入院患者の糞便まで処理していた逸話が語られ、人が嫌がることを率先して行う自己犠牲的偉人としての賢治像が描かれる。臨終では、「とし子さんは、兄賢治氏と信仰を共にする、家中でのたつたひとりの協力者であり且頭脳もすぐれて優秀な人であつたから、賢治氏もその話し相手としてどんなに力強く感じてみたことか、とし子さんとは、私は小学校の同級生であるが、(中略) 出来のよい人でした。女学校へ這入つてからも女学校始まつて以来といふ、平均点数九十五点とか八点とかのすばらしい成績で、出来るといふ評判は町中誰も知らない人がない位でした。」と秀才トシが描かれる。ここでもトシの学歴と「無声慟哭」の一

¹³ 佐藤隆房 (1942) 『宮沢賢治—素顔のわが友—』、富山房

¹⁴ 関登久也 (1943) 『宮沢賢治素描』、協栄出版社

節の引用が見られる。この文章の後、トシの臨終が描かれ、押し入れに突っ伏して泣く賢治が描かれるが、最終的にトシの死は「妹を通してあらゆる人々の最上の幸福を希つたのでせう。」と、偉人宮沢賢治像へ繋げられる。本作はトシの臨終について長い描写をしているが、トシ自身の説明は挽歌の言葉とその秀才を評されるだけで、トシの死は、全体の幸せを願う賢治に回収されてしまっている。また、ここでも樺太でトシの霊を見る賢治が描かれており、特殊な人間としての宮沢賢治像が偉人像と共に存在したことを窺わせる。

これ等の伝記と毛色の違った作品として『雨ニモマケズ』¹⁵が挙げられる。本作は「この小説は、かならずしも事実には忠実ではありません（中略）一介の小説として読んでいただいてさしつかへないのです。」と、小説であることを明示している。本作でトシは、賢治の良き理解者とされ、トシの賢治への理解を表す逸話として、病気で臥せっているトシと賢治が二人で「歓喜に奇する頌歌」を聞き、解脱境を理解したトシが涙を流す話が描かれる。一方、トシの死についての詳しい描写はなく、「永訣の朝」全文と、「松の針」「無声慟哭」の一部が引用され、最終的に賢治がトシの死の悲しみを乗り越えたとされる。本作では、「賢治のいつくしみのこころ」との言葉が繰り返し使われ、他者に優しい賢治像が描かれる。一方で、小説であるがゆえに賢治とトシの会話が多く描かれており、最終的には、「たつたひとりのみちずれ」に代表される宗教性に回収されているものの、結果として、仲の良い兄妹像が描かれている。

『宮沢賢治全集別巻』¹⁶では、父、宮沢政次郎の賢治宛の手紙が紹介され、父の賢治に対する愛情が描かれた後、「とし子さんについては、年表にも詳しくありませんからここに書きます。」とトシ紹介が行われ、いつ女学校を卒業した等、トシの簡単な年表が紹介されている。しかし、ここでも、トシがいかなる人物であったのか、賢治とトシの逸話等は描かれず、トシへの関心の低さが窺われる。

戦前のトシ紹介は、トシの学歴と学歴に見合った良い性格等、簡単な人物紹介がなされるだけで、賢治との関係についてはほとんど描かれていない。また、

¹⁵ 斑目栄二 (1943) 『雨ニモマケズ』、富文社

¹⁶ 森荘巳池 (1944) 「肉親宛の書簡に就いて」『宮沢賢治全集別巻』、十字屋書店

「無声慟哭」から引用した、信仰を一つにしていたとの言葉が見られるが、具体例はなく、小説であった『雨ニモマケズ』においてのみ、トシと賢治の宗教が重なり合うシーンが描かれる。多くの作品が、トシを通じての宮沢賢治の人物紹介となっており、トシについては簡単な情報紹介に留まっている。また、トシについて書かれた文章の多くが、賢治の身内や友人によって書かれていたこともその特徴として挙げられる。

3.3 挽歌の中のトシ

最後に、トシの死について描かれた挽歌群において、トシがどのように扱われていたのかを確認したい。

「永訣の朝」に代表される挽歌群は、宮沢賢治生前に発表された詩集『春と修羅』¹⁷ (1924年)に既に収録されており、「雨ニモマケズ」、「風の又三郎」等、多くの有名作品が賢治死後に発見、発表されたのに対し、早い段階で発表されていた作品といえる。また、賢治死後に発刊された『宮沢賢治全集第一巻』¹⁸ (1935)、『宮沢賢治名作選』¹⁹ (1939年)にも挽歌群は収録され、賢治の詩の中では比較的有名な詩であったと考えられる。

では、当時、これらの挽歌はいったいどのように評価されていたのだろうか。高村光太郎は「宮沢賢治の詩」²⁰で、「永訣の朝」、「松の針」を、「こんなにまことの籠った、うつくしい詩が又とあるだらうか。(中略)此等の詩は或る十一月の末二十五歳で永眠された妹さんに対する詩人の慟哭である」と評し、さらに方言の魅力、内面から湧き出す言葉の魅力等、賢治詩の技巧を褒めている。一方で、トシについては妹と書かれるのみで名前を含め詳しい情報は描かれない。後半部では、賢治の一生が簡単に紹介され、「この詩人の死後、小さな古い手帳の中に書き残された言葉があつた。その為人を知るに最も好適なので此処に採録して置く。」

¹⁷ 宮沢賢治 (1924) 『春と修羅』、関根書店

¹⁸ 宮沢賢治 (1935) 『宮沢賢治全集第一巻』、文圃堂書店

¹⁹ 宮沢賢治 (1939) 『宮沢賢治名作選』、羽田書房

²⁰ 高村光太郎 (1938) 「宮沢賢治の詩」、『婦人之友第32巻3号』婦人之友社

との言葉の後、「雨ニモマケズ」全文が引用されることで、偉人宮沢賢治の紹介となっている。トシはあくまで挽歌を詠むきっかけとなった早逝した妹でしかない。

伊藤信吉は、「宮沢賢治論」²¹で挽歌について、「とし子と呼ぶ妹の死をめぐって、詩人は悲しみの叙情にはてしなく沈んでいった。人の肉親の死を、これほどふかく歌った詩は稀であるし、その悲しみの抒情も、また稀に見る方法を示してゐた。(中略)そして、抒情の方法の特異さからくる印象の多様性によつて、宮沢賢治の文学は一般の詩の概念から隔絶して独創したのだ。」と評している。ここでも、妹がどのような人物であったか、賢治と如何なる関係であったかなどは注目されず、詩の抒情性が評価される。さらに、伊藤も「この詩人の生涯と作品を回想するとき、彼が詩人として優れてゐるばかりでなく、ひたむきに生活を支へて、熱意してみたことの美しさが思はれる。」と、賢治を紹介しており、生涯と作品を並列に語るこの紹介の背景にも、「雨ニモマケズ」的偉人像が読み込まれている。

小田邦夫は『宮沢賢治覚え書』²²の中で、「「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」等には人生の誠実をかけた安らかな吐息がもれて来る。ひたくと寄せてくる高い響きがある。」と評しているが、ここでもトシは描かれず、賢治の精神性が注目されている。また、小田が花巻にある賢治の実家を訪れた際、賢治の弟である宮沢清六の前で、賢治の会の菊池暁輝が「永訣の朝」を朗読し、その時のことを「この詩の朗読をきいてみると、悲劇のあとに起る、ある種の高潔な感動にゆずられるのであるが、確かにベートオベン第九なんぞに近いあの感動がくる……。清六氏は終始にこにこして聴いておられた。清六氏はさふいふ人である。」と回想している。この回想からは、挽歌が宮沢賢治の代表的な詩の一編として受容されていた事が窺われる。

戦前の挽歌受容は、挽歌が妹の死をきっかけにして作られたとの認識はあるが、その妹がいかなる人物で、賢治とどのような関係にあったか等、トシについての具体的情報は描かれず、抒情性や詩の技巧に注目が集まっていた。また、作品の背景に「雨ニモマケズ」に代表される偉人宮沢賢治が読み込まれており、関心は

²¹ 伊藤信吉 (1940) 「宮沢賢治論」『現代詩人論』、河出書房

²² 小田邦夫 (1943) 『宮沢賢治覚え書』、弘学社

あくまでも賢治の人物像にあったと言える。当時、挽歌は賢治の作品の中では知られている作品ではあったが、それはあくまでも技巧的に優れた詩としてであって、妹トシがどのような人物であったかはあまり重視されていなかった。

戦前のトシの扱いは、広く読まれていたであろう挽歌の作品紹介では、亡くなった妹という程度の紹介しかされず、人物像はほとんど語られていない。一方、賢治の身内や関係者が書いた紹介や伝記では、女子大を出たという高学歴と学歴に見合った性格が紹介されるが、トシについての基本情報は学歴と挽歌をもとにした評価がなされるだけで、現在のような賢治と特別な関係を持ち、賢治を支えるといった人物像は備えていなかった。この時期のトシは、挽歌を詠むきっかけとなった早逝した不憫な妹でしかない。

4. 戦後宮沢賢治受容とトシ

4.1 終戦後における宮沢賢治受容

次に終戦後の賢治受容を確認したい。前述したように、戦後の賢治受容において国語教科書への賢治作品掲載が大きな意味を持っていた。では、国語教科書の中で賢治はどのように扱われていたのだろうか。

戦後における宮沢賢治の国語教科書での扱われ方を考える際、重要なものとして「雨ニモマケズ」が挙げられる。「雨ニモマケズ」は1947年には戦後国定教科書第一号である文部省編『中等国語一』に、当時の食糧事情を鑑み「玄米四合」が「玄米三合」に訂正されつつ掲載された。戦前、「雨ニモマケズ」が、大政翼賛会文化部発行の詩集に掲載され、「（「雨ニモマケズ」一部引用後）農民生活の実践の中にこそ、至純な力づよい決戦栄養の指標が輝いてゐる。」²³等、戦時下の状況に合わせて読まれていたことを鑑みると、この掲載は異例なものと言える。山下聖美は、「雨ニモマケズ」掲載の背後に宮沢清六とCIE（民間情報教育局）係官、斎藤襄治の関係があったと指摘²⁴、吉田司は、「雨ニモマケズ」を受け入れた存在

²³ 杉靖三郎（1944）「決戦栄養の指標」、『読売報知 1944年1月19日夕刊』

²⁴ 山下聖美（2001）「第二次世界大戦中、及び敗戦直後における宮沢賢治受容」、『藝文叢六卷』

として労農イメージに注目した左翼系教員の存在を挙げている²⁵。

「雨ニモマケズ」を中心に、戦後も賢治の偉人像は残り、賢治は後に、詩人や童話作家としてよりも、人々のために生きた偉人²⁶や、聖人・賢人²⁷として扱われる伝記教材となっていく。

4.2 終戦後のトシ

宮沢賢治が再び戦前と同じく偉人として扱われたのに対し、挽歌を詠むきっかけでしかなかったトシの扱いには変化が現れ始める。

1949年に発刊された『宮沢賢治と三人の女性』²⁸では、「宮沢賢治と、もつともちかいかんけいにあった妹とし子、宮沢賢治と結婚したかつた女性、宮沢賢治が結婚したかつた女性」の三人が紹介されている。本作でトシは、学歴を褒められながらも、賢治との関係について「こういう賢治を、誰よりも尊敬し、心から愛しなつかしんだのは、すぐの妹のとし子であつた。このような兄を持つことを心から誇りに思つた。」と紹介される。これまで、トシについての説明は、賢治からの一方向の目線で語られていたが、本作ではトシの賢治に対する思いが描かれている。また、本作では挽歌を、「これらの挽歌は、賢治の像の一方の瞳であり、そして他の一方の瞳は『雨ニモマケズ』なのである。挽歌というものは、昔から、いわば、文学の発生とともにあつたものであろう。恋愛の歌と挽歌とは、人間の歌の中にあつては、昔から人の心をたかくうちつづけてきた。」と説明している。ここでは、賢治受容の中心であつた「雨ニモマケズ」と挽歌が並列に並べられることで、挽歌が賢治作品にとって重要な作品であるとの位置付けが行われると共に、恋愛の歌と挽歌が並列に語られ、挽歌を恋愛の歌として読むことをも可能としている。

²⁵ 吉田司 (2002) 『宮沢賢治殺人事件』、文芸春秋

²⁶ 葛西まり子 (2005) 「国語科教科書の中の「宮沢賢治」-- 「伝記教材」を視点として」、『芸文研究 88 巻』、慶應義塾大学藝文学会

²⁷ 茅野政徳 (2014) 「戦後小学校国語検定教科書における宮沢賢治の伝記教材の変遷」、『国語化教育 75』、全国大学国語教育学会

²⁸ 森荘巳池 (1949) 『宮沢賢治と三人の女性』、人文書房

宮沢賢治研究雑誌『四次元』では、佐藤寛がトシの日本女子大学の同級生である戸坂秋子にトシについてのインタビューを行っている。戸坂はトシについて、「としさんは目立って美しいといふ方ではなかったが、おのづから持つ柔和の中に冒しがたい尊厳さがあつて、聖としさんと呼ぶにはみられなかった」²⁹、と回想している。一方、賢治については「こんな立派なお兄さん」と評しているが、実際に戸坂が賢治と会ったのは、トシの見舞いに行った際、ちらっと見かけたことがあるだけで、その時は田舎者だと思ったとの第一印象を記している。ほぼ面識のない賢治を「立派」とするのは、インタビュー時、既に偉人として受容されていた賢治像が、回想にも大きな影響を与えていたからだろう。同時に、偉人の妹であるトシもまた立派な人物であったはずだとの意識が潜在してはいなかっただろうか。仲のよかった同級生に「聖」等という言葉を使うのは、賢治の聖人像がトシにも読み込まれた証拠であり、この回想は純粋な回想ではなく、当時の偉人賢治の影響を受けていたのではないか。また、「従来としさんについてはあまり多く発表されてをらないので世間に知られてもみないであらう。」³⁰との一文があり、トシがこれまで注目されてこなかった事を窺わせる。

さらに、戦前は「信仰を一つにする」程度の説明しかなかった賢治とトシの関係にも変化が現れる。小沢俊郎は、「ひとりぼつちになりさえすれば浮んでくるのはとし子の面影なのだ、まるで恋人を亡くした人のようにダンテにおけるベアトリツチェのように。賢治にとっては永遠の女性であるかのごとき存在だつたとし子なのだ。」³¹と、ダンテの神曲を援用しながら二人の関係を紹介している。ここでトシは、早逝し詩を作るきっかけになった妹という戦前の扱いから、恋人を連想させる女性へと変化している。

終戦直後のトシ受容は、1949年の『宮沢賢治と三人の女性』を皮切りにトシへの注目が集まったことが確認できる。そして、戦後のトシ像は、偉人、聖人であ

²⁹ 佐藤寛 (1952) 「聖としさん (2)」『四次元第4巻4号』、宮沢賢治友の会

³⁰ 佐藤寛 (1952) 「聖としさん (3)」『四次元第4巻4号』、宮沢賢治友の会

³¹ 小沢俊郎 (1955) 「希求の相反性その一「オホーツク挽歌」を読んで」『四次元第7巻第2号』 宮沢賢治友の会

る宮沢賢治の影響を受けながら、特別な関係を連想させる、兄想い、ペアトリーチェ等の言葉で紹介され、トシの賢治に対する心情が描写されていく。

4.3 「解説」における挽歌とトシ

では、研究誌ではなく、広く出版されていた宮沢賢治の単行本や文庫本のあとがき、解説等でトシはどのように扱われていたのだろうか。年代順に、挽歌、トシに関する言及を確認したい。

1946年、『宮沢賢治歌集』³²では、トシが賢治の歌集を筆写したとの一文があるが、その後語られる賢治の簡単な伝記の中にトシについての言及は見られない。

1948年、『日本近代詩鑑賞昭和篇』³³では、「永訣の朝」が紹介され、この詩が妹の死に大きな衝撃を受け、即時に作成されたと紹介される。トシは、きわめて聡明で、兄のよき理解者とされているが、この学歴と信仰という特徴は戦前の紹介と変わらない。その後、詩のテクニックに関しての言及が続き、最後は賢治自身の臨終が紹介され、妹の死を通した賢治の紹介がなされている。

1949年、『宮沢賢治集（上巻）』³⁴では、「永訣の朝」が掲載されるも、トシについての言及はなく、農民に密着した偉人宮沢賢治が語られる。同年の『鑑賞宮沢賢治選集』³⁵では、挽歌群が掲載され、挽歌について「最愛の妹の死といふ不幸をも、宗教的な法悦に迄高めようとする、爽やかな諦念である。」と説明した後、方言の持つ詩性が評価される。しかし、トシの説明はその死の年月日だけであり、挽歌群は戦前と同じく、宗教性と詩性から評価されている。

1950年、『宮沢賢治詩抄』³⁶では、挽歌群が収録されるも、年譜にトシの死についての簡単な言及があるのみで、直接の言及は見られない。岩波文庫から出版された『宮沢賢治詩集』³⁷でも、「永訣の朝」、「松の針」に対し、「抒情の純粹性

³² 森荘巳池（1946）「解説」『宮沢賢治歌集』、日本書院

³³ 吉田精一（1948）「宮沢賢治」『日本近代詩鑑賞昭和篇』、天明社

³⁴ 古谷綱武（1949）「解説—賢治の心について」『宮沢賢治集（上巻）』、新潮社

³⁵ 吉田精一（1949）「解説・鑑賞」『鑑賞宮沢賢治選集』、天明社

³⁶ 草野心平編（1950）『宮沢賢治詩抄』、酣燈社

³⁷ 谷川徹三（1950）「解説」『宮沢賢治詩集』谷川徹三編 岩波書店

を貰ったもの」との評価がなされるが、挽歌に対する言及はこれだけであり、トシに関する言及も見られない。挽歌に対して抒情性を評価するという方法は、戦前と変わらない評価と言える。

1951年、『宮沢賢治集』³⁸では、「永訣の朝」が収録されるが、トシについての言及は、大正8年トシが入院中に、賢治が父に送った手紙の中から深い肉親の愛情が読み取れるという程度で、トシ自身についての言及はない。同年の『青春・恋愛・芸術―若き日の文学者たち』³⁹でも、宮沢賢治が農民のために働いた人物として紹介されるが、トシについての言及は見られない。

1950年代初頭までトシへの関心は基本的には低いままであり、戦前と同じく、詩を書くきっかけになった早逝した妹というトシ像が多く見られ、挽歌は抒情性や詩性から評価されていたことが確認できる。

一方で、1950年の『中学生全集、私たちの詩集』⁴⁰では、「永訣の朝」の解説で、トシを「一人の清い処女」とし、1951年、『名詩の鑑賞』⁴¹でも、「処女の死の床」との言葉が使われる。吉田は前述の『日本近代詩鑑賞昭和篇』⁴²でトシの死を、「まさにつきようとする女性の生命のかげやき」と表現しており、トシがただの女性から、「清い処女」という清純なイメージを持つ女性へと変化していることが確認できる。これらの解説は、最終的には賢治の宗教性や宇宙観に回収されているが、処女という清らかなイメージはこれまでになかったトシ像であり、聖人賢治に影響を受け、トシの新しい人物像が登場したといえる。

さらに1953年には『無声慟哭・オホーツク挽歌』⁴³という、挽歌をタイトルに掲げた文庫が刊行される。トシは、愛する妹、聡明な女性で理解者、賢治と同じく自然を愛した人物として紹介されており、ここでも、トシと賢治が特別な関係として描写されると共に、賢治の人物像がトシに流入していることが確認できる。

³⁸ 草野心平 (1951) 『解説』『宮沢賢治集』、新潮社

³⁹ 福田清人 (1951) 『青春・恋愛・芸術―若き日の文学者たち―』、梧桐書院

⁴⁰ 吉田精一 (1950) 『中学生全集、私たちの詩集』、筑摩書房

⁴¹ 長谷川泉 (1951) 『名詩の鑑賞』、医学書院

⁴² 吉田精一 (1948) 「宮沢賢治」『日本近代詩鑑賞昭和篇』、天明社

⁴³ 草野心平 (1953) 「はしがき・解説」『無声慟哭・オホーツク挽歌』、新潮社

戦後、あとがき、解説におけるトシの扱いを見ると、トシその人についての詳しい情報はほとんど描かれていない。トシは戦前と同じく、挽歌を作るきっかけとなった早逝した妹であり、トシその人への関心は薄いままである。一方で、少数ながら、処女という清純なイメージをトシに読み込むなど、賢治の人物像と重ねられたトシ像が紹介され、トシ受容に変化が現れたことも確認できる。

4.4 「雨ニモマケズ」批判とトシ

なぜ 1950 年頃にトシに関する注目が集まりだしたのだろうか。この時代の賢治像は、他者の為に自己犠牲を厭わない偉人であり、聖人であった。前述したように、このイメージは戦前の賢治像と類似していた。

一方で、このような聖人像に反感を持つ人々もいた。恩田逸夫は終戦直後の様子について、神秘性が付与され、偽説化され、偶像視してしまった賢治像が広まり、修身の教材の様な「聖人視」が反発をもたらし、賢治に対する食わず嫌いを生み出していたと回想している⁴⁴。また、1951 年『やまびこ学校』における二宮金次郎型人間が批判され、その後、「雨ニモマケズ」も民衆に忍耐と勤勉を強いる旧弊道徳だという批判が現れ始め⁴⁵、佐藤勝治はマルクス主義の立場から賢治を批判し、「烏の北斗七星」を誤れる特攻精神を謳歌していると非難している⁴⁶。さらに、1955 年には、中村稔が「雨ニモマケズ」に対して、「羅須地人協会からの全面的撤退であり、「農民藝術概論」の理想主義の完全な敗北である。そしてこの作品は賢治がふと書きおとした過失のように思われる。」⁴⁷との批判を行う。この批判は後に、谷川徹三との間で「雨ニモマケズ論争」を引き起こすことになる。

「雨ニモマケズ」を中心とした自己犠牲的の偉人像が再び広まっていく一方で、

⁴⁴ 恩田逸夫 (1959) 「賢治遍歴」『四次元第 11 巻 1 号』、宮沢賢治研究会

⁴⁵ 久保田治助、木村洋子 (2014) 「第二次世界大戦後の国語教科書における〈宮沢賢治〉像：理想的人間像の変容」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 23 号』、鹿児島大学教育学部

⁴⁶ 佐藤勝治 (1952) 「宮沢賢治批判」『宮沢賢治批判—賢治愛好者への参考意見』十字屋書店

⁴⁷ 中村稔 (1955) 「宮沢賢治論」『現代詩第二巻第五号』

引用は継続橋達雄編 (1990) 『宮沢賢治資料集第十巻』、日本図書センターによる

その姿に戦時中を思い出し、偉人賢治を好きになれない人も存在した。そして、批判の中心となっていた「雨ニモマケズ」に代わるものとして、戦前からある程度知名度のあった「永訣の朝」を始めとした挽歌が注目されると共に、様々な作品集に収録されることで、トシへの関心も高まっていったのではないかと。奇しくも、最初にトシを本格的に扱った『宮沢賢治と三人の女性』は、宮沢賢治の新しい一面を紹介することをその目的として掲げていた⁴⁸。トシと挽歌は、批判が集まる偉人賢治像に変わる新しい存在として注目されたのではないかと。

5. 兄を支える妹

5.1 宮沢賢治没後 25 周年とトシ

とはいえ、挽歌を扱った作品集は多く出版されていても、研究誌以外では未だトシへの注目は低い。トシが多く描かれることになるのは 1950 年代半ば以降である。この時期、宮沢賢治受容にどのような出来事が起こっていたのだろうか。

1956 年、筑摩書房から『宮沢賢治全集』の刊行が始まり、翌 1957 年には、宮沢賢治没後 25 周年祭が行われる。この祭りは、6 月 20 日から賢治の命日である 9 月 21 日まで 3 か月間の長きにわたり行われ、講演会、出版物、詩碑の建立、ラジオ、映画等、様々な催しが日本各地で行われた⁴⁹。これらの出来事により、日本全国で宮沢賢治に関する関心が高まったであろうことは想像に難くない。賢治に関する様々なイベントは、戦後、再び賢治の名前が全国に広がるきっかけとなったはずだ。では、賢治が再び日本全国に広まる中、トシはどのように扱われたのだろうか。

⁴⁸ 森荘巳池 (1949) 『宮沢賢治と三人の女性』、人文書房

「崇高な独身者賢治をめぐる三人の女性によつて、賢治の像は一層はつきりしてくるでしょう。」

⁴⁹ 「詩碑や映画も作る宮沢賢治二十五周年を記念」『読売新聞 1957 年 5 月 31 日朝刊 7P』

「詩碑の建立や講演会宮沢賢治をたたえる多彩な催し」『朝日新聞 1957 年 6 月 14 日朝刊 11P』

5.2 新たなトシ像

1954年、『いかに生きたかの伝記集成』⁵⁰では、トシが賢治の原稿を整理した話が紹介され、聡明で兄をよく理解した人物、賢治の片腕としてトシが紹介され、これまでの学歴イメージと共に、兄を陰で支える妹という人物像が現れ始める。

1955年に出版された『宮沢賢治』⁵¹では、一番愛していた妹としてトシが紹介され、トシが賢治と同じ信仰を持ち、賢治のよい協力者であったと紹介されている。ここでもトシは一番愛していたと深い関係を示唆されるとともに、協力者として賢治を支えている。

1956年、『宮沢賢治名作集』⁵²では、挽歌は収録されないが、解説に「永訣の朝」全文が、あまり少年少女むきではないと思って本文にいれなかった、との言葉と共に掲載され、この詩が賢治作品の中で重要な位置を占めていたことを窺わせる。さらに、同年の『真実に生きた人々』⁵³ではトシを「最も親しい理解者であり協力者でもあった妹」と紹介しており、ここでも信仰以外に、トシが協力者として賢治を支えるイメージが浮かび上がる。

1957年、『抒情詩のためのノート』⁵⁴では、トシと賢治は高い精神的交渉を持った兄妹とされ、生前、トシが賢治の文学と宗教に大きな影響を与えたと紹介される。高い精神的交渉との言葉からは二人が特別な関係にあったことが連想される。また、トシが賢治の文学にまで大きな影響を与えたとされ、トシの役割が増大している。同年の『美しい詩を作った人たち』⁵⁵でも、トシは兄の心や仕事をよく理解し、兄おもしろいやさしいかしこい妹と紹介される。ここでもトシは賢治を支える人物として描かれている。

1950年代半ばから後半にかけて、トシは聡明、清純なイメージを保持しつつ、

⁵⁰ 山田清三郎 (1954) 「宮沢賢治」『いかに生きたかの伝記集成』、泰光堂

⁵¹ 古谷綱武 (1955) 「九、妹の死」『少年伝記文庫、宮沢賢治』、国土社

⁵² 串田孫一 (1956) 「賢治の一生とその作品」『少年少女日本文学選集 10、宮沢賢治選集』、あかね書房

⁵³ 鳥影盟 (1956) 「宮沢賢治」『真実に生きた人々—人生いかに生きるかの指標—』、文理書院

⁵⁴ 鮎川信夫、疋田寛吉 (1957) 「宮沢賢治松の針」『抒情詩のためのノート』、ひまわり社

⁵⁵ 大木実 (1957) 「宮沢賢治」『美しい詩を作った人たち』、さ・え・ら書房

賢治を陰で支え、賢治と特別な関係にある人物へと変化していく。その後も、トシについて言及したあとがき、解説が多く見られ⁵⁶、トシが賢治にとって重要な存在として扱われていたことが窺われる。賢治が全国へと広まっていくなか、「雨ニモマケズ」に変わる賢治紹介としてトシが注目され、トシの人物像も単なる妹から、兄を支え、特別な関係を持った人物へと変化していったと考えられる。

5.3 教科書におけるトシ

トシへの注目の高まりに連動するように、1959年には高校国語教科書に「永訣の朝」が収録される。これをきっかけとし、「永訣の朝」は様々な国語教科書に収録され、現在でも定番教材として様々な教科書に収録されている。

「永訣の朝」収録以前に、宮沢賢治の挽歌で教科書に収録されたのは1950年、『われわれの国語二』⁵⁷に収録された「松の針」だけである。この時、教科書の設問は、作者の詩的想像力、詩的表現力を問うており⁵⁸、妹について考えさせる設問はない。

一方、1959年に「永訣の朝」を収録した『国語二』⁵⁹では、賢治の気持ちと、トシの臨終の言葉に込められた意味を推測させ、最後の六行の意味を考えさせることで、他者のために祈る賢治像を引き出す設問となっている⁶⁰。これらの設問は偉人宮沢賢治をひきだす一方で、賢治の考え方に大きな影響を与えた人物として、トシの人物像を連想させてもいる。

⁵⁶ 宮沢清六（1958）「解説」『新日本少年少女文学全集 24 宮沢賢治集』ポプラ社

伊藤信吉（1960）「宮沢賢治集について」『現代詩集③宮沢賢治集』、有信堂マズプレス

馬場正男（1960）「解説」『新日本少年少女文学全集 38 続宮沢賢治集』ポプラ社

⁵⁷ 宮沢賢治（1950）「松の針」『われわれの国語二』、秀英出版

⁵⁸ 一 この三つの詩に現われた作者の心持やその表現のしかたの似たところ、違ったところについて味わってみよう。二 季節はそれぞれいつか。（中略）六 宮沢賢治の詩において、作者の想像した部分と実際にあった部分とを区別しよう。

⁵⁹ 宮沢賢治（1959）「永訣の朝」『国語二』、筑摩書房

⁶⁰ 三 作者が「ありがとうわたくしのけなげないもうとよ」と言っているのは、どんな気持ちからであろうか。四 「うまれでくるたて こんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあやうにうまれでくる」とは、どんな考えを述べているのか。五 最後の六行から、作者のどんな考え方がうかがわれるか。

勿論、二つの教科書は違う会社で、時間的隔たりがあり、その間、学習指導要領の変更や、1958年には道徳が設置される等、教育環境に大きな変化があったことも事実である。だが、定番教材となった「永訣の朝」が、兄を支え、特別な関係にある妹というトシ像が広がり始めた1950年代後半に、妹の心情を考えさせる設問と共に教科書に収録されたことは、現在のトシ受容にも大きな影響を与えることになったはずだ。

6. おわりに

現在、宮沢賢治を語る際に欠かすことの出来ない存在として妹のトシが挙げられる。トシは賢治を支え、特別な関係を持つ人物として受容されて来た。

しかし、戦前のトシの扱いを確認すると、当時のトシは、女子大卒業という高学歴や、「無声慟哭」の「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」という言葉が紹介される程度の簡単な人物紹介がされるだけで、挽歌を扱っていてもトシについてはほとんど触れられないなど、特段、注目される人物ではなかった。

この状況に変化が見られるのは1950年代に入ってからである。当時、戦前と変わらぬ偉人としての宮沢賢治像に対して批判が高まっており、その批判は、戦前、広く受容されていた「雨ニモマケズ」に集まっていた。このような状況下、宮沢賢治友の会が発行していた雑誌『四次元』等で、トシは賢治の偉人性を援用しながら、特別な関係を持つ妹として紹介され、挽歌と共に注目され始める。

その後、1956年、『宮沢賢治全集』刊行、1957年、宮沢賢治没後25周年祭など、日本全国で様々なイベントが行われ、賢治への関心が高まっていく。この時期、トシは、賢治の恋人や特別な関係を持った人物というイメージを保持しつつ、さらに兄を支える存在、理解者として、解説、あとがき等で紹介される。

現在、広く普及している宮沢トシの人物像は決して宮沢賢治受容の初期からあったものではない。1950年代、揺れ動く宮沢賢治受容の中で発見され、形成されたものであった。

この後も、トシには、近代的女性が読み込まれ、花巻女学校時代の音楽教師とのスキャンダル、『自省録』の発見など、時代ごとに様々なイメージが読み込まれ

ていく。しかし、本稿では、トシ像の根本ともいえる賢治とトシの特別な関係が、1950年代に発見、登場したものであるとの見方を提示するに留まり、本稿の結論としたい。

「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』
—執筆の同時代背景を踏まえた横溝正史ブーム再考—

YOKOMIZO Seishi's *Yatsuhakamura* as the Story of Regaining
Roots : Consideration of the Yokomizo Vogue in 1970s in Japan

有村友里*

大阪大学 比較文学専門分野 M2

要旨

本稿は、1960年代末から1970年代を中心に生じた横溝正史ブームの解釈に対する、執筆の同時代状況とブームの時期の共通性に注目した新たな視点からの考察を目的とする。分析の結果、戦後の分断のなかで『八つ墓村』に内包されたものとして、「つながり」を「回復」する物語としての側面を見出した。それとともに、1970年代の社会的な横溝ブームはこの側面が抽出されながら生じたものであると結論づけた。

キーワード：横溝正史、戦後、復員、1970年代、ルーツ

Abstract

This research's aim is to reread *Yatsuhakamura* and analyze the social phenomena in which the novels by YOKOMIZO Seishi's novels became in huge fashion, considering the background of YOKOMIZO's works. *Yatsuhakamura*, the main analysis subject in this issue, played a big role in the vogue. From the analyzation, I concluded that *Yatsuhakamura* includes the feature of a story about regaining roots in divided post-war Japan. Also,

* ARIMURA Yuri, graduate student, Osaka University

e-mail : cococon37@gmail.com

from this point of view, it is understood the vogue of Yokomizo in 1970s in Japan as the discovering this aspect of *Yatsuhakamura* and Yokomizo novels.
Keywords : YOKOMIZO Seishi, post-war Japan, demobilization, 1970s, roots

1. はじめに

横溝正史は「いちど死んだ」¹、すなわち、一度は作家としてほとんど忘れ去られたにも関わらず、十年ほどの空隙を経て「ミステリの枠を越えたもはや社会現象といっても過言ではないほどのブーム」²となった。小松史生子が「松竹・角川による映画化やテレビドラマ化で浸透した金田一耕助＝横溝正史作品」³と形容したように、1960年代末から1970年代に発生したこの「社会現象」的な再受容は横溝の作家イメージ、作品イメージに今日まで続く大きな影響を及ぼしている。この意味で、これは横溝正史という作家を考えるうえでは無視できない事象であると言えよう。

先行研究に目を移すと、この「ブーム」の問題を主に扱った論考として、以下の三つが挙げられる。野村典彦「ディスカバー・ジャパンと横溝正史ブーム」⁴と藤本亮「戦後の社会意識の変容——横溝正史ブームを手がかりに——」⁵、上野昂志が『肉体の時代：体験的60年代文化論』で展開した考察⁶の三点である。野村は、オカルトやディスカバー・ジャパンという同時代の現象と並列しつつ横溝作品の再受容の原因を「科学の「理」を装った非科学性を軸とすること」⁷に見出し、藤本は、横溝ブームが「金田一耕助への親近感、ブームに参加することによる同時代的経験、この二つの要素」⁸を提供することによって生じたと結

¹ 鈴木、p.206。

² 藤本、p.1。

³ 小松、p.132。

⁴ 一柳廣孝編『オカルトの帝国：1970年代の日本を読む』（青弓社）所収。

⁵ 今防人編『社会学論叢』第140号（日本大学社会学会）所収。

⁶ 具体的には「横溝正史ブームはどのようにして起こったか」、「横溝作品は記号的な意匠に彩られていた」の二項がこれにあたる。

⁷ 野村、p.76。

⁸ 藤本、p.19。

論した。こと上野の論は横溝作品に対してきわめて批判的ながら鋭く、執筆と同時代の状況も踏まえた指摘を行っている。

ブームをよんだ横溝の作品のほとんどが、二〇年以上前、つまり戦後すぐに書かれたものである（…）読者の大部分は新しく開拓された若い層であるが、作品としてはリバイバルであったということだ。このことは、当然ながら読まれる作品に影響を及ぼす。（…）横溝は、ある面では、戦前にあった家というものの戦後的な解体現象を、繰り返し書いてきた作家だといえることができるが、そのことが持っていた象徴的な意味は、七〇年代のブームにはほぼ完全に消えていたのである。（…）「家」にしても「血縁」にしても、可視的な生々しさも象徴性も失われたところで、読まれたのだ。

9

このように戦後と70年代の隔たりに着目した上野は、「どんな事物もなんらかの記号性を担わされているという以上に、記号の支配力が強まる」時代の転換のなかで横溝作品が注目されたのだ、という結論に至る¹⁰。しかし、ここでブームの最中、1976年11月号の『別冊・幻影城』に掲載された田中美代子の論考「血の運命劇」を見てみると、田中はここで気になる発言をしている。

（…）これらの作品（＝横溝の「代表的傑作といわれる二三の作品」（田中、p.297）／引用者注）が、いずれも敗戦直後の混乱と危機の時代に書かれたものであることをみると、今また曲り角にきた崩壊期の日本のイメージが重ね合わされて、一種の戦慄を感じないわけにはいかなかった。

なぜ今横溝ブームといわれる現象が起っているのか、その秘密もわかる気がする（…）¹¹

⁹ 上野、pp.450-451。

¹⁰ 同上、p.464。

¹¹ 田中、p.297。

この論考の執筆依頼が来る以前には「横溝正史を知らなかった」¹²田中は、かえってその距離感ゆえに、横溝作品の流行を支えた大勢の非ミステリファンの実感を代弁しているとも言えるが、彼女が示唆しているのはむしろ、ブームの時代と執筆当時の共通性の方である。『別冊・幻影城』の同号に掲載された、いわばブームの同時代的言説には横溝作品に普遍的な魅力を見出そうとする言説が散見され¹³、彼ら／彼女らの意識の中に 1970 年代という同時代状況のみならず、執筆時代に当たる「敗戦直後」という別の時代の存在と、それへのシンパシーがあったことを伺わせる。

先に挙げた先行研究はいずれも、このブームの側面を確かに捉えた鋭い考察であることは間違いない。しかし、田中のものをはじめとするブームと同時代の言説を踏まえたとき、横溝作品の背景としてあった同時代的状況を考慮していない点、あるいは、上野のようにそこを考慮していても執筆時期との差異しか取沙汰していない点が、先行研究のもつ不足として浮上してしまう。1970 年代のブームは、作品が執筆された「敗戦直後」の状況と、ブームの背景との共通性を分析することでより深く理解することが出来るのではないか。

本稿ではこの問いに出発し、再受容の中心となる金田一耕助シリーズを横溝が執筆した「戦後直後の混乱と危機の時代」に目配りをしながら、1970 年代の横溝ブームの再解釈を試みる。その際具体的な作品として取り上げるべきはやはり『八つ墓村』であろう。というのも、横溝ブームの「仕掛け人」¹⁴と目される角川春樹が 1971 年横溝作品の文庫版を創刊するにあたってシリーズの第 1 作に選び取ったのも、また、結局松竹との権利問題で実現しなかったものの彼

¹² 同上。

¹³ 例えば石上三登志は論考「家にはなぜ顔があるのか」において「横溝正史探偵小説は現代まれにみる“血と心理の大ロマン”であって、おそらくはそれこそが、小説本来の姿であるはずなのだ。それというのも人間は、一個人であると同時に、“家”の、“血”の一員でもある事実からは、国をとわず、時代をとわず、逃がれることはできないからなのである。」(石上、p.294。)と述べている。

¹⁴ 鈴木、p.206。

が横溝作品のメディアミックスを実践するにあたって最初の題材としたのもともに『八つ墓村』であった。更に付け加えておこなうならば、角川春樹に先行して『週刊少年マガジン』誌上では1968年10月13日号からほぼ半年間にわたって影丸讓也¹⁵作画で『八つ墓村』が劇画化のうえ連載されてもいた。この意味で、『八つ墓村』は1970年代に横溝作品が流行していくうえで常にその節目節目に、また再受容の前線に存在してきた作品であると言え、このブームの特質を考える上では最適のテキストであると考えられよう。

以上の理由から、本稿ではブームについて考察するうえで具体的に扱うテキストとして『八つ墓村』を選定しつつ、作品に反映された執筆の同時代状況を検証し、それを踏まえたうえで1970年代のブームの解釈に新たな視点を付与することを試みる。

2. 本論

2.1 『八つ墓村』先行研究の整理と本論の所在

作品分析に入るに先立ち、本項ではまず『八つ墓村』の先行研究を概観し、まとめることとする。

『八つ墓村』は同時代においてすでに「いよゝ—熟成した甘美な筆さばきで、島の雰囲気に代るに尼子の落人の昔からの不気味な因襲の跡をひく村の、よどんだ雰囲気が描かれ、また登場人物をめぐる血縁関係は往年の因果物をも思い出さす。それに洞窟の連絡の中のロマンティックな逃避行など妖しい情熱のほとばしりは「獄門島」以上で、近ごろの楽しい小説の一つであつた」¹⁶との評価がある通り、むしろトリックに回収されない部分に広がりをもった作品であると言える。倉田容子は「鏡像としての村落——横溝正史『八つ墓村』——」において、こうした『八つ墓村』を「シリーズ中で最も色濃く村落の異界性が描

¹⁵ 2003年に影丸讓也とペンネームを変更しているが、本論文では、引用箇所を除き影丸版『八つ墓村』執筆当時の状態に合わせて影丸讓也を使用することとする。

¹⁶ 隠岐弘「探偵小説月評」、『宝石』6巻3号、p.44

出されている」¹⁷と表現しながら、同作における「都市の輪郭線を照射する他者としての〈場所〉」¹⁸という村落の役割を論じている。倉田同様、『八つ墓村』の「〈場所〉」に注目した論考は多い。『八つ墓村』の「田舎性」¹⁹について論じた石坂実夏子の論考²⁰や、『八つ墓村』の舞台がもつ「社会的閉鎖空間での閉鎖性」²¹を指摘した横濱雄二／諸岡卓真²²に加えて、同作の「村落の異界性」を支える鍾乳洞について言及した新保博久の論²³、永井太郎の「地下世界の近代」²⁴もこの系譜に連ねることが出来よう。また、こうした流れの一方で、先述した通りたびたびメディアミックスされた『八つ墓村』であるから、この問題について扱ったものも提出されている。「野村「祟り」作品に対して市川「原作重視」作品」²⁵と述べた鷺田小彌太²⁶に代表的だが、吉田司雄の『「八つ墓村」の現在形」²⁷など、こちらでは各メディアミックス作品を比較するものが多い。少し毛色の異なるものとしては、中川千帆の“Desire for the Past: The Supernaturalization of Yatsuhaka-mura”が、1977年公開の野村芳太郎監督による映画版『八つ墓村』を、「超自然的な恐怖映画」²⁸として原作との比較によって論じている。

以上で示した通り、『八つ墓村』をめぐる先行研究としては、大分して、「〈

17 倉田、p.14。

18 同上。

19 石坂、p.124。

20 石坂実夏子（2016）「『八つ墓村』に見る都会と地方——横溝正史の田舎観を中心に——」（富山大学比較文学会編『富大比較文学』第9号所収）。

21 横濱／諸岡、p.153。

22 横濱雄二／諸岡卓真（2006）「もう一つのクローズドサークル——『八つ墓村』と『屍鬼』（一柳廣孝、吉田司雄編著『幻想文学、近代の魔界へ』（青弓社）所収。）

23 新保博久（2002）「ミステリ再入門第21回：横溝正史は鍾乳洞の夢を見たか」（『ミステリマガジン』第47巻1号（早川書房）所収）。

24 福岡大学研究所編『福岡大学人文論叢』第41巻2号所収。

25 鷺田（2010）、p.89

26 鷺田小彌太（2010）「金田一がよくなっては——映画『八つ墓村』断章」（江藤茂博・山口直孝・浜田知明編『横溝正史研究2』（戎光祥出版）所収）。

27 「ゆらぐフレームの内外」の第1回として一柳廣孝、吉田司雄編著（2005）『ホラー・ジャパネスクの現在』（青弓社）所収。

28 拙訳。Nakagawa,p.30。

場所>」に注目したものとメディアミックスの文脈で論じたものの二種類があると言えようが、その二つの流れに共通して見られるのが、都市／村落、「崇り」／「原作」といった二項対立である。この根底に存在するのは、しばしば横溝という作家そのものを二つに引き裂いてきた謎解き／怪奇、本格／変格という枠組みであるだろう。『八つ墓村』は、探偵小説である金田一耕助シリーズながら「シリーズ中で最も色濃く村落の異界性が描出されている」テキストであるがゆえに、横溝作品に見出されてきたこの二重性を最も如実に反映するものとして読まれてきたと言える。

そして、この先行研究の流れに本論を置き、その意義づけを行うとするならばそれは、この枠組みから逃れ、時代性という第三項を主眼に置こうとしている点にある。積み重ねられてきた横溝の作家像を一度離れ、執筆当時である「敗戦直後の混乱と危機の時代」に立ち返ることを促している点、と言い換えてもよいだろう。

では、『八つ墓村』に読み込まれるべき時代性とは何か。次項においては、作品の本文を参照しながらこの問題について考えることから始めたい。

2.2 同時代状況を踏まえた『八つ墓村』の分析

2.2.1 『八つ墓村』と主人公・寺田辰弥の戦争体験

『八つ墓村』は1949年3月から1951年1月にかけて、掲載誌を雑誌『新青年』から雑誌『宝石』に移しつつ連載された。梗概を記しておくとして、同作は、ラジオの放送をきっかけとして「鳥取県と岡山県の県境にある山中の一寒村」²⁹である八つ墓村に自身の親族が居ることを知った寺田辰弥を主人公に、「眼もくらむような怪奇の冒険と、血の凍るような恐怖の世界」³⁰を描いた探偵小説である。ここで物語の舞台となる八つ墓村の描写に目を移すと、この作品がまさしく「敗戦直後の混乱と危機の時代」を内包しているとわかる。

²⁹ 同上、p.5。

³⁰ 同上、p.26。

終戦前後から日本全国どこへ行っても村の様子が一変した。都会で焼け出された医者や、それぞれ縁故をたどって村へやってきた。それらの疎開医者は、新しい患者を獲得するために、都会仕込みの外交辞令とサービスを惜しげもなくふりまいた。³¹

戦禍を経て生じたこのような変化は、「戦争中は参謀本部づきかなんかでたいへん幅を利かせていたが、終戦と同時に尾羽打ち枯らして郷里へかえり、いまでは失意の身で百姓のまね事のようなことをやっている」³²里村慎太郎の没落という形で連続殺人の犯人・美也子の動機とも繋がっており、作品全体を貫く背景として存在している。更に言えば、『八つ墓村』の主人公であり語り手でもある寺田辰弥もまた、こういった「敗戦直後の混乱と危機の時代」を背負った人物だ。彼を八つ墓村へと導くのは、他でもない敗戦と復員という同時代の現実である。彼の戦争体験は、作中で以下のように語られる。

(…) 尋常の体を持った当時の青年の、だれもがそうであったように、私も二十一の年に兵隊にとられた。そして間もなく南方へやられて、苦しい月日を送っているうちに、終戦となり、その翌年復員してきた。

さて、復員して神戸へかえてみると、全市みごとに焼けているのには驚いた。一度衝突した仲だけれど、いまとなってはただ一人、頼りに思う義父の家も焼けてしまって、義母も義理の弟妹たちの行方もわからなかった。しかも、聞くところによると養父は造船所が爆撃されたとき、爆弾の破片に当たって死んだということである。おまけに戦争にいくまえ勤めていた商事会社もつぶれてしまって、いつ再起するかわからないという状態である。³³

³¹ 横溝 (2002b)、p.76。

³² 横溝 (2002b)、p.47。

³³ 同上、p.25。

「みごとに焼けて」しまったのは神戸の街であるものの、それと同時に復員した辰弥は、不和を抱えながらも過去には存在していた繋がりを根こそぎ奪われた状態にある。また、ここで「尋常の体を持った当時の青年の、だれもがそうであったように」と述べられていることに象徴的だが、『八つ墓村』というテキスト全体が同時代の現実を内包してゆくのと同じように、戦争体験を通じて、辰弥もまた現実の反映として機能してゆく。復員兵である辰弥に、同時代の現実が読み込まれてゆくのである。

そして辰弥の復員兵という肩書きに注目した時、あるモチーフが強い時代性を示すもの、より具体的に言えば、戦後の現実を示唆するものとして際立ち始める。ラジオがそれである。

2.2.2 ラジオの「尋ね人」：復員兵が置かれた社会状況と日本の分断

江藤茂博は『『八つ墓村』論——複層化された謎解き構造とその物語性』において、「日本でテレビ放送が始まる前の「ラジオ」は、史実としても戦後の社会での公共性を担うメディアであったことは間違いない。(…)小説『八つ墓村』の特質である戦後的物語空間がこうしたメディアを取り込んで表現されることになったのである。」³⁴として『八つ墓村』に登場するラジオの機能を考察した。

『八つ墓村』全体の構造にかかわる「手記」というメディアを踏まえながらラジオがもつ役割を再考したこの論は示唆に富んでいるが、同作におけるラジオの描写をさらに詳細に検証してみると、ラジオによって『八つ墓村』に投げられた「戦後的物語空間」がどのようなものであったかより判然とする。

『八つ墓村』の序盤において辰弥は、「そのようないやな名前の村があるとは夢にも知らなかった」³⁵八つ墓村と、他でもないラジオによって接続される。

「(…) 寺田君、ラジオできみを探している人があるぜ」

と、課長がいったので私も驚いた。課長の話によるとこうだ。今朝のラジ

³⁴ 江藤、p.164。

³⁵ 横溝 (2002b)、p.22。

オの尋ね人の時間に、寺田虎造の長男、寺田辰弥の居所を知っているものがあつたら、つぎのところへ知らせしてくれ、もしまた寺田辰弥自身がこのラジオをきいたら、本人じきじき出向いてほしいという放送があつたそうである。³⁶

一見読み飛ばしてしまいそうな些細な表現ではあるが、「今朝のラジオの尋ね人の時間」というのは、『尋ね人』という番組として現実に存在したものであり、これは、1946年7月1日から放送が開始された「特定の個人についての消息を尋ねる異例の番組」³⁷であつた。番組の詳細を引用しておきたい。

第1放送で朝と夜の2回、第2放送で朝1回、計1日3回それぞれ15分間の放送であつたが、聴取者の関心は高かつた。

放送開始から49年6月までの3年間に取り上げた放送依頼は、1万9515件。このうち、ほぼ3分の1に当たる6797件について消息が判明した。判明率の高さは、人々の関心の高さを反映するものであつた。³⁸

ここで再三強調されている「人々の関心の高さ」を支えるものとして、「46年末までに509万人が日本に引き揚げてきたが、シベリアなどで抑留された軍人を含めてまだ100万人以上が残留していた。引き揚げる途中で家族が離散したり、親戚や知人との連絡が途絶えたりする人も続出した」³⁹という現実の切迫した状況があつたことは明らかであろう。岩崎昶は、「この放送ほど戦争のために受けた人間の悲しみや苦しみや浮き沈みをまざまざと思わせる、ドラマチックな番組はなかつた」⁴⁰として『尋ね人』に触れながら、同時代の凄惨な状況を以下のように説明している。

³⁶ 同上、pp.26-27。

³⁷ 日本放送協会編、p.226。

³⁸ 同上。

³⁹ 同上。

⁴⁰ 岩崎、p.160。

敗戦のために何十万の日本人が中国や南方の島々を追われ、流浪し、埋没し、失踪したし、本土でも空襲で家を失い、離散し、死に絶えた。一億の人間の住むこの島を悪魔の巨大で凶悪な手でめっちゃめっちゃに引っかきまわし、引き裂いてしまったような現象がおこったのである。日本の歴史あって以来、これほど人間同士がおたがいがいから切りはなされ見失ったことはなかった。⁴¹

『尋ね人』は、岩崎の言うところの「一億の人間の住むこの島を悪魔の巨大で凶悪な手でめっちゃめっちゃに引っかきまわし、引き裂いてしまったような現象」、すなわち、敗戦直後の日本に生じた無限の物理的な分断の象徴としてあった。しかし同時に、こうした事態を背景として『尋ね人』のような番組が放送される一方で、ラジオ放送ひとつをとっても、そこには戦後という新時代の波が押し寄せてきてもいた。ちょうど江藤が、「日本でテレビ放送が始まる前の「ラジオ」は、史実としても戦後の社会での公共性を担うメディアであった」と形容しているように。

ラジオの音楽は著しく変わった。(…) 戦争中は“敵性音楽”と呼ばれ規制されていたジャズやダンス音楽が復活し、急速に増えた。「赤いリンゴにくちびるよせて…」という大胆な歌詞と明るいメロディーの「リンゴの歌」が幾度となく電波に乗った。“敵国語”の英語講座も再開し、「カム・カム・エブリボディ…」のテーマ音楽が流れた。⁴²

当時のラジオ放送に見られるこうした二面性は、前述したような物理的な「離散」と並行して、敗戦直後の日本に心理的な分断までもが存在していたことを示唆している。そして、吉田裕が「社会全体の復員兵に対する態度は冷や

⁴¹ 岩崎、pp.160-161。

⁴² 日本放送協会編、p.238。

やかなものだった。巨大な政治勢力と化して権力を乱用した軍部や特権的地位にあった軍上層部に対する反感・反発が、復員兵全体に向けられたのである」⁴³と述べている通り、復員兵は、戦後の日本でこうした分断のただ中に置かれた人々のひとりであった。1945年12月13日付の『朝日新聞』に寄せられた熊谷芳博の投稿は、そうした復員兵の叫びであると同時に、この分断の存在を告発している。

戦友諸君！今や吾々は解放された。あの陰惨な兵営と、腥き戦場より吾々は還って来た。然し待っていたのは、軍閥を怨嗟する国民の鋭い眼と、戦火に荒れはてた故郷であった。同胞は互に敗戦の責をなすり合い、空腹を訴え、焦土には枯草のみ徒らにしてかつ道義の廃頹その極に達し、祖国は恐るべきその自壊作用を起こしつつある。⁴⁴

復員兵である熊谷に加害者意識の欠如があまりにも強く見られることは否めないものの、彼のような復員兵が「同胞」の中で敗戦という負の遺産を一身に背負わされているというのは、少なくとも当事者であった彼の意識としては事実であったのだろう。「同胞」と復員兵の間に横たわる分断はそのまま、銃後と前線の分断を、戦後と戦時の分断を、平和と戦争の分断を映しているかのようである。敗戦直後の日本においては、国内を分断するいくつも亀裂と混乱が生じており、その中で、過去有していた繋がりを物理的にも心理的にも喪失した人々が数多く生じていた。言わば無数の辰弥が実在していたのである。そして、『尋ね人』の放送が『八つ墓村』連載開始当時まで継続していたことにも象徴的だが、そうした状況、ならびにそれに付随する実感は、読者の間でも記憶に新しいもの、ないし未だ継続しているものとして共有されていたと想定できよう。

では、そういった状況を踏まえた時、『八つ墓村』にはどういった側面を見出

⁴³ 吉田、p.30。

⁴⁴ 「声」、1945年12月13日『朝日新聞』朝刊、第2面。

すことができるのだろうか。

2.2.3 「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』

第二次世界大戦が横溝作品に与えた影響を踏み込んで考察した先行研究として、笠井潔の論考「論理小説と物象の乱舞——横溝正史論」が挙げられる。笠井はここで、「第一次世界大戦という人類最初の世界戦争と、その戦後である「グレート・ウォー」と命名された絶対戦争の経験を土壌としてのみ、探偵小説ジャンルは発生し確立されえた」⁴⁵という海外の前提を踏まえながら、しばしば「日本初の本格論理性＝トリック性を持った長篇探偵小説」作家として目される⁴⁶戦後の横溝正史について、以下のように考察している。

人間をモノとして扱う時代感覚が、正史の戦後作品に厳格な論理性をもたらした。(…) 谷崎的な「おどろおどろしき怪奇趣味」を破壊し、それを抽象的な項の論理的な組み合わせの素材に変貌させたのは、横溝正史が体験した二〇世紀の絶対戦争だったに違いない。⁴⁷

第二次世界大戦という看過し得ない同時代状況を取り込み、かつ先行する海外の状況との接続をまで行った笠井の論は言わずもがな重要なものであるし、戦後の横溝作品がもつ特徴として盛んに言及される「厳格な論理性」の説明としては一定以上の説得力を持っているようである。しかし、笠井はここで横溝の戦争体験を「二〇世紀の絶対戦争」として総括しているが、横溝の体験した第二次世界大戦が、そういったものに全て集約できてしまうかという点に関してはやや疑問が残る。その証左として、以下、横溝が戦時の思い出を回想した文章を引用しておきたい。

⁴⁵ 笠井、p.54

⁴⁶ 「日本初の本格論理性＝トリック性を持った長篇探偵小説としての高い評価と注目がこの時期の横溝正史に集中された。」—小松、p.131。

⁴⁷ 笠井、p.77。

(岡山県吉備郡岡田村字桜に疎開した／引用者注) 私は、私のようなよそものになりたいこの思いがけないもてなしにあつて、はじめはひどく面喰らい、かえってこちらのほうが警戒したくらいである。

しかし、これはだいぶんあとになって気づいたのだが、私はその地域のひとたちにとってよそものではなかったのである。両親がその近在の出であるというだけで、農村のひとたちは、血のつながりにも似た親近感や、えこひいきにもひとしい愛情をもつらしいということを、都会うまれの私はそれまで全然しらなかったのである。(…)

どちらにしても私はその疎開地で空襲警報におびえることもなく、子供たちの生命の危険に肝をひやす必要もなくなり、すべてにおいて精神的安らぎをおぼえたのである。⁴⁸

「親近感」、「愛情」、「精神的安らぎ」といった言葉が登場するこの回想に、「二〇世紀の絶対戦争」の影は薄い。横溝の自伝をどこまで信用すべきか、という問題は無論残るが、この疎開の時期を横溝が「いままでの人生を振りかえってみて、一番楽しかった時代」⁴⁹とさえ回想してさえいることを鑑みても、それだけ愛着を持ち得る思い出であったとは言えよう。先の引用で語られている通り、横溝は思いもよらぬ土地で自身が「よそものではなかった」ことを発見した。この体験は彼に固有の戦争体験であると同時に、笠井の指摘するような「顔と名前と、そして固有の内面をもつ近代的人間の尊厳が、ボロ屑に等しい死骸の山に埋もれてしまう二〇世紀の経験」⁵⁰とはむしろ対極に位置するものである。

繰り返しになるが、「厳格な論理性」に支えられたトリックに注目した際、笠井の論が大いに説得力をもつのは間違いない。しかし、こと『八つ墓村』は「厳格な論理性」に裏打ちされたトリックだけでは説明しきることのできないテク

⁴⁸ 横溝 (2002a)、p.245。

⁴⁹ 横溝 (1977a)、p.103。

⁵⁰ 笠井、p.69。

ストである。なぜなら、この物語は「ふつう一般の探偵譚とちがう」からだ。このことは、作中、語り手の辰弥によって明瞭に宣言される。

この記録がふつう一般の探偵譚とちがうところは、記述者がすでに起こった事件のあとを追うのみならず、おのれ自身の身の上や、またその身边にむらがる疑問を追究していかねばならぬことだ。⁵¹

ここで明示されている通り、『八つ墓村』は「すでに起こった事件」、すなわちトリックの解明だけではなく、作品のもう一面として「おのれ自身の身の上や、またその身边にむらがる疑問」の「追究」を描いている。更に言えば、この作品が「一種の探偵譚であるにもかかわらず、探偵のがわから筆をすすめていくことができない」⁵²ものである以上、事件の謎よりむしろ「おのれ自身の身の上や、またその身边にむらがる疑問」の方が前景化する場面すら少なくないのだ。

加納実紀代は先に触れたラジオ番組『尋ね人』について回想し、この番組が得た絶大な反響に触れながら「人びとは、まず自分につながるひとの絆を回復することから戦後を歩き出そうとしたのだろう」⁵³と述べている。この状況を踏まえたとき、大いに誇張され、歪曲された形であるにしても、「おのれ自身の身の上や、またその身边にむらがる疑問を追究」する辰弥は戦後多くの日本人が辿り、あるいは渴望した「回復」を行っているとさえ言えよう。そして、笠井の論に沿って戦後の横溝作品にみられる「厳格な論理性」を、「二〇世紀の絶対戦争」によって生じたものであると考えるならば、この「回復」をこそ、思いもよらぬ土地で己が「よそものではなかった」ことを知った横溝の体験、横溝に固有の戦争体験の反映として捉えられるのではないだろうか。その経験に裏打ちされた「回復」の物語が、先述したような分断のさなかにあって求心力を持って読まれたとしても、何ら不思議はあるまい。こと、こうした「回復」の物

⁵¹ 横溝 (2002b)、p.211。

⁵² 同上、p.210。

⁵³ 加納、p.92。

語がさかんに掲載されていた、『八つ墓村』連載当時の戦後の『新青年』においては、

この書き出し(=『八つ墓村』執筆開始のこと/引用者注)に当たって、はじめて津山事件が脳裏にひらめいたのだが、それにはこういういきさつがあった。当時の「新青年」は純粹の探偵雑誌とはいいいくく、むしろ大衆娯楽雑誌の傾向が強かったので、私も本格探偵小説の骨格はくずしたくはないが、ひとつスケールの大きな伝奇小説を書いてみようと思立ち、それには津山事件はかっこの書き出しになると気がついたからである。⁵⁴

このように、横溝は『八つ墓村』執筆に際して掲載誌であった『新青年』の誌風を意識していた。横溝の指摘する通り、戦後、方針決定を躊躇った『新青年』が「大衆娯楽雑誌の傾向」を強めていたのは事実である。大山敏はこの時期の『新青年』について、「小間物のお棚のような誌面には、とりあえず恋愛と明朗の“現代”小説が並べられた。現代を扱う小説には風俗・世相が如実に反映する。」と説明しながら、その「風俗・世相」の一例として復員を挙げている⁵⁵。『八つ墓村』連載に先立ち、横溝も1946年3・4月号ですでに元画家の復員兵と因縁の女性の再会を描いた「靨」を読み切りで『新青年』に載せているが、大山がこうした「“現代”小説」の実例として挙げたのは三木菟一の作品である。三木の『新青年』掲載作について、大山は以下のように紹介した。

主人公は主に復員兵で、彼の空虚な戦後のとりとめのない生の存在感をささえるのは「いのち」——戦前の記憶の象徴である女性だ。(…)戦後の再会は互いの境涯への理解の過程を踏みつつ、男女ともどもの再生と結合をもたらしていく。

⁵⁴ 横溝 (1977b)、p.223

⁵⁵ 大山、p.210。

<恋愛小説>は三木を中心に、その結構で戦後の空虚をみたしながら、同時に『新青年』の再生の希望としてもあった。⁵⁶

「再会」と「再生」、「結合」は、まさしく先述したような「回復」と重なってゆくものであると言えよう。そして、こうした作品の中で連載された『八つ墓村』にも読者は、同様のテーマを読み込んだのではないだろうか。

総括すれば、同時代的な背景として戦後の日本に生じた分断を見出したとき、『八つ墓村』には「ふつう一般の探偵譚とちがう」側面、すなわち、「おのれ自身の身の上や、またその周辺にむらがる疑問を追究」することで自己のもつ「つながり」を「回復」する物語としての側面が浮上した。この考察を踏まえたうえで、『八つ墓村』を筆頭として生じた1970年代における横溝作品の再受容に再び目を移したとき見えてくるものは何だろうか。それは「ルーツ」というキーワードであった。

2.3 1970年代における再受容との接続:野村芳太郎版『八つ墓村』を中心に

すでに述べた通り、『八つ墓村』は横溝作品が社会的に流行するうえで重要な位置を占めた物語である。中でも、野村芳太郎監督による『八つ墓村』は特別な意味をもつ作品であった。1977年に公開されたこの作品が横溝作品の受容に与えた影響について、鷲田小彌太は以下のように述べている。

市川「犬神家の一族」(=1976年公開の市川崑監督『犬神家の一族』/引用者注)の成功があつて、野村「八つ墓村」が生まれ、二匹目の泥鰌どころか、一匹目を凌ぐ大ヒットとなった。この「八つ墓村」の成功は、消えゆく村落共同体や土俗信仰への「郷愁」に火を付けたことは確かである。このことが、市川の「犬神家の一族」や「悪魔の手鞠歌」(77年)を観る聴衆に影響を与え、原作ならびに市川作品が閉鎖的な村落の土着性と血族

⁵⁶ 同上。

への郷愁あるいは回帰作品とみなされる原因となつてゆく⁵⁷

映画そのものの評価としては、鷺田は 1996 年に公開された市川崑監督による『八つ墓村』に「躊躇なく」「軍配を上げ」ている⁵⁸。但し、そんな鷺田でも認めざるを得ないほどの影響力をこの映画作品が持ち得た理由は、検証されてよいだろう。この問題に関して考察を行った先行研究として、ここでは先行研究として先に触れた中川千帆の論考を挙げたい。中川は、野村版『八つ墓村』が当時の観客に対して持ち得た意味を以下のように総括している。

...the film provides a fearful sense of identity for a modern individual...
All the brutal deaths remind the main character and the audience that they are not disconnected from their past even in the modern Westernized world.⁵⁹

【拙訳】

(…) この映画は現代を生きる個人にアイデンティティにまつわる恐怖を与えている。(…) 作中のすべての惨死によって、主人公、ひいては観客は、自分たちがこの西洋化された現代社会においてさえ自らの過去と無関係ではないということを思い知らされるのだ。

中川はこの論考で「日本が高度経済成長を自覚したとき、『八つ墓村』に現れた超自然的なモチーフは、近代化ならびに西洋化された社会の真ん中においてなお、過去との繋がりとして過去に紐づけされたアイデンティティがあると感じせしめたのだ」⁶⁰とも主張している。野村版『八つ墓村』を同時代状況に位置づけるこの考察は、当時の横溝作品全体の受容に敷衍し得る可能性をも孕んでいよう。更に中川の論を補足するならば、こと野村版『八つ墓村』に関しては、この「過

⁵⁷ 鷺田、p.93。

⁵⁸ 鷺田、p.95。

⁵⁹ Nakagawa, p.41.

⁶⁰ 拙訳。Nakagawa, p.42.

去との繋がり」と過去に紐づけされたアイデンティティ（原文：connection and identity with the past）」の描写はきわめて自覚的に、また戦略的に行われたものようである。その証左となるのが、1977年9月22日発行の『朝日新聞』夕刊第8面に掲載された野村版『八つ墓村』の新聞広告だ。



ここで注目したいのは、広告中央、作品タイトルである『八つ墓村』に寄り添うようにして書かれた「これはルーツ惨劇である」という惹句、そして、「自分の体の中にも その血が流れているのではないかとゾツとした——」という煽り文句である。「ルーツ惨劇」という目新しい言葉に含まれた「ルーツ」という単語は、『キネマ旬報』第719号（通号1533号）に掲載された映画評「野村芳太郎監督の八つ墓村」にも散見される。

映画全体を、古き歴史をさかのぼる、いまはやりの“ルーツ”たどりに焦点を置いていることだ。（…）野村監督の描きたかったことは、ルーツたどりをからませて、それに相乗りさせながらの、村落構造とその意識ではなかったか。⁶¹

⁶¹ 斎藤・金井、pp.140-141。

ここで頻出する「ルーツ」という語は、まず間違いなくアレックス・ヘイリーの『ルーツ』(原題: *Roots*) からきたものであろう。日本で邦訳が出版されたのは1977年の9月であったが、それ以前から米国での人気については度々報道がなされており⁶²、その流行も間もなく日本に波及する。『ルーツ』はアフリカ系アメリカ人であるヘイリーが一族の来歴を辿った自伝的小説であるが、自己を問い直すこの作品の人気は恐らく、しばしば横溝ブームと並置されるディスカバー・ジャパンやオカルトの流行と連動している。ディスカバー・ジャパンは「ディスカバー・マイセルフという心のキャンペーン」⁶³を謳い、オカルトの第一人者であったコリン・ウィルソンは「自己の存在の隠れたレヴェル」⁶⁴への接近を訴えていた。

1969年に発表された山口昌男の「失われた世界の復権」は、この時代に充満した、自己と、それを支える根／ルーツへの関心の原理を端的に示唆している。

この世界が意味連関を失って、人間がそのアイデンティティのすべてを賭けることのできないものであると覚ったならば、人はどうするのであろうか。(…)人々はあらゆる方法を駆使して、人間存在の根元に立ち還る運動を始めた。時間的にも空間的にもせよ、それは日常性を超えた「はじまり(アルケー)」に立ち還ろうとする運動であった。⁶⁵

⁶² 管見の限りでは、『ルーツ』について報じた最初の記事は1976年7月3日に『読売新聞』朝刊第7面に掲載された「米黒人「270年史」に市民権 執念の先祖探し 白人も感動 体制内で地位向上」である。

⁶³ 「考えてみれば、観光というのは目を開けて見るものですからね。「目を閉じて」なんていうコピーが堂々と世の中に出ていったというのは、(中略)ディスカバー・ジャパンは観光キャンペーンではないんだ、実は、ディスカバー・マイセルフという心のキャンペーンなんだという私たちの主張に強さがあったということなのでしょうね。」—藤岡、p.20

⁶⁴ コリン、p.27

⁶⁵ 山口、pp528-529。 .

ここで山口が指摘しているような「人間がそのアイデンティティのすべてを賭けることのできるものへの欲望は、言わずもがな人間に普遍的なものである。しかし、1970年代の特徴は、それが「時間的にも空間的にもせよ、(…)日常性を超えた「はじまり (アルケー)」」への接続、つまり、思いもよらないものとのつながりを見出そうとする形で表れたことにあると言えよう。この原因は、しばしばこの時代に言及する際持ち出される公害問題の噴出が好例であるように、あるいは、田中が自身の生きる環境を「崩壊期の日本」と形容したことに伺えるように、人々を取り巻く「日常」が限界を覗かせ始めたことにあるのだろう。「日常」の行き詰まりを打破するためには、人々は「時間的にも空間的にも」「日常」から距離をとる必要があった。そのなかで、大いに誇張され、歪曲された辰弥の「つながり」の「回復」は、その歪みによってこそ格好の物語で有り得たはずだ。方向性こそ異なるが、これを支える「回復」の希求は、戦後日本のそれと相似している。

このことを踏まえたとき、横溝作品が再受容されるにあたって『八つ墓村』が節目に存在し、また野村版『八つ墓村』がそのひとつの頂点となったことにも一定の必然性を見出すことが出来よう。野村芳太郎は横溝正史の『八つ墓村』を1970年代に映像化するにあたって、過去との接続という要素をことさらに強調した。「崇り」作品」と形容されるほど、辰弥の「回復」が孕んだ歪みを、あるいは、彼が足を踏み入れる世界と彼の「日常」との距離を強調しながら。一見ミステリであることを放棄した荒唐無稽な書き換えのようにも思われるそれは、実のところ原典である『八つ墓村』に元来内包された主題のひとつを、すなわち「つながり」を「回復」する物語としての側面を抽出する行為であった。これによって、『八つ墓村』は戦後日本において果たした役割を、異なった文脈の中で再演したと言えよう。『八つ墓村』が「つながり」を「回復」する物語として読み替えられたことに象徴的である通り、1960年代末から1970年代にかけて生じた横溝作品のブームは、この時期一種特異な形で肥大した「アイデンティティのすべてを賭けることのできるものへの欲望」の中で、それを実現する一種の寓話として横溝作品が読まれた現象だと解釈できるのではないだ

ろうか。

3. おわりに

本稿では、1960年代末から1970年代にかけて横溝正史作品が形成したブームに注目した。この再受容を考えるにあたって作品執筆の同時代状況が捨象されがちである、あるいは、それとブームの時期の差異ばかりが注目されているという先行研究の問題点に出発し、敗戦直後の状況に目配りしたうえでブームの解釈に新たな視点を付与することを試みた。なお、その際使用した具体的なテキストは流行の節目節目に存在した『八つ墓村』である。

分析の結果、まず『八つ墓村』の同時代的背景として、敗戦直後の日本に存在していた分断と、「つながり」の喪失とを見出した。その後、復員兵である主人公・辰弥に注目し、横溝の戦争体験にも触れながら、「ふつう一般の探偵譚とちがう」『八つ墓村』の側面を抽出した。この側面とはすなわち、「つながり」を「回復」する物語としての側面である。

最後に、これらの考察を踏まえた上で1970年代を中心とする横溝ブームの解釈の見直しを試みた。同現象を理解するにあたって本稿で見出したのは「ルーツ」というキーワードである。野村芳太郎監督による映画『八つ墓村』をめぐって「ルーツ」という言葉が頻出することを確認しながら、この映画の背景に「自らのアイデンティティの支え」を希求する欲望があると考察した。それと同時に、この時期には「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』の側面が抽出され、戦後担った役割を異なる文脈で再演しながらブームを形成するにいたったと結論付けた。

<参考文献>

石上三登志(1976)「家にはなぜ顔があるのか」『別冊幻影城』1976年11月号、
絃映社

石坂実夏子(2016)「『八つ墓村』に見る都会と地方——横溝正史の田舎観を中心に——」富山大学比較文学会編『富大比較文学』第9号

- 岩崎昶 (1973) 『映画にみる戦後世相史』 新日本出版社
- 上野昂志 (1989) 『肉体の時代：体験的60年代文化論』 現代書館
- 大山敏 (1988) 「戦後風俗と創作」 『新青年』 研究会編 『新青年』 読本全一卷：
昭和グラフィティ』 作品社
- 隠岐弘 (1951) 「探偵小説月評」、『宝石』 6巻3号、岩谷書店
- 笠井潔 (1998) 『探偵小説論 I：氾濫の形式』 東京創元社
- 加納実紀代 (2009) 「<復員兵>と<未亡人>のいる風景」 岩崎稔・上野千鶴
子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著 『戦後日本スタディーズ①：40・
50年代』 紀伊国屋書店
- 倉田容子 (2011) 「鏡像としての村落——横溝正史『八つ墓村』——」 昭和文学
研究会 『昭和文学研究』 第63号、笠間書院
- 栗本薫 (1976) 「正史世界の女性たち」 『別冊幻影城』 1976年11月号、絃映社
- 小松史生子 (2002) 「研究動向：横溝正史」 昭和文学会編集委員会編 『昭和文学
研究』 第45集、笠間書院
- コリン・ウィルソン (1973) 『オカルト』 上巻、新潮社
- 斎藤正治・金井俊夫 (1977) 「今号の問題作批評：野村芳太郎監督の「八つ墓
村」」 『キネマ旬報』 第719号 (通号1533号)、キネマ旬報社
- 絳秀実 (2006) 『1968年』 筑摩書房
- 新保博久 (2002) 「ミステリ再入門第21回：横溝正史は鍾乳洞の夢を見たか」
『ミステリマガジン』 第47巻1号、早川書房
- 鈴木征之 (2004) 「角川春樹復帰第一弾インタビュー」、小嶋優子編 『金田一耕
助 The Complete—日本—たよりない名探偵とその怪美な世界』、メディア
ファクトリー
- 田中美代子 (1976) 「血の運命劇」 『別冊幻影城』 1976年11月号、絃映社
- 永井太郎 (2009) 「地下世界の近代」 福岡大学研究所編 『福岡大学人文論叢』 第
41巻2号
- 日本放送協会編 (2001) 『20世紀放送史 (上)』 日本放送出版協会
- 野村典彦 (2006) 「ディスカバージャパンと横溝正史ブーム」 柳廣孝編著 『オ

- カルトの帝国：1970年代日本を読む』青弓社
- 藤岡和賀夫（1987）『藤岡加賀夫全仕事[1] ディスカバージャパン』PHP 研究所
- 藤本亮（2002）「戦後の社会意識の変容——横溝正史ブームを手がかりに——」
『社会学論叢』第 140 号、日本大学社会学会
- 山口昌男（1971）『人類学的思考』せりか書房
- 横濱雄二／諸岡卓真（2006）「もう一つのクローズドサークル——『八つ墓村』
と『屍鬼』——」柳廣孝、吉田司雄編著『幻想文学、近代の魔界へ』青弓社
- 横溝正史（1977a）『探偵小説五十年』毎日新聞社
- 横溝正史（1977b）『真説 金田一耕助』朝日新聞社
- 横溝正史（2002a）『横溝正史自伝的随筆集』角川書店
- 横溝正史（2002b）『八つ墓村』角川文庫
- 吉田司雄（2005）「ゆらぐフレームの内外第 1 回：『八つ墓村』の現在形」一柳
廣孝、吉田司雄編著『ホラー・ジャパネスクの現在』青弓社
- 吉田裕（2011）『兵士たちの戦後史：戦争の経験を問う』岩波書店
- 鷲田小彌太（2010）「金田一がよくなくては——映画『八つ墓村』断章」江藤茂
博・山口直孝・浜田知明編『横溝正史研究 2』、戎光祥出版
- Nakagawa, Chiho. (2014) “The Desire for the Past: The Supernaturalization
of Yatsuhaka-Mura”, *Transnational Horror across Visual Media:
Fragmented Bodies*, vol. 51, no. 09

タイ人の競技かるたの受容

—覚え方を中心に—

Acceptance of Kyougi-Karuta Culture Among Thai People

- Focus on Ways of Memorizing -

チャナカン・デーンブガー*

チュラーロンコーン大学大学院文学部東洋言語学科

日本文化・日本文学修士課程 M3

要旨

本稿は競技かるたを始めた当時のタイ人の小倉百人一首の歌の覚え方を明らかにし、分類することを目的とする。本研究は「クルンテープかるた会」による『競技かるたハンドブック』、「クルンテープかるた会」副会長及び「クルンテープかるた会」のつながりで競技かるたをしている10人のタイ人に小倉百人一首の歌の覚え方について聞き書きした情報をまとめて分析し、記述する方法を用いる。調査した結果、タイ人は歌を短時間で簡単に覚えるため、苦手な日本語の言葉や決まり字をそのまま覚えるのを出来るだけ避け、自分の作った覚え方を用いていたことが分かった。その覚え方は4つあり、①絵、②語呂合わせ、③タイ語の語順の利用、④札の特徴の利用、という方法に分けることができる。

キーワード：競技かるた、覚え方、音、絵、決まり字

* Chanakan DANGBUNGA, graduate student, Chulalongkorn University

e-mail: Chanakan.dangbugha@gmail.com

Abstract

The objectives of this study were to explore the methods of memorizing collection of Japanese poems, “Okura Hyakkunin Isshu” by Thai people who play Japanese card game, “Kyougi Karuta” and to sort those methods into categories. The study was conducted by having an in-depth interview with vice president of “Krungteep Karuta Club” and other 10 members of “Krungteep Karuta Club” who play “Kyougi Karuta” and also by observing the “Kyougi Karuta Handbook” that published in Thai language then analysing all of the data above to find the results. The results of the study indicated that Thai people tend to avoid memorizing poems by memorizing the first syllable(s) of the poems, “Kimariji” and tend to memorizing them by using their own connections. Those connections can be sorted into 4 categories which are 1. Memorizing by imagination and mental pictures 2. Memorizing by using words, puns 3. Memorizing by using Thai Grammar 4. Memorizing by depending on features of cards.

Keywords: Kyougi-Karuta, Ways of Memorizing, Sound, Image, Kimariji

1. はじめに

タイではこれまでゲーム、アニメ、音楽、ファッションなど様々な日本文化が受容されてきた。競技かるたもその1つである。競技かるたとは、小倉百人一首を用いて全日本かるた協会が定めた規則に則って行う歌と札を合わせる競技である。

タイには「クルンテープかるた会」があり、このかるた会を中心に競技かるたに関する多くのイベントが行われている。そうした活動から、タイ人は競技かるたのことを徐々に知るようになり、競技人口も増えてきた。

競技かるたは小倉百人一首を使ったものであり、最初に小倉百人一首の歌の「決まり字」を覚えなければならない。「決まり字」とは、歌の上の句が読

まれ始めてから下の句が書かれている「取り札」¹を取って良いことが確定するまでの先頭の数文字を指す。

決まり字を覚えるのは日本人でも時間がかかり、大変な作業であるが、外国人であるタイ人にとってはなおさら骨折りの作業である。

タイ人の小倉百人一首の歌の覚え方について述べた研究は奥村（2011）がある。奥村（2011）によれば、タイでは「クルンテープかるた会」を中心に日本語版の『競技かるたハンドブック』（2009）がタイ語に翻訳され、その中にタイの学生たちが考えたタイ語の語呂合が加えられているという。

しかし、奥村（2011）の取り上げたタイ人の小倉百人一首の歌の覚え方に関する情報はまだ少ない。それを補うため、本稿はタイ人の小倉百人一首の歌の覚え方を明らかにし、分類することを目的とする。本研究では、2018年1月から3月にかけて「クルンテープかるた会」副会長のイーブン美奈子氏及び「クルンテープかるた会」のつながりで競技かるたをしている10人のタイ人に聞き書きした情報をまとめて分析し、記述するという方法をとる。また、「クルンテープかるた会」が翻訳・加筆した、タイ人向けの『競技かるたハンドブック』（2010）を参考にする。

2. タイにおける競技かるた

競技かるたがタイにいつ入ってきたかは定かではないが、組織化されたのは「クルンテープかるた会」が創設されてからである。「クルンテープかるた会」とは、ストーン睦美氏が2005年に創設したかるた会である。創設は、日本人がタイにいても競技かるたができる場所を作りたいことがきっかけだということだが、創設から2年後の2007年にストーン睦美氏はひらがなさえ

¹競技かるたの札は2つの種類に分けられ、「読み札」と「取り札」である。読み札は読むための札で、歌の上の句も下の句も書かれている。そして、取り札は取るための札で、歌の下の句しか書かれていない。

できれば競技かるたを楽しむことができることに気づき、競技かるたをタイ人に広めはじめたという。

「クルンテープかるた会」は通常練習会のほか、日タイ交流かるた大会、合宿、国際大会への出場など競技かるたに関する様々な活動を行っている。特に日タイ交流かるた大会は、タイにおける最も大きな競技かるたのイベントで、在タイ日本大使館や全日本かるた協会などタイにある日本の団体組織の関係者のために開催されるものとなっている。大会は年に一回開かれ、2018年は14回目になる。2017年の大会は全参加者159人のうち、タイ人は115人であった。2014～2017年の大会のタイ人参加者数は表1に示すように、徐々に増えてきている。

表1 2014年～2017年 日タイ交流かるた大会の全参加者数とタイ人参加者数

年	回目	全参加者数 (人)	タイ人参加者数 (人)
2014	10	112	76
2015	11	129	69
2016	12	148	84
2017	13	159	115

「バンコクかるた会」のデータより

競技かるたをするタイ人について、「クルンテープかるた会」副会長のイーブン美奈子氏によれば「今、競技かるたに興味を持つようになったタイ人は昔より非常に多くなっている。ある学校の生徒は自分たちでかるた部を作った。それに、バンコク都内だけでなく、ナコンシータマラート県、サラブリー県、クラビー県など、バンコクから離れている地方にも競技かるたをするタイ人がいる」という。

このように、競技かるたをするタイ人は、徐々に増えてきているのだが、競技人口が増えれば増えるほど、様々な背景を持ったタイ人に競技かるたの面白

さを伝える工夫もなされなければならないだろう。特に、競技かるたの基本となる、決まり字を覚えることへの工夫が必要だと思われる。決まり字は日本語で覚えなければならないため、外国人にとって大変である。その決まり字をタイ人がどのようにして覚えたのかについて次に見ていくこととする。

3. タイ人の競技かるたの覚え方

競技かるたを始めるためには、まず小倉百人一首のそれぞれの歌の決まり字を覚える必要がある。日本人でも決まり字を覚えるのに時間がかかり、労力の要る作業のため、外国人であるタイ人の苦労はなおさらである。

イーブン美奈子氏によれば「競技かるたをするタイ人は中高生が多い。それに大学生も社会人もいる。日本語能力はあまり高くなく、凡そ N5-N4 である。だが、N2-N1 もいる」という。これは「クルンテープかるた会」に関わっている競技かるたをするタイ人 10 人にインタビューした情報と合致している。初めて競技かるたをした時の日本語能力についての聞き書きの結果、10 人のうち 8 人が競技かるたを始めた時、まだ日本語能力がそれほど高くなかったと答えている。

日本語能力が高くなかった時に競技かるたをはじめたのであれば、決まり字をそのまま覚えるのはかなり大変であったと考えられる。そのため、タイ人がそのまま決まり字を覚える以外の方法を使っているのではないかと疑問に思った。

これについて奥村（2011）によれば、タイでは「クルンテープかるた会」によってタイ語に翻訳された『競技かるたハンドブック』に、タイ人の学生たちが考えたタイ語の語呂合わせなどがつけ加えられているという。

イーブン美奈子氏も「ワッタナーウィッタヤライ学校の中学生たちが自分でタイ語版競技かるたのハンドブックを作った。そのハンドブックの中に絵で覚える方法や札の特徴的なところを覚える方法など、面白い覚え方がたくさんある。決まり字のまま覚える日本人でもそこまで考えられない方法もある」と

述べている。これで、競技かるたをするタイ人が、苦手な日本語や決まり字をそのまま覚えることを避ける覚え方があることが分かった。

そこで、タイ人がそのまま決まり字を覚える以外にどのような方法で歌を覚えるのを調べるため、「クルンテープかるた会」が翻訳したタイ人向けの『競技かるたハンドブック』を参考にしつつ、2018年1月から3月にかけて「クルンテープかるた会」に関わっている競技かるたをするタイ人10人（表2参照）に競技かるたの覚え方について聞き書きを行った。

表2 タイ人の聞き書き調査対象者

順番	略名	性別	年齢	職業	日本語能力 (現在)	競技かるたの経験 (年)	大会の経験
1	MM	女	23	大学生	N1	9	有
2	Ni	女	16	中学生	初級修了	3	有
3	Pr	女	15	中学生	初級修了	3	有
4	Ne	女	15	中学生	初級修了	3	有
5	Nf	女	16	中学生	初級修了	3	有
6	Ho	男	20	大学生	N4	5	有
7	To	男	39	自営業者	N5	3	有
8	Mr	女	44	自営業者	N2	8	有
9	J	男	34	自営業者	N1	8	有
10	E	女	20	大学生	N4	4	有

聞き書きした情報より

聞き書きしたタイ人10人のうち、7人が女性で、3人が男性である。職業については4人が中学生で、3人は大学生である。そして、3人は自営業者である。現在の日本語能力については、10人のうち、日本語能力試験を受けたことがある人は6人である。この6人のうち、N5を持っている人が1人、N4を持っている人が2人、N2を持っている人が1人、そして、N1を持っている人が2人である。日本語能力試験を受けたことがない人は4人である。全員

中学生で、初級を修了している。競技かるたの経験については、全員が3年以上で、大会への出場経験もある。

タイ人の覚え方を明らかにするため、協力者 10 人に競技かるたの覚え方について質問した。その結果を表 3 に示す。

表 3 タイ人の決まり字以外の歌の覚え方の表

順番	略名	日本語能力 (競技かるた をはじめた時)	覚え方			
			語呂合わせで 覚える	タイ語の語順を 利用し覚える	絵で覚える	札の特徴的な ところを覚える
1	MM	勉強し始めたばかり	◎		◎	◎
2	Ni	勉強し始めたばかり				
3	Pr	勉強し始めたばかり		◎		
4	Ne	勉強し始めたばかり	◎			
5	Nf	勉強し始めたばかり	◎	◎		
6	Ho	N5				
7	To	N5				
8	Mr	N2			◎	◎
9	J	N3				
10	E	N4以下	◎	◎		

聞き書きした情報より

聞き書きしたタイ人 10 人のうち、6 人が、絵で覚える方法、語呂合わせで覚える方法、タイ語の語順を利用して覚える方法、そして、札の特徴的なところを覚える方法のいずれか、あるいは、それらの方法を組み合わせて使っていたことが分かった。最も多く使われた方法は語呂合わせで覚える方法で、4 人が使っていた。次は、タイ語の語順を利用して覚える方法で、3 人が使っていた。絵で覚える方法と札の特徴的なところを覚える方法は最も少なく、それぞれで 2 人が使っていた。

つづいて、その4つの覚え方とは具体的にどのようなものなのか、聞き書きから得られた例を示しながら説明したい。

3.1. 語呂合わせで覚える方法

奥村（2011）では語呂合わせについて言及されているが、例示はない。そのため、語呂合わせで覚える方法について、以下、聞き書きから得られた結果を示す。これは、ある歌の決まり字の音がタイ語と似ていることを利用し、その似た音を覚えるという方法である。

例1

上の句	わがいはほは みやこのたつみ しかぞすむ
下の句	よをうちやまと ひとはいふなり
決まり字	わがい よをう

上の句の「わがい」は友達に使うタイ語の挨拶「*wa: nǎi*」と似ている。そして、下の句の「よをう」の音はその挨拶の1つの答え方「*joi*」と似てる。この歌を覚えるとき、「*wa: nǎi joi*」という対話のセットで覚える。

例2

上の句	やすらはで ねなましものを さよふけて
下の句	かたぶくまでの つきをみしかな
決まり字	やす かた

上の句の「やす」はタイ語の「*ja: sù:p*」と似ている。「*ja: sù:p*」は日本語でたばこという意味である。「やす」を「*ja: sù:p*」として覚える。その続き、下の句の「かたぶく」をたばこの名とする。「かたぶく」という名のたばこはタイに実際にはないが、簡単に覚えられるため、命名

したのである。覚えるとき、「かたぶく」の「enq̄u(jä:sù:p̄)」というセットで覚える。

例 3

上の句	うかりける ひとをはつせの やまおろしよ
下の句	はげしかれとは いのらぬものを
決まり字	うか はげ

上の句の「うか」の音はタイ語の「อุ้ยกล้า(ʉj khlä:)」と似ている。「อุ้ย(ʉj)」は驚くときに使う感動詞であり、「กล้า(khlä:)」は大胆という意味である。そして、下の句の「はげ」の音はタイ語の「ห่าเก้(hä: ke:)」と似ている。「ห่า(hä:)」は面白いという意味であり、「เก้(ke:)」はゲイという意味である。覚えるとき、「อุ้ยกล้าห่าเก้(ʉj khlä: hä: ke:)」と覚える。日本語に翻訳すれば「ゲイは大胆だね。面白い」という意味になる。

3.2. タイ語の語順を利用して覚える方法

日本語とタイ語の語順は違う。例を挙げれば、日本語は SOV 型²の言語であるが、タイ語は SVO 型³の言語である。また、日本語は形容詞を名詞の前に置くが、タイ語は形容詞を名詞の後ろに置く。ここではタイ語の語順を利用し、歌を覚える方法を説明する。

²SOV 型というのは文章を作る時に、主語－目的語－動詞という語順をとる言語である。例えば日本語の「私はご飯を食べる」である。

³SVO 型というのは文章を作る時に、主語－動詞－目的語という語順をとる言語である。例えばタイ語の「ฉันกินข้าว(tɕʰän kin kʰä:w) (私はご飯を食べる)」である。タイ語の語順通り翻訳すれば「私食べる 御飯」になる。

例 4

上の句	かささぎの わたせるはしに おくしもの
下の句	しろきをみれば よぞふけにける
決まり字	かさ しろ

まず、上の句の「かさ(傘)」をタイ語「ร่ม (rŏm)」に訳す。それから、下の句の「しろ(白)」をタイ語「สีขาว (sǐ:kǎ:w)」に訳す。最後にタイ語に訳した2つを組み合わせ、「ร่มสีขาว (rŏm sǐ:kǎ:w)」と覚える。「白い傘」という意味である。

タイ語は日本語と違って形容詞を名詞の後ろに置く言語なので「ร่มสีขาว (rŏm sǐ:kǎ:w)」に訳せば、決まり字の「かさしろ(傘白)」通りになり、覚えやすくなる。

例 5

上の句	みかきもり ぬじのたくひの よるはもえ
下の句	ひるはきえつつ ものをこそおもへ
決まり字	みかき ひる

上の句の「みかき」の音が日本語の「(歯を)磨く」と似ているので、「(歯を)磨く」をタイ語「แปรงฟัน (prɛ:ŋ fǎn)」に訳す。そして、下の句の「ひる(昼)」をタイ語「ตอนกลางวัน (tŏn klǎ:ŋ wǎn)」に訳す。最後にタイ語に訳した2つを組み合わせ、「แปรงฟันตอนกลางวัน (prɛ:ŋ fǎn tŏn klǎ:ŋ wǎn)」と覚える。「歯を磨く、昼に」という意味である。

日本語は時間の表す副詞を動詞の前に置くので、日本語で覚えれば、「歯を磨く、昼に」になり、決まり字の逆になってしまう。だが、タイ語は時間の表す副詞を動詞の後ろに置くので、タイ語の「แปรงฟันตอนกลางวัน (prɛ:ŋ fǎn tŏn klǎ:ŋ wǎn)」で覚えれば、決まり字の「みかきひる」の通りになる。

3.3. 絵で覚える方法

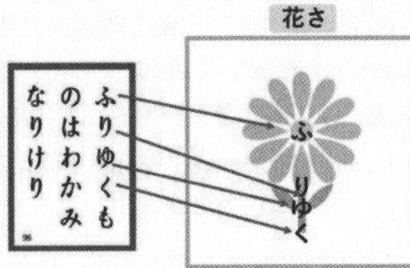
この方法は主に文字の形とその文字の並び方を利用する方法である。すなわち、取り札の文字とその文字の並び方を見て、絵を思い浮かべるのである。ひらがながあまりできないタイ人が、ひらがなを絵として認識する理由は、文字の形と音や意味がまだ対応していないからだと考えられる。以下に例を示す。

例6

上の句	はなさそふ あらしのにわの ゆきならで
下の句	ふりゆくものは わがみなりけり
決まり字	はなさ ふりゆく

上の句の「はな」はとても簡単な日本語であり、日本語を勉強し始めたばかりのタイ人でも「はな」の意味が分かるので、そのままにする。「さ」もそのまま覚える。画像1に示すように下の句の「ふりゆく」の「ふ」の形は花びらのようであり、「り」はその花びらにくっ付いている茎である。そして、「ゆ」と「く」は葉っぱとその茎である。

この歌を覚えるときに「はなさ」を覚えながら、「ふりゆく」を花に思い浮かべる。

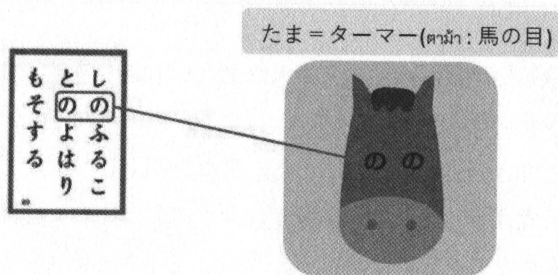


画像1: 「ふりゆく」は花に似ている

例7

上の句	たまのをよ たえなばたえね ながらへば
下の句	しのぶることの よわりもぞする
決まり字	たま しのぶ

上の句の「たま」の音はタイ語の「ต๋าม(tä: má:)」の音と似ている。「ต๋าม(tä: má:)」は「馬の目」という意味である。画像2のように取り札の二行目の「の」ところを見て、馬の目を思い浮かべる。

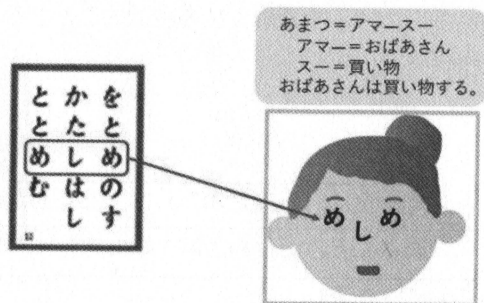


画像2: 「の」は馬の目である

例8

上の句	あまつかぜ くものかよひぢ ふきとぢよ
下の句	をとめのすかた しばしとどめむ
決まり字	あまつ をとめ

上の句の「あまつ」の音はタイ語の「อาม่า (ä: mä: sú:)」の音と似ている。「อาม่า (ä: mä: sú:)」は「おばあさんが買い物する」という意味である。そして、取り札の三行目の「めしめ」のところを見て、画像3のように、おばあさんの顔を思い浮かべる。

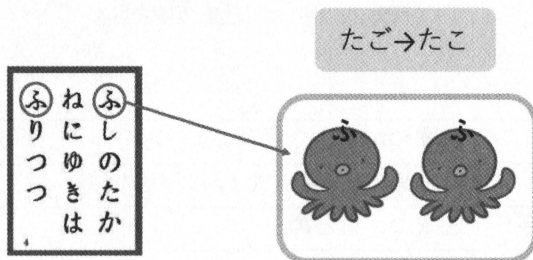


画像3: 「めしめ」はおばあさんの顔に似ている

例9

上の句	たごのうらに うちいでてみれば しろたへの
下の句	ふじのたかねに ゆきはふりつつ
決まり字	たご ふじ

日本語を勉強し始めたばかりのタイ人はまだ日本語の発音に慣れていないため、清音と濁音を聞き間違えやすい。「たご」をよく知っている「たこ焼き」の「たこ」と聞き間違えることもある。それを利用し、「たご」を意図的に「たこ」として覚える。そして、画像4のように取り札の一行目の2つの「ふ」を見て、二匹のたこを思い浮かべる。



画像4：二匹のたこがいる

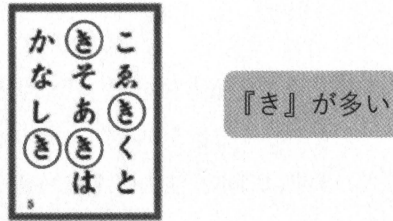
3.4. 札の特徴的なところを覚える方法

札の特徴的なところを覚える方法は、ここまでで説明した方法と違って文字の形も音も語順も関係なく、ただ取り札の特徴的なところを覚えるという方法である。以下に例を示す。

例10

上の句	おくやまに もみぢふみわけ なくしかの
下の句	こゑきくときぞ あきはかなしき
決まり字	おく こゑ

この歌の決まり字は「おくこゑ」であるが、タイ人日本語学習者の多くは「ゑ」の字を知らない。そのため、他の方法でこの歌を覚えなければならない。この歌の取り札には「き」の字が多い。その特徴と「おく」とその特徴を覚えるだけで、「ゑ」の字が読めなくても、この歌が覚えられるのである。



画像5: 「き」が多い札である

4. 考察

タイ人の絵で歌を覚える方法は IS 連想法と似ている。IS 連想法というのは I と S、つまり、イメージ(Image)とストーリー(Story)を使った連想によって文字を短時間で導入する教授法である。梅田・水田・鈴木 (2009) は韓国の高等学校の生徒にひらがなの勉強に IS 連想法によるひらがなの学習カードを使っている。そのひらがなの学習カードにはひらがなだけでなく、ひらがなの形からできた絵も描かれている。教える際、その絵とそのひらがなの音から作ったストーリーを語りながら、学習カードを紹介し、最後にテストで学習成果を測っている。その結果、覚えにくいひらがなが覚えやすくなったという。そして、梅田・水田・鈴木 (2009) は、「IS 連想法のメリットは記銘段階にあり、その評価は高い再生率だけでなく、記憶のプロセスそのものにもあると考えられる」と結論付けている。

タイ人の絵で覚える方法も IS 連想法と似ている。すなわち、取り札の文字の形やその並び方からできた絵と、読まれた歌の音をベースにストーリーを作り、覚えるのである。

歌を絵で覚える方法を使ったタイ人競技かるたの二人の協力者はこの方法で歌を覚える時間も減り、簡単に覚えられ、その上、一度覚えた歌も忘れずに正しく思い出せると言った。つまり、この方法は彼らにとって効果的であるといえる。

5. まとめ

本稿では、タイ人のかるたを覚える方法を明らかにするため、関係者の聞き書きから得られたデータを中心に分析を試みた。その結果として、競技かるたを始めたときのタイ人の大半は日本語能力が比較的高くないため、決まり字のままを覚えるのが大変で、覚えやすくする工夫が必要であるということが分かった。そのタイ人が編み出した覚え方というのは、決まり字をそのまま覚えるのではなく、絵で覚える方法、語呂合わせで覚える方法、タイ語の語順を利用して覚える方法、そして、札の特徴的なところを覚える方法という4つの方法であるということも明らかになった。

本稿で取り上げた4つの覚え方はタイ人が受容した競技かるた文化の一部に過ぎない。今後は本稿で取り上げなかったタイ人の競技かるたに対するイメージ、競技かるたに興味を持つようになった理由、練習方法、日タイ交流かるた大会及びタイにおける競技かるたに関するイベントの仕組み、競技かるた開始後の日本語能力の変化や日本文化の理解など、タイ人の競技かるたの様々な局面を調査し、その全容を明らかにしていきたい。

<参考文献>

- 梅田康子・水田澄子・鈴木庸子（2009）「韓国人高校生のためのIS連想法ひらがな学習カードの評価—記憶方略およびARCS動機付けモデルの観点から」『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』47(20)：121-139.
- 奥村準子（2011）「小倉百人一首かるたを活用した国際交流プログラム及び日本文化学習教材の開発」『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要』48：89-97.

クルンテープかるた会編（2010）「競技かるたハンドブック」タイ語版

<http://karuta.game.cocacn.jp/handbook%20thai.html>（2018/05/03 アクセス）

埼玉県かるた協会編（2009）「競技かるたハンドブック」

<http://karuta.game.cocacn.jp/handbook%20j.pdf>（2018/05/03 アクセス）

<謝辞>

本調査ではクルンテープかるた会副会長のイーブン美奈子様、クルンテープかるた会の皆様に貴重なお話を聞かせていただきました。また、実際の練習風景や貴重な資料などを見せていただきました。そして、シーアユタヤ学校のピシャイ・ルアンアルン先生には、2017年日タイ交流かるた大会出場者のご紹介、インタビューの時間と場所のご提供をしていただきました。お世話になった方々に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

『日本人オイン』における日タイ関係の表象
The Representation of Thai-Japanese Relations in the Juvenile Novels
Nihonjin O'in

チョンプーニック・ロムワタナタム*

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本文化・日本文学修士課程M3

要旨

本稿は、大佛次郎の少年小説『日本人オイン』を取り上げ、南進論言説の観点から、作品における日タイ関係の表象とその意味を明らかにすることを目的とする。

戦前、タイ（シヤム）を舞台に描いた文学作品のほとんどが山田長政を主人公とするものであり、特に日本で南進政策が盛んになっている1930年代から1940年代にかけて、山田長政の武勇伝は日本の南方侵略を正当化するために政治的に利用されることが多かった。

本稿で取り上げる『日本人オイン』は、1930年～1931年にかけて雑誌『少年倶楽部』に連載され、1932年に単行本として刊行された少年小説である。この作品では山田長政伝説が題材に使われているが、主人公は山田長政ではなく、長政の息子であるオインという少年である。本研究では、作品の中で、山田長政を主人公としたその他の同時代の物語との相違点を探りながら、日タイ関係がどのように表象され、そこにどのように南進政策の影響が反映されているかを考察する。

考察の結果、『日本人オイン』における日タイ関係の表象は、二項対立の

* Chomphunik LOMVATANATHAM, graduate student, Chulalongkorn University
e-mail: chomphunik.need@gmail.com

構図になっており、それを通して日本とタイの民族間の優劣関係が見られることがわかった。さらにこの作品には、日本人とタイ人が、友好的な互いに助け合う協力関係にあることが描かれている。作者は作品を通して、日本人の海外進出の正当性を示しつつ、同時代の山田長政関連の作品によくみられる軍事主義・武力称賛の傾向とは違い、互いの利益のために平和的で共存的な協力関係の可能性を提示していると考えられる。また、少年オインの活躍を通して、海外における日本人のあり方、さらに日本の南進の意義を少年少女の読者層に提示しているように推察できる。

キーワード：少年小説、児童文学、南進論、日タイ関係、表象

Abstract

This research aims to analyze the representation of Thai-Japanese relations in OSARAGI Jirou's juvenile novel *Nihonjin O'in* from the point of view of the southern expansion doctrine.

Before World War II, most of the literary works using Thai (Siam) as the setting of the story and Yamada Nagamasa as the main character. Especially during the 1930s and 1940s when the southern expansion doctrine was popular in Japan. Yamada Nagamasa was often used politically to justify the southern invasion of Japan.

Nihonjin O'in is a juvenile novel that was serialized in the magazine "Shōnen Club" between 1930-1931 and published as a book in 1932. In this work, Yamada Nagamasa's Legend is used as a theme. However, the main character is not Yamada Nagamasa, but a juvenile named O'in who is the son of Yamada.

In this research will explore the differences between other works in the same period which Yamada Nagamasa is created as the main character and consider about how the relationship between Japan and Thailand is represented, how the influence of the southern expansion doctrine reflects on that represented. The analysis found that the representation of Thai-Japanese is binary oppositions,

can be seen superiority-inferiority relations between Thai-Japanese. On the contrary, Thai and Japanese relation is friendly and cooperative on each other. Although the author has shown the legitimacy of Japanese overseas expansion through this book, yet it's still different from the tendency or praising military of other work that involved Yamada in the same period of time. Contrastingly, *Nihonjin O'in* representing the possibility of a peaceful and coexistent cooperative relationship for both benefits. Moreover, through the activity of juvenile O'in, it can be inferred for young boys and girls who read *Nihonjin O'in* on the represent of Japanese who settling abroad, and this leads to the significance on southern expansion doctrine in Japan.

Keywords : juvenile, southern expansion doctrine, Thai-Japanese relations, representation

1. はじめに

本稿では、「『日本人オイン』における日タイ関係の表象」を考察し、1930年代の日本における南進論及び日タイ関係のあり方を明らかにすることを目的としている。

タイと日本の交流が始まったのは約600年前に遡ると言われている。長い交流の歴史の中で、日本文学作品の一部にタイが登場している。先行研究によると、戦前でタイ（シャム）を舞台に描いた文学作品のほとんどが山田長政を主人公とするものだとされている。特に1930年代以降、南進論が盛んになっていた日本では、山田長政は海外で成功した人物という、南進論の英雄として扱われている。

矢野暢(1975)によると、日本が東南アジアの国々に進出していった背景には日本の南進政策の多大な影響がある。1930年代には「南進」は日本の国策構想の中に取り上げられ、1940年には国策として決定され、歴史的には1940年に初めて仏領インドシナに「武略南進」した。その後、南進政策は平和進出的な南方関与の蓄積をほとんど考慮に入れずに発想されたものになったとのこと

だ。

1930年代～1940年代にかけて、タイを舞台に描いた南進論を反映する文学が多く描かれ、その中には児童文学も多数含まれている。

鳥越信編集(1986)の『はじめて学ぶ児童文学』では、1931年の「満州事変」から1945年の日本の敗戦までの15年戦争の間に、日本の児童文学は様変わりをみせ、とくに1937年の中国に対する侵略戦争以降は、児童文学は子供たちを戦争に駆り立てる為の手段に利用されたことが指摘されている。そのため、1930年代における児童文学がどのように南進政策の影響を反映していたかを具体的に調査することは、日タイ関係を考える上でも有意義であると思われる。

そこで、その当時のタイを描いている児童文学、特に山田長政を主人公としない数少ない作品に注目してみた。本稿では1930年に『少年倶楽部』に連載されていた大佛次郎の『日本人オイン』について検証したい。

2. 作者と作品の概要について

2.1 大佛次郎について

大佛は東京帝国大学法学部を卒業した後、鎌倉高等女学校の教師や外務省の職員を経て、1923年の関東大震災後、作家としての本格的な活動を始めた。代表的な作品には『鞍馬天狗』シリーズがある。大人向けの作品の他に、子供向けの作品も書いている。

2.2 『日本人オイン』について

「日本人オイン」は雑誌『少年倶楽部』の1930年1月号～1931年12月号に連載され、1932年3月、単行本として刊行された。この作品は大佛次郎の代表的な少年小説とされている。

物語の舞台は暹羅(タイの昔の呼称)である。主人公オインは、山田長政とシャム人の妻との間に生まれた混血児である。将軍である父の長政が国王の命令によって、シャム南部にあるリコンに旅立った後に、オインが日本人町を守るために敵と戦う話である。

3. 先行研究

3.1 タイ表象の先行研究

Namthip Methasate (2013)は、山田長政伝説を取り上げ、1860年から第二次世界大戦にかけてタイは豊かな国で、シャム人は日本人に友好的で協力的な存在として描かれており、戦後になると、戦前に作られた理想的な表象に対する反省・是正から、多くの作品には必ずしも友好的で従順に日本の支配下に甘んじる存在ではないタイ像が描かれるようになったと指摘している。¹

トリラッサクルチャイ・タナポーン (2014)は、明治から平成に至るまでの日本におけるシャム表象を分析した。明治大正期は、シャムは野蛮でありながらも南進論を反映する移民先の理想的な空間として描かれているとしている。昭和初期においては日本とシャムの良好な関係を象徴し、日本が欧米の植民地体制を打破して東南アジアを守るという「大東亜共栄圏」の言説を強調し、読者に戦争への協力を呼びかけるものだと指摘している。²

3.2 『日本人オイン』についての先行研究

高橋康雄 (1985)は『日本人オイン』が武力による侵略を支持しない作品であると指摘している。³また、橋本順光(2015)は『日本人オイン』という題名が暗示するように、混血児であるはずのオインが母からタイの文化を受け継いでいないかのように、あくまで日本の生粋の武士であるかのように強調されてい

¹ Namthip Methasate (2013) 『Narratives of Yamada Nagamasa : The Construction of Japanese Identity and the Representation of Japanese-Thai Relations』, Chulalongkorn University

² トリラッサクルチャイ・タナポーン(2014) 『日本近現代文学におけるタイ表象の研究』、比較社会文化学府

³ 高橋康雄(1985) 『武断主義への戒め―大佛次郎『日本人オイン』の主人公・オイン』角川書店、pp.120-126

ると指摘している。⁴

以上の先行研究を踏まえ、作品における日タイ関係に焦点を絞り分析していく。

4 『日本人オイン』における日タイ関係の表象

4.1 表象の二項対立

考察の結果、作品における日タイ関係の表象は、二項対立の構図になっていることがわかる。国の表象と人物の表象という二つの大きな項目に分けてまとめる。

4.1.1 国の表象

日本の国は、土地が狭く食べ物もなく仕事もない困窮した状況にあることが描かれており、それに対してシヤムの国は食べ物が豊富にある、豊かで広い土地として描かれていることが見受けられる。この点においては、移民や南進論政策の支持が反映されているといえよう。

次の例はその考え方を裏づけるものである。これは父の山田長政が息子のオインに日本人が海外に進出していく必要性を語った場面である。

例①

『…日本には暹羅のやうに木から取りさへすれば、すぐ食べるやうな果物が實にすくなかつたから、一日何も食わずに歩くやうなことが多かつた。…日本の國で仕事がないなら無理に自分で探すより、ほかの者に譲つてやらう、自分はどこか海外へ行つて、一本立ちで働いて見せる。…<中略>…狭い天地に大勢でうようよして仕事のとりつこをしてゐるなどとは、實にくだらないし、…』(p.8)

⁴橋本順光(2015)『ポカホンタス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで—』タイ国日本研究国際シンポジウム 2014、pp.157-175

日本がシャムのように、手に入る食べ物も少なく仕事もないというのは、移民政策を是とする考えに裏づけられたものだといえるだろう。当時の日本社会の問題が描かれている。その反対のようにシャムの表象は次の例に見られる。以下の例はシャムの日本町を紹介する場面である。

例②

…日本人町では、この月の明るい春の晩を、どの家でもまどろ楽しく
平和に迎えてゐました。月のある晩は、熱帯性の草花が殊に夜氣の中
に匂ふのです。(p.33)

ここでは、シャムは美しい、住み心地のいい南国であり、日本人がシャムの日本町で楽しく平和に暮らしている様子が描かれている。すなわち、南進論の支持が反映されているといえよう。このように『日本人オイン』ではタイが日本にとって進出するのに相応しい場所として描かれている。

4.1.2 人物表象

人物の表象を考察した結果、日本人像とタイ人像是、次の表のようにまとめることができる。

表1 日本人像とタイ人像のまとめ

日本人像	タイ人像
勤勉である	怠惰である
正々堂々である	卑怯である
忠義である	嘘付き
強い(男性的)	弱い(女性的)

以上の表のように、日本人とタイ人の表象は二項対立になっている。日本とタイの民族間には優劣が見られ、タイ人より日本人の方が優れていると描かれ

ている。次に本文を詳しくみていきたい。以下の例は日本人町を紹介する場面の一部である。

例③

...この國の人が一般に、氣候の暑いためか始終だるいさうに軀をもちあぐんでゐる怠惰な悪い癖がある…<中略>...日本人町の者はおだやかな氣候の故國から移つて来たのにもか々はらず皆勤勉でいきしてゐて、…(p.35)

上の本文でみられるように、タイ人は怠惰であると表しており、その反対に、日本人は自分の土地とは違う、慣れない氣候の国に住んでも怠惰にならない。「勤勉」という言葉が繰り返されている通り、日本人が元来、勤勉であるという表象を強くにじませている。

次の例は日本人町を紹介する場面の一部である。

例④

商人でもこ々にゐる日本人は、儲けることだけ考へてどんな汚いことでも平氣にやる人間とは違ひどこまでも正々堂々として決して狡猾なことをしなかつたのです。(p.35)

儲けることだけ考へてどんな汚いことでも平氣にやる人間というのは、日本人以外の他の外国人だと思わせている。日本人が正々堂々としていると、日本人を良い位置につけるように描かれている。また、以下の例のように、日本人は忠義の精神を持つ人間であると述べている。山田長政が、自分をリコンへ行かせてもらえるよう幼い国王を説得している場面の一部である。

例⑤

...長政を始め日本人は国王のためなら命を投げ出す覺悟でゐる。

(p.15)

例⑥

…彼等は生れながら義を知る者に御座ります。陛下の御為ならば、何時にても一命を賭して働くことで御座りませう」(p.84)

国王のために命を投げ出したり、命を賭けて働いたりするというのは、日本人が忠義であるからだと見受けられる。そのため、シャムに来て主君がシャムの国王になって、日本人がその主君のために仕える。日本人が良い性質を持っているのに対し、シャム人の性質は悪い。次はタイ人が描かれた例である。

例⑦

秘密を知った日本人をあんな卑怯な方法で殺した非道のジャクタでした。(p.45)

例⑧

カラホムがこんな嘘つきだとは考へませんでした。(p.135)

以上の例のように、タイ人は卑怯で嘘つきだと描かれている。怠惰、卑怯、嘘つきという性質はタイ人が持っているもので、タイ人は日本人に比べて劣っている。また、次はシャム人の母親がオインに語った場面である。

例⑨

『お前はオンブラ腌普刺の子です。それを忘れてはいけません。腌普刺は正しい人です。強い人です。世の中の正しくないことや邪まなことに向け
ては、殊に強くなる方でした。どうぞお前もお父さまのやうに立派な
ひとになるやうに』(p.163)

ここにも、日本人とタイ人の民族間の優劣を明白にした位置付けがうかがえる。オインは自分の子供であるにもかかわらず、母親は、自分ではなく父親の

ようになってほしいといっている。さらに、オインの母は体が弱くて病気がちな女性として描かれている。それと対比して強い男性として山田長政が描かれている。橋本順光(2015)にもあるように、異人種結婚は侵略してくる存在であるはずの異国人と現地人との友好関係のシンボルであるほかに、民族間の優劣関係をも示す。強い異国の男性が弱い現地の女性を守るという関係の構図は、植民地言説の一つの手段である。この作品にある山田とオインの母の婚姻関係もこの言説に当てはまる。

4.2 互いに友好的で協力的な関係

日本とタイは互いに友好的で協力的な関係を持っている。例としてあげると、前述の異人種間結婚と、日本人を父に持ち、シャム人を母に持つ混血児のオインの存在などの他にも、多数の例がある。

例⑩は日本人町の様子を描いている部分である。

例⑩

…この日本人町の人たちはよその國へ来て、泥棒がよその家へ入つて来たように、自分達だけ集まつて勝手なことをしてゐたのではありません。自分たちが住むことになつたこの國の人々には十分に恩義を感じ、土人とは離れて暮らしてゐても、お互ひが解け合はう扶け合はうとして、謙遜な態度で土地の人たちと交際つてゐるのでした。 (p.35)

この場面では、日本人がタイ人に対して恩義を感じ、友好的な関係を結んでいることが描かれている。また、泥棒がものを奪ったり盗んだりするような行動を否定しているということにより、日本人がタイに平和的な進出をするように心掛けていることがうかがえる。また、次の例⑪と⑫では武力で侵略してくる外敵と戦う日本とタイの協力の表象が見られる。

次の例は山田長政が登場する場面である。

例⑩

この暹羅の國で、外國から敵が攻め込んで来たり、國內に悪い人間が亂を起したりすると、必ず出て行つて闘ひ、出れば必ず勝つ強い軍勢がありました。(p.3)

例⑪

…日本人町の人々がいよいよこの國の者に感心されることになつたのは、隣の國から軍隊が攻め込んで来てこの暹羅の國が危くなり、國民の上下がいよいよ國が亡びるものと思つてゐた時、この日本人町から、いつも厄介になつてゐる禮だと云はぬばかりにして、義勇軍を作つて戦争に出たのです。(p.35)

「外国から敵」というのは、暗に当時の西洋列強の植民地侵略を示すものである。日本人が、進出した国で利益をつくるために商売をするだけではなく、シャムが外敵に攻撃されたときは、日本人がシャムのために一緒に戦いに出ている。したがって、一緒に外敵と戦うという点において両国の協力関係の表象が見られる。

次の例はタイの国王が山田に語った場面である。

例⑫

オンブラ
『腌普刺、いけない、六昆へ行つてはいけない。』

小さい國王は椅子から立ち上がつて来て、跪いてゐる長政の首に小さい腕を巻いてゐられるのでした。

『私が寂しくなるのだ。お前は私の一番いい味方なのだ』(pp.83-84)

例⑫から、父王を亡くしたシャムの幼い国王が山田に対して親しみと信頼を覚えていることがうかがえる。国王はシャムの国を統治する正当性を持つ者なので、山田長政に協力を求めることによって、日本人がタイ人と一緒に協力し合い、外敵からお互いの利益を守る正当性を示している。

以上の例をまとめると、前出高橋論文でも言及されているように、作者である大佛が武力による侵略に反対し、平和的な海外進出を支持する考えを持っていることがうかがえる。

5. オインの活躍から少年少女の読者へ

『日本人オイン』は少年小説であるため、主人公は山田長政ではなく、少年のオインである。橋本論文でも言及されているように、『日本人オイン』は子供の活躍に重点が置かれている山田長政物語である。次の例は日本人町の人達がオインの考えに対して意見を言う場面であるとともに、成人とは違った子供の考え方を大切にしたいという作者の考えが見られる。

例⑩

『なるほど、これは単純すぎる。ひと筋で、素直な考へ方だ。オインさんと違って私たちのやうな成人は、あまり素直すぎて子供つぼい正直すぎる考へ方だと思つて、まさか、そんなことはあるまいと頭から呑込んで獨り合點をきめてしまふ。よく考へてみるやうでゐて、肝心のこの見方を落としてしまふわけだ。けれど、それが馬鹿に出来ない。成人の考へ方より、若いひとは眞直ぐに物を見る。世間の智慧でよごれない目で物を見るのだ。これはまつたく、オインさんのおつしやるとほりかも知れない。…』(p.497)

例⑩のように、子供の考え方は大人と違って単純で素直であるという点で、子供の考えにも肝心なところがあると大佛は書く。『少年倶楽部』に連載していたということから、多くの少年少女に読まれることを想定している。そのため、主人公の活躍により、当時流行していた南進論を読者層の少年少女に提示しようとする意図があったことがうかがえる。また、トリラッサクルチャイ論文に、遅塚麗水『少年読物第七編山田長政』は、山田長政のように海外で立身出世をするという青年読者の興味を持たせて、明治期の南進論における経済的

な海外進出政策や道徳教育を青年読者に推進する役割を果たしている指摘されている。『日本人オイン』も、同じように海外における日本人のあり方、南進の意義を推進していると思われる。しかし、前述のようにその違いは平和的で共存的な海外進出を支持しているとうかがえる。

6. まとめ

考察の結果、『日本人オイン』において、タイが日本にとって、進出するのに相応しい場所として描かれているということがわかった。また、日本人にとってタイ人は友好的で協力的な関係を結ぶ民族であり、攻めてくる外敵（すなわち南進論における西洋列強の侵略）に対抗するアジア圏の国同士であるというような描写には、当時日本社会で流行していた南進論言説を支持する意図が透けて見える。加えて、先行研究により前期や当時の山田長政物語と同じように日タイ友好の表象が見られるが、一部の武力による侵略とは違い、日本人の海外進出の正当性を示しながら、互いの利益のために平和的で共存的な協力関係の可能性を提示しているように見受けられる。それに、オインの活躍を通して、読者層の少年少女に海外における日本人のあり方、さらに日本の南進の意義を提示していることが推察できる。

7. 今後の課題

以上、『日本人オイン』における日タイ関係の表象の考察を行った。本稿は現在執筆している修士論文「『日本人オイン』と『日東の冒険王』における日タイ関係の表象」の一部である。今後は二作品を比較対象として考察し、さらに研究を深めていきたい。

<参考文献>

大橋崇行(2014)『ライトノベルから見た少女/少年小説-現代日本の物語文化を見直すために』笠間書院。

大佛次郎(1932)『日本人オイン』講談社。

高橋康雄(1986)『少年小説の世界』角川書店.

鳥越信編(1986)『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房.

トリラッサクルチャイ・タナポーン(2014)『日本近現代文学におけるタイ表象の研究』比較社会文化学府.

橋本順光(2015)「ポカホンタス伝記としての山田長政物語-明治の小説から大映の映画まで-」『タイ国日本研究国際シンポジウム2014』、pp. 157-175

矢野暢(1975).『「南進」の系譜』中公新書.

『日タイ修好130周年公式ウェブサイト』 <<http://www.th.emb-japan.go.jp/jt130/index-jp.htm>> (2018/6/18アクセス)

Namthip Methasate. Narratives of Yamada Nagamasa : The Construction of Japanese Identity and the Representation of Japanese-Thai Relations. Doctoral dissertation, Department of Literature and Comparative Literature, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, 2013.

マレー半島横断運河計画
—クラ地峡をめぐる日英の相関と衝突—

Planning Kra Canal across the Malay Peninsular :
Correlation and Conflict between Japan and Britain

橋本順光*

大阪大学・文学研究科・准教授

要旨

1930年代後半、マレー半島を横断するクラ運河開削に日本が着手していると幾度も報道されたが、噂の出所は、詩人草野心平の父・馨によるお粗末な投資企画書だった。ただし、英国が予想していた通り、1941年12月には、日本軍の一部がクラ地峡から英領ビルマに侵入した。直後に従軍した作家高見順は宣伝記事を発表し、帰国後に発表した小説には、ビルマで読んだモーリス・コリスの小説と、東南アジアへの戦略的移民を提唱した探検家岩本千綱の残響が見られる。草野の企図は、1943年にクラ地峡横断鉄道として一部実現するが、鉄路は戦後まもなく連合国により撤去されてしまう。一方、草野心平の知人による小説『共栄圏未来記』(1942)が描くクラ運河を含む汎アジア交通網は、中国の一带一路構想に受け継がれたかのように、近年、盛んに提唱されている。

キーワード：クラ運河、チャールズ・ダンロップ、齋藤幹、岩本千綱、草野馨、モーリス・コリス、高見順、ヴィクトリア・ポイント、泰緬鉄道、タイ運河、一带一路

* HASHIMOTO Yorimitsu, Associate Professor, Osaka University

e-mail : hsm@let.osaka-u.ac.jp

Abstract

In the latter half of the 1930s, it was often reported that the Government of Japan was constructing the Kra Canal, which would stretch across the Malay Peninsula. The source of the rumor, however, was a poor private investment project by Kaoru Kusano, father of the poet Shinpei Kusano. In December 1941, a part of the Japanese army invaded British Burma through the Kra Isthmus. The writer Jun Takami was ordered to serve in the siege of Victoria Point and released a propaganda report immediately after the campaign. Upon returning home Takami produced several novels that echoed the works of Maurice Collis, which he had read in Burma. In the novels Takami also created characters based on Chizuna Iwamoto, an explorer advocating strategic immigration to Southeast Asia. Kusano's plan was partially realised as the Kra Isthmus Railway in December 1943. The railway however was bombed and removed by the Allied forces around 1945. Pan-Asian transport network including the Kra Canal envisioned in the novel *Utopian Future of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere* (written by Shinpei Kusano's friend in 1942) may have been partially transformed and incorporated into China's One Belt and One Road initiative.

Keywords : Kra Canal, Charles Dunlop, Kan Saito, Chizuna Iwamoto, Kaoru Kusano, Maurice Collis, Jun Takami, Victoria Point, Thai-Burma Railway, Thai Canal, One Belt and One Road initiative

1. はじめに マレー半島横断運河計画 草野心平の回想から

「マレー半島のシンガポールの上のほうに細いところがあるだろう。そこへ運河を作るというんだな」と、そんな構想に父が夢中になっていたと詩人の草野心平が回顧している。心平によれば、父は現地に行かず、資料だけで「「われ、この山上に立ちて俯瞰するに....」とかなんとか」といった名調子の趣意書を書き上げ、さらに参謀本部まで出掛けて「佐官級」あたりを感心させたという。そして「もっと早くやれば、あるいは戦争中に実現していたかもし

れないな」と、時期を逸したため夢物語に終わったと話を結んでいる（草野，p.170）。

心平は「戦争中におやじが考え」と語っているが、実はマレー半島に運河を通す構想は、何度もジャーナリズムで話題になっては立ち消えになることを19世紀から繰り返してきた。タイ南部のクラ地峡は、インド洋のアンダマン海に注ぐクラブリー川とタイランド湾に挟まれ、マレー半島のもっとも細い部分となっており、わずか60キロメートルほどしかない。ここに運河を開削すれば、シンガポールまで行かずとも経費や日時を節約できる。となると軍事面でも英国やシンガポールの優位性を追い落とせるため、クラ地峡をめぐってはこれまで多くの地政学的な関心が払われてきた。シーレーンの激変のみならず、タイ国内においては南部との分断をもたらすため、今日なお建設の是非をめぐって論議を呼ぶ対象となっている¹。本論では、当初、英仏の覇権闘争から顕在化したクラ地峡問題が、日本の南進論や戦争とどのように関わったのか、その過程を論説や小説から概観してみたい。

2. 19世紀末における英仏の対立とクラ地峡における運河と移民事業

クラ地峡は仏教や仏像の東伝ルートだったという説がある。『大英百科事典』第9版の「シヤム」の項目では、クラ地峡に触れたあと、ルートとしては南のリゴールを挙げているが(p.851)、クラ地峡仏教東伝説は長く流布していたと思われる。例えば英国の考古学者ウェールズは、東伝ルートとして根強く信じられている説の筆頭として、クラ地峡説に言及している(Wales, 1935, p.27)。高岳親王が9世紀に仏教の地インドへ行こうとした際、タイ南部からインド洋へと通じる陸路を踏破しようとして果たせないまま薨去したと提唱されているのも、こうした状況をふまえてのことであろう(郡司, pp.510-511)。

長く密林に覆われたままだったクラ地峡が注目されたのは、19世紀にスエズ

¹ 例えばタイには、クラ運河を討論の課題としている教科書があるという。サランヤーン・シューショートケオ博士からのご教示に感謝したい。

運河の建設が本格化して以降のことである²。以下、主にキーンマンの研究に基づいて経緯を略述しておこう(Kiernan)。スエズ運河の工事が始まって4年後の1863年に、英領インドの官僚フレイザーが調査を行った。ただし、運河開削は不可能なため、鉄道の方が有利と報告しており、そのまま運河構想は放置される。再燃するのは、英領ビルマと仏領インドシナの挟まれたタイをめぐる英仏の角逐が激化した1880年代であった。1881年には、スエズ運河を成功させた当のレセップスが国際運河計画を提唱する。そして1883年にはフランス政府が調査隊を派遣し、タイ政府に招聘されていた英国人ロフトゥスが呉越同舟のように同行した。報告書はというと、フレイザー同様に、運河は不可能であるが、鉄道ならば可能という結論だった。その際、タイに駐在していた総領事代理のアーネスト・サトウ（日本駐在の前後、タイには1884年から1887年まで赴任）は独自に調査し、フランスが知らない「可能なルートがある」と英政府に報告したものの、実を結ぶことはなかった。一方、1893年7月13日に、フランスの軍艦がバンコクまで侵入したうえ停泊するというパークナム事件が起こる。この「シャム危機」により英仏間の緊張が高まった結果、英国議会ではチャールズ・ディルク議員などから運河の可能性について質問があり、ローズベリー首相は、あくまで英国が何か行動を起こさない限り現実化しないと、暗にフランスの租借権等の獲得の噂を否定するにいった。そして事態収拾の後、英仏宣言の翌年に英国はタイとの秘密条約(1897)を結び、運河を開設しないという同意を取り付けたのである。

こうした英仏の対立を横目に、クラ地峡への戦略的な移民を提案したのが後にシンガポール領事となる齋藤幹である。1892年、当時は領事館領事代理書記生であった齋藤は、5月10日に、欧州への赴任の途上、シンガポールに立

² むろん、スエズ運河計画以前からクラ運河構想はあったが、日英の相互交渉とは直接関係しないため本論では省略する。詳細は Ngui を参照。

³ 当時はシャムだが、本論では引用と固有名詞を除き、国名はタイで統一する。あわせて旧字旧仮名遣いは、読みやすいように、適宜、改めて引用する。

ち寄った青木周蔵公使と、そんな話をしたらしい。そのときの問答を、5月15日付けの私信で齋藤は榎本武揚外相に書き送っている⁴。この陳情は榎本に認められたのであろう、翌年、ちょうどパークナム事件の約一か月前、榎本が会長を務める殖民協会の雑誌『殖民協会報告』第3号(1893年6月)に、齋藤の「馬來由半島将来殖民ノ意見一斑」が掲載された。それによれば、「「クラー」地峡近傍ニ我カ帝国人民ヲ移住セシメ此大荒漠ノ地ヲ占領シタル后チ機ニ乗シテ「クラー」地峡左右ノ好位置ヲ測リ一條ノ運河ヲ開鑿シタランニハ我カ帝国馬來由半島ニ於ル領地ハ座シテ東西兩洋ノ商權ヲ占ムルハ之ヲ掌ニ指スカ如シ」(齋藤1893, p.292)と、移民を先遣隊として派遣することで日本による運河開削が可能になり、そこから得られる利益は膨大になると太鼓判を押している。さらに「好シヤ我カ国力ノ不及トコロニシテ(甚タ残念ノ申分ナガラ)後來何国乎有為ノ者ノ手ニ成ルトスルモ今日ヨリ我カ人民ヲ此地峡近傍ニ移シ置キ該地ノ地主トナサハ其時ニ臨ミ我カ移民ノ利益ハ実ニ莫大ナラン乎ト存候」と続け、たとえ他国が運河を開通することになっても、先に当地に移民しておけば、地権者として十分に利益を回収できると強調したのである。

深刻化する英仏対立から、いわば漁夫の利を得ようとしたわけである。この時、齋藤は、クラ運河の開通を見すえて鉄道開通を計画していたチャールズ・ダンロップのことを聞き及んでいたのかもしれない。ダンロップがタイの王族から勅許を得たという触れ込みで、マレー半島横断鉄道のための会社をシンガポールで創立したと報じられたのは、齋藤がクラ地峡への移民案を青木周蔵にもちかけるおよそ三か月前のことであった⁵。このダンロップ案については、1894年の英国マンチェスター地理学協会誌に、計画を先駆的として評価した

⁴ 後述の齋藤による「馬來由半島将来殖民ノ意見一斑」では青木と榎本の名は伏せられているが、元外務省移住局事務官の入江寅次が豊富な一次資料に基づいて執筆した『邦人海外発展史』上巻(1936), pp.191-192の記述に従う。

⁵ 'New Companies and New Issues', *The Railway Times and Tramway Chronicle*, vol.61, 1892 March 12, p.356. なお趣意書は1895年にシンガポールで刊行されている。

講演が掲載されている(Reed)。興味深いのは、この講演の記事が、齋藤の寄稿した同じ『殖民協会報告』第35号(1896年3月)で「マレー半島横断鉄道」と題して翻訳されていることだ。齋藤の寄稿より後の掲載であるため、ダンロップ案が参照された傍証にはならないが、殖民協会によるマレー半島への移民計画が、ダンロップ案を考慮しつつ対抗するようにして進められていたことはほぼ疑いないといえるだろう。

齋藤幹の移民提案の掲載からまもなく、調査旅行が認可されている。1893年の10月、齋藤は津田静一とともにマレー半島へ向かった。同行した津田は、殖民協会成立に関わった中心的な委員の一人で、実弟の熊谷直亮がすでにタイにおり、弟から協力を得ている(入江, p.195)。ただし、そのマレー半島調査は南部西海岸が中心で、どういう経緯があったのかクラ地峡は含まれていない。齋藤領事の調査報告は『馬列半島南部西岸諸国巡察記』(1894)として外務省通商局第二課から上下二巻本で刊行され、翌月の『殖民協会報告』でも第16号(1894年8月)から22号(1895年2月)にも掲載されたが、管見の限り、クラ地峡そのものに関する調査報告はいまだに見つかっていない。一方、齋藤がもっとも移民に適していると報告書で挙げた候補地は、クラ地峡ではなく、シンガポールを北西に上がったジョホールの西海岸ムアル周辺であった(齋藤1894, p.81)。土地を治めるジョホール王国のスルタン、アブ・バカールは来日経験もあり、「万事日本ノ風ヲ傾慕」していたらしく、齋藤の視察を厚遇しただけでなく、移民は「米作ノ模範ヲ土民ニ示セト勸告」(p.99)までしたという。当時、アブ・バカールは、英国からの干渉に手を焼きつつ、シンガポールの対岸に建設したジョホール・バル港の近代化を進めていたので、英国への牽制という点で齋藤とは利害が一致したと予想される。

こうしてクラ地峡への移民は、すっかり背景に退いてしまう。前面に出てきたのは、齋藤の調査を補助した熊谷によるタイへの移民計画であったようだ。いみじくも齋藤のムアル提案に先立つ五か月前に、殖民協会「評議員津田静一氏ハ齋藤新嘉坡領事ガ馬來半島ノ土侯ヨリ譲受ケタル土地及ビ熊谷直亮氏等ノ暹羅政府ヨリ借受ケタル土地ニ移住民ヲ送ルノ計画ヲナシ」(雑録, p.285)とあ

るように、マレー半島はタイへの移民のなかで添え物として語られるだけの存在となり、殖民協会からの報告にもほとんど登場することがなくなってゆく。齋藤の報告書によりマレーへの移住を決意した石原哲之助の足跡と、移民計画の惨憺たる失敗はまもなく忘れられ、わずかに入江寅次が『邦人海外発展史』(1936)の「南洋邦人黎明期」で「先覚者の蹶起」として岩本らのタイへの移民の前段で触れ、澤田謙が『山田長政と南進先驅者』(1942)で「クラ運河計画」の「準備に着手した男」として顕彰するだけとなった(p.265)。石原らの苦難の歴史が知られるには、原不二夫の『忘れられた南洋移民』(1987)まで待たねばならなかったのである⁶。

対照的に南進の先駆者として評価されるようになったのは、このタイへの移民計画で中心的な役割を果たし、殖民協会の会員だった元軍人の岩本千綱である。岩本もまた齋藤ほどあけすけではないにしても、英仏対立のなかでタイの重要性をよびかけ、当地への戦略的な移民を訴えていた。例えば1893年9月23日付の『朝日新聞』で、岩本は朝鮮半島にばかり関心が集中するなか、パークナム事件を機にタイが英仏の帝国主義に蹂躪されようとしている危機的状況に対して注意を喚起する一方、「新日本村を拓き緩急に応ずる予備をなし置く見込」と、その移民が先遣隊となることを明言している⁷。なお岩本は、村嶋英治の詳細な研究によれば、1894年から翌年にかけて、東南アジアのどの国よりも早く、合計でおよそ50名の移民を送り込んでいる(村嶋2016a, p.157)。岩本が企画し、熊谷が借り受けた土地サパトゥムは、現在のチュラーロンコー

⁶ 原は本書で、石原の本名はこれまでの文書にある哲之助ではなく、哲之介であったことを解明している。なお本書の性格上、クラ地峡の文脈については触れられていない。

⁷ 朝鮮半島の権益をめぐる日清戦争の前夜であった当時の日本において、英仏の対立に仲介する余裕や関心は皆無に等しい状態だった。例えば1893年9月13日付の『読売新聞』には、後にタイ公使となり、仏骨奉迎事業を行う稲垣満次郎がおそらく陸奥宗光外相こと「某大臣」に日本の条約国が滅亡寸前であるため、仲裁の労をとるべきだと進言したことを報じているが、顧みられることはなかった。

ン大学がある辺りだが、興味深いことに1894年には齋藤もここを視察し、「水田八分を占め小樹林其二分」と『暹羅国出張取調報告書』（1894年9月20日）で述べているという（村嶋2016a, p.190）。ただ、当地への移民は村嶋が詳述するように、山師のような岩本の無計画もあり、悲惨な結果に終わった。

移民事業で手ひどい失敗をしたのは齋藤と同じながら、その後、岩本は南進論の先駆者として顕彰と偶像化が進む。幾度も版を重ね、斯界の基本文献となった入江寅次の『邦人海外発展史』（1936）では移民の惨状を明記しつつもその南進計画に光があてられており、『暹羅国探検実記』（1893）や『暹羅老撾安南三国探検実記』（1897）といった岩本の著書、特に後者は1905年と1943年に再版された。さらには住江明より『南進の偉人 岩本千綱』（1943）という伝記まで刊行されたのである。注記したいのは、タイの北部からラオスを経てヴェトナムまで踏査した『暹羅老撾安南三国探検実記』のなかで、榎本武揚と高岳親王が言及されるであろう。岩本自身が語るところによれば、東京で榎本武揚らから高岳親王の遺跡がないかどうか探索を依頼された山本銀介が踏査に同行し、二人は1896年12月にバンコクを発って、翌年4月にハノイに到着したのだという。1893年にフランス領となっただけのラオスに足を踏み入れたこともあり、岩本は諜報活動の一端を担っていたのではないかとしばしば噂されたが、実のところその活動は特務とは程遠い無計画な冒険であった（村嶋2016b）。ここで特記したいのは、それだけ強固に岩本が憂国ないし愛国のアジア主義者として強固に信じられてきた点である。英仏の帝国主義に翻弄される東南アジアにいち早く関心と共感を抱き、来るべき国家南進のために基盤を築こうとした先駆者として記憶されたのは、岩本個人の無謀な冒険事業と同時代に起こっていた朝鮮半島や満洲の植民地化が一定まで完遂した1930年代以降のことであるのも注記してよいだろう。

南進論の隆盛と南方における日本の影響力拡大に際しては、高岳親王や山田長政など先人の足跡を顕彰すること、さらにはその遺蹟を奪還することがし

ばしば大義名分となった⁸。最たる例が高岳親王だろう。岩本千綱に遺跡の探索が依頼されたように、薨去の地とされた羅越は、当初、ラオスではないかといわれてきた。しかし、フランスのポール・ペリオが1909年に、桑原隲蔵が1910年にそれぞれマレー半島南部であることを唱え、通説となる(新村1943, pp.205-207)。それが1925年になって、英国が「将に新嘉坡に軍港を建設し」つつあるなか、新村出が「平和の押え」として高岳親王の記念碑を建てることを提案し、高岳親王は南進の先駆者として広く知られるようになる(新村1934, p.28)。新村は、その建議書を1934年の単行本に収録した際には、「軍事外交の事に門外漢たる私は、かかる事件に対しては風馬牛」(新村1934, p.27)と記し、あくまで記念碑は平和目的であることを明言しているが、1943年の単行本に再録した時には当の文言を書き換え、「軍事外交の事に門外漢たる私でも、全く無関心たり得ない」(新村1943, p.188)憂慮すべき状況を強調し、記念碑の広報的側面を強調している。したがってシンガポール陥落について新村が「冥々の間、真如親王の御霊が辱くも皇軍をお導き下さったのではないか」(p.112)と感謝の言葉を記していても驚くにあたらないだろう⁹。

こうした顕彰と南進との密接な連続性を考えれば、『邦人海外発展史』の入江寅次が、齋藤幹のマレー半島の大調査を岩本と同じ系譜に位置づけ、長政に思いを寄せた感傷的な私信をあたかもマレーへの移民と関連しているかのよう引用しているのが納得できよう。おそらく先に言及した『殖民協会報告』雑録にある1894年2月3日付の熊谷直亮の私信を再引用したのだろう。熊谷によれば「今春は早々北地の遊歴を致し、途に哀州[アユタヤ]の古都及び日本村の旧跡を訪い申候、日本村の旧跡は盤谷を距る一百余里、哀州の城外にあり、老樹扶疎、冷煙荒野を掠め、今や唯だ其名あるのみ、即ち一本標を樹て「日本

⁸ むろんこれは南進に限らず、北進論では源義経があり、時に偽史までもが援用された。詳細は橋本 2015a, 2015b, 2018a を参照。

⁹ 新村の顕彰運動のその後については、大澤の第三部第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」を参照。

村の旧趾」と大書し、又裏に「明治二十七年一月二十一日大日本熊谷直亮建之」と記し、野花冷水、聊か以て山田仁左衛門の英魂を弔い申候、時恰も月明に有之、四辺の風景は殊更三百年前の偉業を追想せしめ、転た感慨の至りに有之申候」と墓参で苔を掃うような感興を記している。さらに熊谷は「一詩あり」として、「絶代雄国長不存／遠人好茲弔英魂／千秋唯有古都月／乱草荒烟日本村」を掲げている(入江, p.196)。ここに岩本の記したような「新日本村を拓」く再興の意図が込められているのは明らかだろう。こうして齋藤のクラ地峡への戦略的な移民計画は実行されることなく、ジョホールへの移民も失敗に終わった。岩本や熊谷が推し進めた先人の足跡顕彰と連動したタイへの移民事業と東南アジア踏査を前に影をひそめ、齋藤の提案自体も忘れ去られてしまうのである。

3. 1930年代における日英の対立とクラ運河開削騒動

再びクラ地峡への関心が再び高まるのは、1934年のことである。日本が運河を計画中らしいと、シンガポールの英字紙『ストレイツ・タイムズ』が3月16日付で風説として伝え、『バンコク・タイムズ』や『デイリー・エクスプレス』紙が続いた。以降、数年にわたって英米独を始め世界の各新聞が、日本によるクラ運河建設の噂を報道し、そのたびに日本政府は疑惑の否定に奔走することになる¹⁰。噂から始まった記事ではあったが、そのようなことが信じられてしまう素地が、当時の日本にはあった。日本が国連を脱退したのは1933年である。しかも、その原因となった日本の満洲撤退をめぐる決議案では、タイのみが棄権していた。タイの場合、前年に立憲革命が起きたばかりという事情ゆえのことであったが、この棄権はタイが親日的な証しとばかりに日本で過剰に喧伝され、英米に対抗してタイでの影響力をいっそう行使しようという機

¹⁰ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04121081100 運河及河川開鑿関係雑件 第二卷(G. 2. 1. 1)(外務省外交史料館)「クラ」地峡開鑿其ノ他ニ関スル風説流布ノ件」と添付された複数の新聞記事を参照。

運が高まっていた。一方、日英同盟が失効した1923年以来、タイを始め、世界各地で日本と英国の利害が対立していた。新村の高岳親王記念碑運動が示すように、同盟失効以降、シンガポールでは要塞化がいつそう進んでおり、英国の地政学的優位を切り崩すクラ運河は、来るべき衝突の布石として否応にも注目が集まったのである。例えば1936年には、安川雄之助を団長とする暹羅派遣経済使節が派遣されたが、タイの「親日」を当て込んだ使節団の思惑は空振りに終わった。にもかかわらず、翌1934年には、安川がクラ運河について密約したと一部で報道され、話題を呼んだのである(例えばHauser, p.120)¹¹。

クラ運河が仏教東伝ルートだったのではないかという考証や研究も、ジャーナリズムでの騒動と無縁ではない。そもそも『大英百科事典』でクラについて言及されたのは、運河が話題となった直後の1886年のことであり、その「シヤム」の項目では、最近、クラ運河の調査が行われたことがわざわざ取り上げられている。高低差がはなはだしく「ほとんどが硬い岩盤で費用も2000万ポンド」もするという否定的な紹介の後、古くから使われてきたリゴールの地峡は仏教東伝ルートといわれると付記している。一方、日本で郡司喜一が高岳親王のクラ地峡薨去説を示唆したのは、クラ運河の噂が報道された1934年であり、その著書は外務省調査部から刊行されている¹²。そんな日本側の考証と顕彰に名を借りた南進論をいつそう増幅するようにして、オーストラリアのゴダードは、1934年5月12日付のクーリエ・メール紙に記事を寄稿し、日本はクラ運河を画策していると述べるだけでなく、この計画は山田長政が最初に着手したとまで断言したのだった(橋本2015b, p.120)。先に触れた英国の考古学者ウェールズは現地を踏破し、発掘や考古学的調査から、多くの人が口にするクラ地

¹¹ 使節団の成果は、実のところ黒豹のみであった。詳しくは橋本 2016 を参照。

¹² 郡司はクラ地峡とは明言していないが、高岳親王終焉の地を長政が王として封ぜられたリゴール付近ではないかと推定している。ただ藤田元春は、「まず暹羅のメナム川に達しクラ地峡を超えて印度に到らんとして、今のリゴル附近で薨去」(p.344)という郡司の説を否定し、桑原同様にマレー半島南部説を採用している。

峽仏教東伝ルート説を否定しているが、それを彼は何度も繰り返さねばならなかったのである¹³。

煽動的な内容で注目を集めたい書き手も、クラ運河騒動に飛びついた。1937年に自称ジャーナリストのハウザーは、安川がタイ政府と密約したと何の根拠も示さずに書き記しただけでなく、タイの高官が運河を肯定したような談話まで捏造し、このまま運河が開削すれば、マレー半島の西側に位置する英領ビルマの拠点基地ヴィクトリア・ポイントは背後から襲撃されてしまうとセンセーショナルに書き立てた(Hauser)。ほかにも1935年の夏にモスクワで開催された第7回コミンテルン世界大会では、シヤム共産党が派遣したラシが、日本によってクラ運河開削計画が進められている窮状を訴えており¹⁴、1937年には日本とソ連の近未来戦争を描いた小説『極東』のなかで、作家のピョートル・パウレンコがクラ運河を日本の大陸侵略の布石として詳しい解説とともに登場人物に語らせている¹⁵。そんな黄禍論的な主張と図像は、フランス・パテ社のニュース映画「クラ!」(Kra!, 1940)にも見られる。日本がクラ運河を造成することで、サイゴン、バンコクを中継港にしようとしていると、現地の映像をつなぎあわせて危機を煽った後、甲冑姿の武士が登場し、日本刀でマレー半島を断ち切ろうとする場面で締めくくられるのである。

扇情的な論調が支配するなか、風変わりな例がモーリス・コリスによる小説『ダーク・ドア』(1940)だろう。クラ運河工事の噂を聞きつけた英国の諜報員が、托鉢僧に扮して潜入する物語である。アイルランド出身のコリスは、ジ

¹³ Wales, 1935, p.27 および Wales, 1937, p.56 を参照。代わりに提唱したのは、クラ地峡よりも少し南のタクアパーから東に向かってバンドン湾に抜ける陸路である。

¹⁴ *VIIe Congrès Mondial de l'Internationale Communiste*, p.1862. このラシの正体が Phun Sridanrat であるのは村嶋(2009)によって指摘されたが、クラ運河については言及がない。

¹⁵ 1938年の英訳、Pavlenko, pp.181-185 を参照。原題は *Na Vostoke(In the East, 1937)* であり、日本でもペ・パウレンコ『極東：日ソ未来戦記』(改造社, 1937)として抄訳されたが、削除が多く、クラ運河についても訳されていない。

ジョージ・オーウェル同様に、ビルマでの駐在後、専業作家となっている。赴任地での経験を生かした点はオーウェルと同じながら、ラグビー校で歴史を学んだだけあってコリスは良くも悪くもアカデミックだった。現在ではほぼ忘れ去られたものの、生前はビルマ物で名を馳せ、17世紀にアユタヤ朝ナーラーイ王の庇護を受け、群島広がるメルギー(現ミャンマーのミエイクあるいはバイとも)で港湾長官にあたる地位にまで上り詰めたサミュエル・ホワイトの評伝『シャム人ホワイト』(1936)は、今なお参照される基本文献である。1920年代、このメルギーにコリスは高級官僚(ICS)として赴任しており、そこで17世紀に活躍した先人のことをしばしば耳にしたという(Collis, 1936, p.3)。かつて藩王のように権勢をふるい、1688年のシャム革命の結果、英国へ帰国したホワイトに親近感を覚えたであろうことは想像に難くない。そもそも17世紀のメルギーでホワイトがタイの対外交易を一手に引き受けられたのも、このマレー半島西部にある港町は、海賊の多いマラッカを避けて安全に取引ができる格好の市場となっていたからであった¹⁶。メルギーからアユタヤまでの回廊を利用することでリスクを回避できるという利点は、まさにクラ地峡と同じである。実際、コリスは自身が踏査した経験を交えながら、メルギーからの当時の陸路を詳しく書き記している(pp.30-34)。そしてメルギーのすぐ南にある英軍基地こそが、ヴィクトリア・ポイントであった。クラ運河騒動は、マレー半島という地政学的な拠点をめぐる列強の覇権闘争という点で、近世このかた変わりなく、コリスは同じ関心の延長からクラ運河問題を『ダーク・ドア』で取り上げたのかもしれない。ただ、コリスは、設定と冒頭こそはスパイ小説を装いつつも、途中から重心を仏教の解説へと移してゆく。クラ運河はいわば読者を引き込むための方便であり、日英の手に汗握る駆け引きを期待していた読者は煙に巻か

¹⁶ 後に政府高官となるものの、1688年の政変で処刑されるギリシャ人コンスタンティン・フォールコンは今日でも比較的良好に知られているが、彼もサミュエル・ホワイトとその兄弟ジョージとともにナーラーイ王に起用されている(Lenman, p.206)。コリスもフォールコンについては詳述している(Collis, 1936, pp.40-45)。

れることになるのである。

ただコリスはあくまで例外であり、彼の元同僚たちはたとえ憶測にもとづく不確かな報道であっても、クラ運河着工の真偽については何度も確認をしなければならなかった。後に首相となるイーデンは、外務政務官だった1936年6月に駐タイ公使のクロスビーに真偽を問い合わせしており、英国議会でもサイモン外相が正式に噂を否定しなければならなかった¹⁷。その後もクロスビー公使は、前述したハウザーの記事が根も葉もないことの立証をはじめ、クラ運河がいか「ナンセンス」に過ぎないか、食傷気味に何度も否定することとなる¹⁸。いいかえれば、たとえ日本による運河の開削自体には根拠がなくとも、クラ地峡は地政学的に重要な戦略地点であるため、神経質にならざるを得なかったのである。事実、英国では1940年7月31日付で作成された日本の進軍経路と作戦とを想定した極秘レポートにおいて、日本軍がタイのクラ地峡を通過して英領ビルマに侵入する可能性が高いこと、その際にはヴィクトリア・ポイントの飛行場をただちに破壊できるよう準備を整えることが早くも進言されていた¹⁹。そのため1940年9月に北部仏領インドシナに進駐した日本が南部仏印へも進駐を求める可能性が高まり、それともなつて英領ビルマの安全が懸念された1941年3月には、有事に備えて英国はクラ地峡を占領すべきかどうかを検討されている。議論の末、出されたのは、やはりタイとの不可侵条約から考えて適当ではないというのが結論だった²⁰。

¹⁷ 英国公文書館所蔵 CO 273 618 12 のイーデン宛 8 月 24 日書簡を参照。こうした英国側の対応と議論の詳細については Dobbs を参照。

¹⁸ 英国公文書館所蔵 CO 273 631 10 のクロスビーの 1937 年 3 月 15 日付書簡を参照。

¹⁹ 英国公文書館所蔵 FO 371 24708 の "The Situation in the Far East in the event of Japanese Intervention against Us", p.8. この対日戦争計画は、当時の政府内ではマタドール作戦として知られていた。詳細は Ong を参照。

²⁰ 英国公文書館所蔵 FO 371 277 62 の "Japanese Threat to Thailand" を参照。なお南部仏印進駐は 1941 年 7 月に始まる。

国連脱退後、日本脅威論を打ち消すことに奔走していた日本政府でも²¹、クラ運河開削という風評被害は看過できるものではなかった。1934年4月13日付で在タイ臨時代理公使の宮崎申郎が、廣田弘毅外相に宛てて詳細な報告を送っている。宮崎は、初報がシンガポールの英字新聞であったところから、英国の策動を疑っている。しかし、前述した英国側の問い合わせの数から考えて政府の関与は考えにくい。新展開は、その翌年、1935年5月15日付の廣田外相宛の書簡で引き起こされる。矢田部保吉全権公使が、運河計画の噂の出所かどうかは不明としつつも、最近、タイで入手した「暹羅大運河事業組合」の趣意書を送付したのである。そこには1935年3月付で、「亜細亜地理の探求家たる草野馨氏」が、単身タイに渡り調査し、帰国後に稲畑勝太郎前大阪商工会議所会頭を介して、おそらくラーマ6世ことワチラーウットであろう「暹羅皇帝ワチラーウット陛下に上書」し、1925年に皇帝は崩御したものの、ここに計画書を完成させたと記されている。1925年に建白したというのは極めて疑わしいが、企業目論見書には1932年から開始して竣工まで10年を計画しており、支出の見積もりは1934年秋の設計案に基づくとあるので、1934年以前に計画されたと考えられよう。確証はないが、渡邊源一郎の『馬來半島横断運河』(1943)によれば、同組合案は1934年に建白されたともいう。一方、1936年、矢田部の後にタイに着任することになる外交官の石射猪太郎は、クラ運河騒動を回想した一文で、火元は「私と同県[福島]人の、政治家ともつかず実業家ともつかぬある千三つ屋の着想」(p.248)から始まったと断じている。彼こそが、冒頭で引用

²¹ 今日でいうインバウンドを期待し、観光誘致や国際文化事業など官民挙げての日本文化の宣伝活動が盛んになるのは、主に国連脱退後のことである。国際交流基金の前身である財団法人国際文化振興会、日本交通公社の前身である社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューローが創設されたのは、ともに1934年であった。鉄道省国際観光局や日本郵船が海外向けに海外向けポスターや英文雑誌などを多く刊行したのも、同時期である。1936年には、4年後に東京でのオリンピック開催が決定し、宣伝に拍車がかかることになる。詳しくは『ようこそ日本へ』(2016)などを参照。

した草野心平の父、馨にほかならない。

石射は「クラ地峡開さく夢物語」と題した自伝中の一章で、草野馨と名指しこそしないものの、その「机上の空論」ぶり (p.248)を遠慮会釈なく酷評している。それによれば「この人物はいつも突拍子もない金儲け案などを持廻って、人を煙に巻くことで県内に知られた老人で、この頃の日暹親善の呼声に乗じて(中略)、好い加減な計画見積書を印刷して知名人に配布し、如何にも官憲や資本家の下に、一応実地踏査を遂げ、着々実現に歩を進めているかの如く宣伝したのであった」という。赴任前に風評で手こずらされた恨みもあってだろう、「本人にしては、他愛もない火遊びが英国紙まで賑わしたのを、陰でほくそ笑み、天晴レセップを気取っているらしかった。」(p.248)と結んでいる。この人物評は、「アイディアばかり追っていた」という息子心平の回想ともほぼ一致する。漢口に競馬場を作るといって南京に現れて心平を驚かせたほか、「樺太へ行ったのも、南洋へ行ったのも、広東とか上海とかほうぼう歩いたのも、全部アイディアから来ているんだ。しかし、そこまではいいんだが、いかんせん全部成功しなかったわけだよ」(pp.170-171)とあり、馨はほくそ笑むどころか、臍を噛んでばかりだった人生が示唆されている。

ただ草野馨は運河開削の企図を捨てきれなかったようだ。1938年には、草野馨の名で『亜細亜再建の徹底見：亜細亜保全と国運独歩の大経綸 暹羅大運河開鑿の提唱』を福島県人倶楽部から出版している。この企画書は、40年前にダンロップがマレー半島横断鉄道のために資本を集めようとした小冊子と比較できるだろう。ダンロップの鉄道計画が地理学協会の講演で再評価されたように、草野の遠大な計画も、日英の武力衝突後、先駆的な試みとして位置づけられるようになる。前出の渡邊源一郎による『馬來半島横断運河』(1943)はその一例にほかならない。渡邊は、鉄道省技師を経て1934年には満鉄に入社し、1938年から翌年にかけて「仏印・泰・蘭印・馬來・比律賓に出張し交通調査に従事」後、1939年末、「クラ地峡の現地調査が満鉄の調査事業として適当なりと信ずる旨を高唱」する小冊子を満鉄幹部に配布した(p.1)。大した反響はなかったものの、「大東亜戦争」の勃発により、「世人一般の南方に対する

関心は昂まり、従来は単に新聞記者が興味本位に取扱う程度に過ぎなかったクラ地峡開鑿の問題も、今は真面目なる課題として取上げられるに至ったと誇るように渡邊は記している。英米との開戦と軌を一にするように、1941年に渡邊は「満鉄東京支社調査役となり参謀本部囑託を兼務」するようになり、刊行当時には「満鉄東亜経済調査局交通調査課長」となっていた。馨が参謀本部まで説明に向かったという心平の回顧は、ひょっとして渡邊が対応したことを指してのことかもしれない。渡邊が引用する組合案は、草野の公刊する『亜細亜再建の徹底見』で伏字となっている箇所を復元しており、一般には出回っていなかった原資料ゆえに草野が提供した可能性があるからである。

いずれにせよ英米との開戦により、渡邊も強調するように「馬來半島横断運河の建設は大東亜の盟主大日本が真面目に考慮すべき問題の一つとなった」(p.2)。英米との開戦十か月前の1941年2月には、「日・満・支」中心にして東南アジアを含む大東亜共栄圏のため、新たな交通体系を構築するという交通政策要綱が閣議で決定している(吉川, p.19)。そして1941年12月に、英国が予測していた通り、日本は中立条約にもかかわらずタイに侵攻し、チュンポーンに上陸後、クラ地峡を渡ってヴィクトリア・ポイントを占領する。ほどなくしてシンガポールも陥落したため、マレー半島を横断する運河開設は喫緊の必要性はなくなったが、英国の東洋進出の足掛かりともいえる航路とは異なった交通網を作り上げるという点で、クラ運河は「大東亜」の象徴的な事業へと変化したといえるだろう。もっとも計画は草野の大言壮語同様に、威勢のいい美文と掛け声だけに終わり、およそ本格的に調査されたとは言い難い。その名も馬來次郎という変名で雑誌『港湾』に掲載された「クラ地峡と運河開鑿に就いて」(1942)、は運河の予想図を掲載して造成可能と主張するが、その予想設計図は上海の英文雑誌『極東評論(*Far Eastern Review*)』が1934年に掲載したものを無断で借用したに過ぎない。図を写し、英文を邦文に書き換えてもっともらしく掲げてはいるが、この予想図は前述の1880年代に提出された報告書からの引用であり、そこでの結論はそもそも、このような運河は不可能というものである。『大東亜資源』に寄稿した西大路弘一の「クラ地峡問題」(1943)に

しても、その図はローナン(Ronan)による 1936 年の記事中の地図を断りなく転用しており、英国に対抗すべく「大東亜の盟主大日本が真面目に考慮」しているとはとうてい思えない。こうしたクラ運河をめぐる威勢のいいだけの記事が、このころにはしばしば書かれている。

「盟主大日本」として大東亜共栄圏の交通網のなかでクラ運河を「真面目に考慮」した例外的な存在は、夢物語のような小説であった。林秀の小説『共栄圏未来記』(1942)は、表題が示すように、大東亜戦争が終結し、共栄圏が実現した未来を描いている。主人公の来宮大亮は、「昭南港」行きのその名も大東亜特急に乗って、東京からシンガポールで行われる家族の結婚式へと向かう。その道中を辿ることで、日本の築いた交通網と日本語による共栄圏という名の帝国支配が描かれるわけである²²。東京から海底トンネルを通る特急で朝鮮半島を経て満洲へと向かい、さらにシンガポールまでアジアの大動脈たる幹線電車に乗る際に登場するのが、クラ運河である。クラ運河は「印度が東を向く為に」、つまりインドと中国を緊密に結び、「東亜十億の団結」(p.214)をもたらした要路と記されており、シンガポールが衰亡するという英国の懸念は、日本のスマトラ経営により、島まで海底鉄道が起工されることで杞憂に終わったと付記している(p.215)。容易に人を寄せ付けない密林と強固な岩盤は、クラ地峡についての記事ではしばしば登場するが、本書は夢物語だけあって、「日本の優秀な科学と技術によって」開削されたと、一言で片づけるばかりである。なお作者の林秀は、尾崎秀樹の回顧によれば、昭和初年に『婦人公論』の大衆化を実現するなど長く銀座の出版社で活躍した八重樫昊の筆名であるという(pp.49-50)。八重樫は雑誌『東亜解放』の編集責任者となるが、1939年の創刊

²² 同時に「公孫樹会」という東亜を代表する知識人の会議に出席するという目的も書き込まれており、そこでは同名の親王からとったのであろう、タイからはダムロンという名の男性が参加している。会の名にイチョウが選ばれているのは、それがアジアに流布し、かつアジア固有の樹木であることにちなんでおり、これは巻末の参考文献表(p.7)にもある新村出の『東亜語源志』(1930)を参考にしたと思われる。

当時の初代編集長は草野心平だった(尾崎, p.50)。草野の自伝に従えば、1939年11月に帝都日日新聞社を辞めた心平は、翌12月に東亜解放社に入り、社内で「婦人公論」の編集長をやった八重樫昊とか国民新聞にいた有力なスタッフなどが「東亜解放」をやるということで、僕が編集を任された」という(p.99)。となると、心平の父・馨がクラ運河の趣意書を携えて運動していた頃に、八重樫は心平ともに『東亜解放』で働いていたことになる。クラ運河はしばしば雑誌に登場していたので、草野との縁という理由だけで『共栄圏未来記』に登場したわけではないだろう。しかし、心平が実現しなかったという父の案は、ちょうど心平が南京にいた頃、元同僚による小説のなかで実現していたのである。

同時に注記すべきことは『共栄圏未来記』が出版された1942年であろう。この年、前年の交通政策要綱をふまえ、タイとミャンマーを結ぼうとした悪名高い泰緬鉄道が提案されている。小説では夢の大東亜鉄道が描かれているが、まさにその刊行の頃、「盟主大日本」のもと、「大東亜」の労務者と連合国軍の捕虜らの悲惨な労働条件によって、いわゆる「死の鉄道」が建設されていたことになる。そして多くの犠牲を伴って進められた泰緬鉄道は、翌1943年、工期を短縮することが決まり、輸送能力も三分の一に削減せざるを得なくなる。そこで、急遽、持ち上がった代替経路が、クラ地峡鉄道計画だった(吉川, p.67)。同年12月に鉄道は完成し、チュンポーンからクラブリーというクラ地峡は鉄路で結ばれる。1880年代に英国で提案されたクラ地峡横断鉄道は、約半世紀を経て、「日本の優秀な科学と技術」とは程遠く、日本軍が「全面的にタイ側の協力を求め」(吉川, p.242)ることで、主にマレー半島とインドから「およそ二万人の労働者」(Kratoska, 2018, p. 188)の過酷な労働により、実現したのであった。軍の機密であった泰緬鉄道と異なり、クラ地峡鉄道は、既存の道路に沿って建設されたため、タイ側に工程ほかを明らかにし、依頼をするほかなかったのだが、「連合国軍捕虜を用いなかったことから」(柿崎, p.405)、クラ地峡は泰緬鉄道と比べて、日英での知名度は極めて低い。そして「連合国が議論を重ねた末、泰緬鉄道の維持を放棄した」(Kratoska, 2006, p. 50)ことに伴い、クラ地峡鉄道は、戦後、撤去されてしまうのである。

4. 1940年代の日本軍クラ地峡横断と高見順の小説

戦後のことは最後に再び触れるとして、先に戦争とクラ地峡の関わりをとりあげておきたい。英国が恐れていた通り、日本はタイとの中立条約を破棄し、英国を奇襲するため複数地点から同時にタイに侵入を開始した。1941年12月8日未明のことである。クラ地峡もその行路となっており、通過の後、英領ビルマに攻め入っている。日本軍がどのような経緯でクラ地峡に注目し、作戦を立てたのかは不明だが、捏造ばかりとはいえ1937年のハウザーの記事はじめクラ運河をめぐる報道が広く知られていたところから考えて、着想の起源は無数にあったと考えられよう。

クラ地峡の入口となるチュンポーンの街を目指して船から上陸した部隊が衝突したのは、当地の少年義勇兵だった。連絡がとれなくなっていたピブーン首相が現れ、日本軍と妥協することで、まもなく停戦となるが、その間に行われた戦闘については、生き残った少年兵の証言に基づき、『少年義勇兵』(*Boys will be boys, Boys will be men*, 2000)という映画がタイで製作されている。映画では、主人公の姉の夫が日本人となっており、この義兄が実はスパイとして調査をしていたことが描かれている。海岸で釣りをするふりをして海の深さを計測し、素早く上陸できるよう、適切な場所を選ぶのである。これはおそらくタイで活躍する写真家の瀬戸正夫の回想を参考にしたと思われる。瀬戸によれば、父の久雄は1909年に東南アジアへ出向き、日本の特務機関から任務を請け負うようになる(p.4)。その一例として息子と釣りを装って深度を測ることで、上陸場所にふさわしい場所を報告したであろうことが示唆されており、その褒章として父はマラッカ警察署長にまで出世したという(pp.34-36, p.87)。まさに1890年代に齋藤幹が提案した戦略的移民として瀬戸久雄はふるまったといえるだろう²³。

²³ 齋藤が意図したような国際運河への戦略的移民は、パナマで部分的に実現したといえるかもしれない。パナマを訪問した『蒼氓』の著者石川達三は、在住する日本人の多く

しかし、瀬戸の経験した場所はチュンポーンの南にあるソクラーでのごとであり、映画の場面はおそらくフィクションであろう。実のところチュンポーンについて日本軍は十分に事前調査を行うことも依頼することもなく、地図から見て町まで最短距離の浜辺を選んだだけではないかと思われる。防衛庁防衛研修所戦史室の『マレー進攻作戦』によれば、「砂地のはずの岸辺は意外にも深い泥地であり、股のつけ根まで泥中にめりこんだ」(p.237)とあり、泥との「苦闘の一時間」のすえ泥まみれになって上陸したと書かれている。たしかにチュンポーン付近の海岸には砂浜が多いが、同時に礫や泥土の浜もあり、実際に踏査すれば少し離れた砂浜の方が適切なことは明らかだったはずである。こうして上陸に時間をとられたものの、日本軍はチュンポーンに侵入後、クラ地峡を抜け、ヴィクトリア・ポイントを急襲し、飛行場を占領する。

攻略戦の詳細は『マレー進攻作戦』などの戦史に譲るとして、ここで注目したいのは、このクラ地峡越えを、占領から一か月もしないうちに、作家の高見順が宣伝班として行軍し、その記録を残していることである。『高見順日記1』に従えば、徴用の知らせを受けた高見は、大阪へ行くよう命じられ、1941

が商売熱心な商人ではなく「床屋」であることに触れて、「此の床屋さんたるや、一朝有事の際には忽ち×××たるべき使命をもっているので、床屋は唯表面の装いであるに過ぎず、収入等も論外であるのだとか」と、彼らが軍事探偵として攪乱のための工作を行うことを示唆しており、つまるところ外交は平和を唱えつつ「欺しっくらであり過ぎる」とあきれている。一方で「吾々にして見ても此のカナルを通る時には、ふと、「この位の水門ならばち壊すには何の手間暇も要らないな。」と思わざるを得ぬ」と、「世界の真実の姿は平和ではなくして、実は闘争」かもしれないと納得している(石川, p.186)。ほぼ同じ噂がペルーでもささやかれていたことを米国外交官のエマーソンが記しており、こうした疑心暗鬼が敵性外国人として国外追放や強制収容につながったことは周知のとおりである(Emmerson, pp.127-8)。

年12月2日に船でサイゴンに向かっている(pp.259-60)²⁴。移動中に日米開戦の報を聞き、海南島に一時避難するなどしたため、サイゴンに着いたのは、12月18日のことであった。以降はトラックで揺られる移動が続き、プノンペンを経て、ようやく12月29日にバンコクに到着し、待機となる(p.262, p.281)。バンコクで迎えた正月には、見事な宋胡録の小壺が安価で売られていることに驚き、十分に持ち帰れないことを残念がっており、わずかばかりの小休止を楽しんだようである(p.286)。そして翌日の1942年1月2日に、チュラーロンコーン大学に置かれていた司令部への出頭を申し渡され、写真班の山村一平とともにヴィクトリア・ポイントへの出張を命じられている(山村, p.2)²⁵。

出発は翌朝で、電車でチュンポンまで、そしてトラックでクラブリーというクラ地峡の西端の村へ、さらに船で河口のヴィクトリア・ポイント波止場へという長旅だった(pp.290-293)。ヴィクトリア・ポイントは住民が逃げて荒涼とした風景だったが、メルギー群島の向こうに広がるアンダマン海を見て「すばらしい景色だ」と息をのんでいる(p.294)。そして高見は元英国の宿舎に泊まり、英文科出身らしいというべきか図書室をのぞいている。そんな姿を目にし

²⁴ 大阪にいる間に、高見はタイ関係の書物を買集めたほか、1941年11月29日にほぼ唯一の遠出として箕面公園に足をのばしている。「梅田駅まで歩いてそこから電車」とあるので阪急石橋駅で箕面線に乗り換えたのだろう、「安田少尉引率。紅葉がすこし時期おくれの感」と日記にはある(p.250)。

²⁵ バンコク侵入後、日本軍は臨時に司令部をチュラーロンコーン大学に置いている。「バンコク入城」を指揮した岩畔豪雄によれば、「ルンビニー公園」で3日過ごしてから「チュラーロン大学構内の歯科医専の建物に移」ったという(p.25)。これを典拠とする防衛庁防衛研修所戦史室の『マレー進攻作戦』は、原資料の杜撰なタイやマレーシアの固有名詞表記を反映して誤記が多く、「師団司令部は九日午後バンコクに入り、コロロンコ大学に司令部位置を定めた」(p.158)とするなど、岩畔豪雄の誤記をさらに誤って引用している。なお岩畔は、二人の中尉を約一か月前、運転手に化けさせて国境からバンコクまで道路偵察をしたため、容易に進軍できたと誇らしげに記している(p.15)。

てであろう、同行のカメラマンの山村は、どこからか前述したコリスの『シャム人ホホワイト』を見つけてきて、高見に手渡したという。目の前に広がるメルギーを舞台にした外国人支配者の伝記ということもあってだろう、高見はコリスの書物にすっかり引き込まれている(p.303)。もちろん任務も行っており、戦死した古月隊長率いる小隊はじめ、攻略については詳しく聞き取りをし(p.308)、1月16日にはバンコクに戻っている(p.318)。翌日には古月小隊の奮戦について「書きなれない新聞記事」を苦闘して仕上げ(p.319)、さらに「ヴィクトリア・ポイント見聞記」を『改造』の1942年3月号に寄稿したのであった。その後、高見は再び英領ビルマを北上し、陥落したラングーンでの映画検閲を命じられる。徴用を終え、内地に戻ったのはおよそ一年後のことであった。

「ヴィクトリア・ポイント見聞記」は、日本軍が侵攻したクラ地峡をチュンポンから「進撃路と同じ道」(高見1973, p.175)たどって従軍した記録であり、日記の記述ともほぼ一致する。『改造』に掲載された当見聞記は、刊行直後の3月17日にラジオでも放送されたらしく、それを聞いた夫人が21日付の手紙で高見にその旨を報告している(高見2004, pp.107-8)。とはいえ、本人としては意に染まない仕事であったのだろう、事実、それを示唆するように単行本の『ビルマ記』(1944)に収録された際には、わざわざコリスについての書誌的な補遺を付している。山村一平が手渡したコリスの『シャム人ホホワイト』に興味を惹かれたこと、そして同じ著者の『ブラック・ドア』を読み始めたところ、「なんとこれがヴィクトリア・ポイントを舞台にした小説」(高見1973, p.190)であり、偶然の一致に驚いたこと、そしてコリスのほかの著書や邦訳書の案内を付したのである。

ただ高見は『ブラック・ドア』を最後まで読んでいない。高見の要約によれば、本書は「日本がクラ地峡に運河を開こうとして秘かに技師を派しているという聞き込みから、英国の特務機関のものが、ヴィクトリア・ポイントに派遣され、それと身分を隠して、泰領に潜入するという筋」であり、「きわめて安手の通俗小説であった」と結論づけているからである。仏教の解説が中心となる肝心の後半を読んでいないことは明らかだろう。それもそのはずで、高見

は本書をラングーンに戻るころには紛失してしまったという。「惜しい本ではなかった」(p.190)とあるのでおそらく再び買い求めることはなかったと思われる。たとえ探したとしても部数が少なく入手困難な小説であったので、高見は手元のないまま記憶で書いたのだろう、『ダーク・ドア』とすべき書名を『ブラック・ドア』と誤記している。

ビルマ従軍から帰国した高見は、いわゆる「支那浪人」が登場する3つの未完小説を発表する。この『まだ沈まずや定遠は』(1943)、『東橋新誌』(1943-4)、『銀座近情』(1944)は、いずれも明治時代にアンナン、シヤム、ビルマを探検したという謎めいた男の行方を、現在の東京で探すという共通する副筋を持つ。『高見順全集』第2巻所収の久保田正文による解説でも、この点に注目し、これらの小説は関連した3部作として構想されたのではないかと推測しているが(p.512)、それ以上の考察はなされていない。ここで一つの鍵となるのは、岩本千綱とモーリス・コリスだろう。名こそ違え、3作に共通して現れる3か国を明治に放浪した老人のモデルは、おそらく『暹羅老搦安南三国探検実記』(1897)の著者、岩本千綱と考えて差し支えあるまい。ちょうど高見が小説を発表した1943年は、岩本の顕彰が進み、その著書も再刊されるようになった年である。少なくとも岩本を連想した読者は多かったはずである。

本論で特筆しておきたいのは『銀座近情』である。この小説には、日本軍が占領したばかりのヴィクトリア・ポイントを訪れた「佐島」という、高見を思わせる人物が登場する。この佐島は、幼い頃にクラ河のほとりに住んでいたというビルマの老人から不思議な話を聞く。ある日、幼い彼のところへ一人の「泰人」を連れた日本人がやってきたという。その証拠として老人は、「明治〇〇〇年」という日付で「東人之〇職勞〇来／西〇之子粲々衣服」(高見1971, p.373)と書かれた漢詩の紙片をもってきたのであった。これは『邦人海外発展史』にある熊谷の漢詩と響きあうものであろう。

むろん異国で漢詩を残すことは珍しいことではなく、この二つの漢詩もおよそ内容は重なるものではない。そもそも謎は解かれぬまま小説は未完に終わってしまっている。ただ、こうした過去に先人が訪れた足跡と現代の南進を

正当化する話型は、それこそ高岳親王の例のように、当時、極めて広く見られた。高見の小説がいずれも未完に終わったのは、この手垢のついた話型に新たな展開を加えようとしたことが原因だったとも考えられよう。その傍証と思われるのが、『銀座近情』での宋胡録と長政についての言及である。ここで高見は銀座で目にした宋胡録について詳しく話を進めている。高見によれば、足利時代から珍重された宋胡録が、これまでどこで作られたのか不明だったのが、最近になってタイの陶磁器であることがわかったと特記するのである(高見1971, p.399)。銀座の骨董店で珍重される宋胡録から、話はタイに移り、タイといえは山田長政と話題は移ってゆく。そこで高見は、1940年刊行の岩生成一『南洋日本人町の研究』(ただし『南洋日本町』の誤記)の説を引用することで、もし長政が1612年にタイに渡ったとすれば、それが江戸に銀座が設けられたのと同じ年であることに注意を促している(高見1971, pp.410-411)。高見順の日記とあわせて勘案するならば、ちょうどコリスの『シャム人ホワイト』が、過去と現代の帝国を二重写しにしていたように、長政の日本人町と東京の銀座、日本で高価な宋胡録と現在のタイで安価に売られている小壺とをそれぞれ対比し、それらをつなぐ人物として岩本千綱のような謎の「支那浪人」を構想していたとも考えられよう。都会の現代風俗を描いたような『銀座近情』という題名も、あえて程遠いと思える過去と南洋とのつながりを示唆する意図があつてのことと深読みできるかもしれない。

一方、戦後になってこれら未完の小説と従軍体験を語り直したのが、高見順の『この神のへど』(1954)である。戦時中、抽象と具象のはざまで悩み、「ノイローゼ」(高見1972, p.54)となった画家の伊村は、逃げるようにしてタイに行き、宋胡録を入手しては日本で転売するという商売に身をやつす。この伊村に高見が投影されていることは明らかだろう。高見は、画家の伊原宇三郎と田村孝之介とともにビルマに駐留しており、三人で『共栄圏文化ビルマ』(1944)を刊行してもいる。伊村という名が、伊原と田村を組み合わせていることは、当時の読者もすぐに気づいたにちがいない。異国で伝手をたよりながら入手した陶磁器を転売するという危ない橋を渡るうちに、伊村は諜報活動にま

きこまれるのだが、それこそが「嘗つて運河開鑿の計画もあったクラ地峡」で「タイ領からビルマ内へ急襲する場合の「進入路」を調査すべしという秘密命令」(p.110)であった。ただし『この神のへど』では、クラ地峡をかつて横断したと思わせるような英雄的な先人は登場しない。宋胡録の転売も、山田長政のような貿易とは異なり、後ろめたい密輸行為でしかない。自慢の陶磁器由来について聞かれて、タコを使って海中から入手したと煙にまく収集家の逸話が対照的に示すように(pp.65-66)、ここでは後ろ暗い過去をどのように清算するかが前面に出ることになる。伊村にとってはそれこそ「巨大な章魚の足のような」マングローブの密林での出来事にほかならなかった(p.110)。したがってコリスの『ダーク・ドア』同様に、諜報に言及はあるものの、『この神のへど』もまた諜報小説とは程遠い内容となっている。諜報活動は英雄的な行為ではなく、むしろ伊村にとって忘れたい過去であり、にもかかわらず、戦後、その手引きをした女と偶然に出会い、再び、過去に引き戻されるわけである。『この神のへど』にみるクラ地峡の諜報活動の後退は、高見が「惜しい本ではなかった」ゆえにおそらくは再び買い求め、読み終えることのなかったであろうコリスの『ダーク・ドア』と実は重なり合っていたのであった。

5. おわりに 戦後のクラ運河と一带一路

インド洋と東シナ海を最短で結ぶことができるクラ運河構想は、タイをめぐって1880年代に英仏が対立した際に、本格的に調査と議論が行われた。英国とシンガポールの独占的ともいえる中継港の地位を脅かすためである。ただ技術的な問題もあり、鉄道は可能であるが運河は不可能というのが結論であり、英国はタイに運河を認可しないよう働きかけ、それに成功する。こうした動きをふまえて、日本では、外務官僚の齋藤幹がクラ地峡への戦略的な移民を提案し、榎本外相からも認可を受けて調査に乗り出す。しかし、岩本千綱らのタイへの移民計画が中心となり、また事業の失敗のため、クラ地峡移民化計画は現実化することもなく、忘れられていった。

運河構想が再度注目されるのは、日英がタイをめぐって対立した1930年代の

ことである。1934年に日本が開削を計画しているという初報が出て以降、国連脱退後の日本がタイに急接近した事情も手伝って、運河をめぐる密約や工事が幾度となく報じられた。その最大の一因は、詩人草野心平の父馨による暹羅大運河事業組合案であった。皮肉にも日英の政府は、運河は現実的ではないが、クラ地峡が英領ビルマを攻略する際に有力なルートであることは共に認識していた。世評の関心の高まりとともに、かつての交易ルートとしてのクラ地峡研究が進み、同時にクラ運河が引き起こす危機を煽情的に描く記事や小説が増加することになった。

1941年12月には、英国が恐れていた通り、日本軍がタイに侵攻し、クラ地峡を通過して、英領ビルマのヴィクトリア・ポイントを制圧した。英国が作り上げた中継港にかわって、「東亜の盟主」たる日本がクラ運河を開削することがしばしば唱えられ、『共栄圏未来記』(1942)のような小説でも描かれる。もっとも実現したのは、過酷な労働条件で1943年に開通したクラ地峡鉄道だった。作家の高見順はクラ地峡を通過して、ヴィクトリア・ポイント陥落直後に従軍しており、岩本千綱などをモデルに時局に応じた小説を書きつつ、戦後になって再びその時の経験を批判的に描いている。

1880年代に構想されたクラ地峡鉄道は、実現したものの破壊され、そのまま忘れ去られていった。再度、クラ運河に世界の注目が集まったのは1970年代だった。タイ・オイルの役員が中心となって、アメリカの原水爆の平和利用推進者と日本政府と企業とが加わり、水爆によって運河の開削を計画したのである。1973年には東京で国際会議が開かれたが、翌年の国会で報告書に詳細な「水爆工法」があることが社会党の岡田春夫議員によって暴露され、計画は頓挫してしまう²⁶。このとき資料を提供したのが、『朝日ジャーナル』の1974

²⁶ 1974年2月6日の第72回国会予算委員会での岡田の発言。下記のURLを参照。

<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugin/072/0380/07202060380013a.html>

年2月1日号と8日号に、久保健の筆名で「クラ運河の水爆経済学」を寄稿していた東南アジア学者の鶴見良行である(pp.54-55, p.66)²⁷。草野心平が父馨のクラ運河計画について語った自伝は1978年に刊行されているので、父たちの世代が果たせなかった計画は、皮肉にも米国の核と日本の経済成長によって実現可能になったことになるが、心平はこの騒動を知らなかったようだ。

今世紀に入ると、中国の経済成長と一带一路構想によって、再度、クラ運河に注目が集まるようになる。一带一路は、英国が東洋進出のために作り上げ、今なお支配力をもつ東洋航路とは別に、海と陸のシルクロード復活という名のもとに中国独自の交通網を築くことといいかえることができよう。英国が17世紀から希求して果たせなかった北西航路を、北極航路という形で開発しつつある中国が(橋本2018b)、クラ運河に注目するのは当然のことなのかもしれない。2017年9月11日にはモンクット王工科大が「タイ運河」国際会議を開催し、その一带一路の部会は各国で報道されたが、その後、大きく進展することはなかった²⁸。この新たなクラ運河構想が、今後、どのように発展するのか、あるいはパイプラインのような代替案が検討されるのかは本稿の企図を超えるが、戦前の日本によるクラ地峡鉄道や戦後のクラ運河構想が形を変えて中国の一带一路構想に継承されている点は、詳しく述べるまでもなく明らかだろう²⁹。本論で強調したいのは、一带一路にも似た一国中心の汎アジア交通網とクラ運河

同委員会で岡田が言う「タイ国の政府がチャウというタイ石油精製会社の社長に委任」というのは、The Education & Public Welfare Foundation(1967-2017)のChow Chowkwanyunを指すと思われる。下記のURLを参照。

<http://www.epwf.net/aboutus/history/kra.html>

²⁷ もっとも岡田の自伝『国会爆弾男・オカッパレー代記』(行研, 1987)には、鶴見からの情報提供についてまったく記載がない。

²⁸ 詳細は下記のURLを参照。

<http://kracanal-maritimesilkroad.com/en/thai-canal-international-conference/>

²⁹ 例えば日本の事例に言及しながら、Lamなども連続性を示唆している。

が、心平の知人が記した『共栄圏未来記』(1942)という小説にひっそりと描かれていた事実である。そして共栄と謳いつつ他国の事情を考慮しないゆえにだろう、何のためらいもなく「クラ運河の開通と同時に、クラ地峡の泰国とビルマ、馬來の国境が変化したのは当然であった」(p.215)と、運河構想を頓挫させかねない重要な一因がすでに書き込まれていたことである。

本稿は科研費・基盤(C)「20世紀前半における英国黄禍論小説と日本のアジア主義小説の比較文学的研究」(研究代表者橋本順光)の成果の一部である。

<参考文献>

- 石射猪太郎(1950)『外交官の一生』読売新聞社
石川達三(1931)『最近南米往来記』昭文閣書房
入江寅次(1936)『邦人海外発展史』上巻, 海外邦人史料会
岩畔豪雄(1956)『世紀の進軍シンガポール総攻撃: 近衛歩兵第五連隊電撃戦記』潮書房
大澤広嗣(2015)『戦時下の日本仏教と南方地域』法藏館
尾崎秀樹(1984)「橋川文三と雑誌『中国』」『思想の科学』49
柿崎一郎(2018)『タイ鉄道と日本軍』京都大学学術出版会
草野心平(1994)『凹凸の道—対話による自伝—』日本図書センター
郡司喜一(1934)『十七世紀に於ける日暹関係』外務省調査部
齋藤幹(1893)「馬來由半島将来殖民ノ意見一斑」『殖民協会報告』3号(6月)
齋藤幹(1894)「馬列半島南部西岸諸国巡察記」『殖民協会報告』16号(8月)
「雑録・馬來半島及暹羅国へ移住ノ企図」(1894)『殖民協会報告』11号(3月)
澤田謙(1942)『山田長政と南進先驅者』潮文閣
新村出(1934)『史伝叢考』楽浪書院
新村出(1943)『南方記』明治書房
瀬戸正夫(1995)『父と日本にすてられて』かのう書房
高見順(1965)『高見順日記』1巻, 勁草書房

- 高見順(1971)『高見順全集』2巻, 勁草書房
- 高見順(1972)『高見順全集』6巻, 勁草書房
- 高見順(1973)『高見順全集』19巻, 勁草書房
- 高見順(2004)『高見順:秋子との便り・知友との便り』博文館新社
- 鶴見良行(1995)『東南アジアを知る:私の方法』岩波書店
- 西大路弘一(1943)「クラ地峡問題」『大東亜資源』1943年7月号
- 橋本順光(2015a)「ポカホンタス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで—」『タイ国日本研究国際シンポジウム2014 論文報告書』
- 橋本順光(2015b)「山田長政の秘宝譚—『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで—」『日本研究論集』11巻
- 橋本順光(2016)「上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響—暹羅派遣経済使節から戦時猛獣処分へ—」『日本研究論集』14巻
- 橋本順光(2018a)「義経=ジンギスカン説の輸出と逆輸入:黄禍と興亜のあいだで」『アジア遊学』216号, 勉誠出版
- 橋本順光(2018b)「北の果て楽園伝説」『産経新聞関西版朝刊』4月2日
- 藤田元春(1938)『日支交通の研究 中近世篇』富山房
- 防衛庁防衛研修所戦史室(1966)『マレー進攻作戦』朝雲新聞社
- 馬來次郎(1942)「クラ地峡と運河開鑿に就いて」『港湾』20
- 村嶋英治(2009)「タイにおける共産主義運動の初期時代(1930-1936)」『アジア太平洋討究』13
- 村嶋英治(2016a)「1890年代に於ける岩本千綱の冒険的タイ事業:渡タイ(シャム)前の経歴と移民事業を中心に(上)」『アジア太平洋討究』26
- 村嶋英治(2016b)「岩本千綱の『暹羅老安南三国探検実記』をめぐって:探検の背景と実記の質」『アジア太平洋討究』27
- 山村一平(1965)「風流なサムライ」『高見順日記』1巻月報, 勁草書房
- 『ようこそ日本へ:1920-30年代のツーリズムとデザイン』(2016)東京国立近代美術館

- 吉川利治(2011)『泰緬鉄道』雄山閣
- 林秀(1942)『共栄圏未来記』四季書房
- 渡邊源一郎(1943)『馬來半島横断運河』中興館
- Collis, Maurice, (1936). *Siamese White*. London: Faber & Faber.
- Collis, Maurice, (1940). *The Dark Door*. London: Faber & Faber.
- Emmerson, John K. (1978). *The Japanese Thread: A Life in the U.S. Foreign Service*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Encyclopædia Britannica*, 9th edition, vol.21, (1886). New York: Charles Scribner's Sons.
- Dobbs, Stephen, (2016). 'Thailand's Kra Isthmus and Elusive Canal Plans since the 1850s', *TRaNS: Trans-Regional and -National Studies of Southeast Asia*, 4.
- Hauser, E. O., (1937). 'Britain Faces Japan across Siam', *Asia*, 1937 Feb.
- 'Is Japan Constructing the Kra Canal?', (1938). *Far Eastern Review*, 34, 1938 May.
- The Kedah-Senggora or Malay Trans-Peninsular Railway: A Concession Granted by His Majesty the King of Siam to Charles Dunlop of Messrs.* (1895). Singapore: Powell & Co.
- Kiernan, V. G. (1956), 'The Kra Canal Projects of 1882-5: Anglo-French Rivalry in Siam and Malaya', *History*, 41.
- Kratoska, Paul H. (ed.), (2006). *The Thailand-Burma Railway, 1942-1946: Documents and Selected Writings*, vol.1., London: Routledge.
- Kratoska, Paul H., (2018). *The Japanese Occupation of Malaya and Singapore, 1941-45: A Social and Economic History*. Singapore: NUS Press.
- Lam, Peng Er, (2018). 'Thailand's Kra Canal Proposal and China's Maritime Silk Road: Between Fantasy and Reality?', *Asian Affairs: An American Review*. 45.
- Leman, Bruce, (2001). *England's Colonial Wars 1550-1688: Conflicts, Empire and National Identity*. Harlow: Longman.
- Ngui, Clarence Yew Kit, (2012). 'Kra Canal (1824-1910): The Elusive Dream', *Akademika*. 82.

- Ong, Chit Chung, (2011). *Operation Matador: World War II: Britain's Attempt to Foil the Japanese Invasion of Malaya and Singapore*. Singapore: Marshall Cavendish.
- Pavlenko, Piotr, (1938). *Red Planes Fly East*. London: George Routledge.
- Reed, J. Howard, (1894). 'The Malayan Trans-Peninsular Railway', *The Journal of the Manchester Geographical Society*, 10.
- Ronan, William J. (1936). 'The Kra Canal: A Suez for Japan?', *Pacific Affairs*, 9.
- VIIe Congrès Mondial de l'Internationale Communiste, 25 Juillet-21 Août 1935: Compte Rendu Sténographique*. (1967). Milano: Feltrinelli Reprint.
- Wales, H.G. Quaritch, (1935). 'A Newly Explored Route of Ancient Indian Culture Expansion'. *Indian Art and Letters*. 9.
- Wales, H.G. Quaritch, (1937). *Towards Angkor in the Footsteps of the Indian Invaders*. London: George G. Harrap.

Aims and Scope

Japanese Studies Journal is an academic journal of Arts published by Japanese section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, and Studies in Language and Society, Graduate School of Language, Osaka University, and Studies in Japanese Literature, Graduate School of Letters, Osaka University. It is a semi-annual journal, published twice a year in April and October. It publishes academic articles in the field of Japanese language, Japanese language education, Japanese culture and literature. The journal seeks to promote research and share knowledge among researchers and to be a channel for the dissemination of research outputs related to those academic fields. Submission can be made throughout the year. Articles can be written either in Japanese or in English. Articles previously published cannot be accepted. All articles will receive a single-blind peer review by referees in those academic fields. Contributors should follow the guidelines for contributors at the end of the issue or visit the journal's website.

(website : <http://www.art.chula.ac.th/~east/japanese/japanstudiesjournal>)

原稿執筆について

- 書式

- A5用紙
- 横書き
- 35字 28行
- 余白 上：15mm／下：20mm／左右：17mm／フッター：7.6mm
- 文字フォント：MS明朝（タイトルの場合はMSゴシック太字）
英文と数字のフォント：Century
- 文字サイズ 10pt
- ページ番号：不要
- 脚注：各ページの最後、文字サイズ9pt

- 第1ページの書き方

- 1行目中央に題目 (MSゴシック太字 11pt)
- 1行空けて中央に執筆者氏名 (10pt)
- 氏名の横に肩書き 例) 大阪大学大学院 コース名 MO
- 2行空けて要旨 (要旨の最後にキーワードを入れてください)
- 1行空けて Abstract (英文の要旨)
- 1行空けて本文

- 枚数：15-20枚程度

- 送付先

1. OPEN JOURNAL SYSTEM

<http://www.arts.chula.ac.th/~east/japanese/japanstudiesjournal>

2. メールアドレス

japsect@yahoo.com

- 締切：

4月号 : 毎年の2月28日

10月号 : 毎年の8月31日

編集後記

本号は、2018年6月26日、大阪大学豊中キャンパスで行なわれた第9回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会で口頭発表された内容をもとに、論文として投稿された6本の論考からなる。

尹美羅（大阪大学）の「瀧井孝作「父」における志賀直哉受容—『和解』との比較を中心に—」は、瀧井孝作「父」を分析し、瀧井孝作による志賀直哉受容がより方法的なところに重点が置かれていたことに焦点を当てたものである。

服部峰大（大阪大学）の「「妹」の登場—宮沢賢治受容におけるトシの扱い—」は、戦前、注目度の低かった妹トシが、いかにして注目され、現在のような、賢治と分かちがたい存在へとなっていったのかを、トシの語られ方を考察することで明らかにし、また、トシの扱いの変化が宮沢賢治受容の中でどのような意味を持っていたのかについても考察したものである。

有村友里（大阪大学）の「「つながり」を「回復」する物語としての『八つ墓村』—執筆の同時代背景を踏まえた横溝正史ブーム再考—」は、1960年代末から1970年代を中心に生じた横溝正史ブームの解釈に対する、執筆の同時代状況とブームの時期の共通性に注目した新たな視点からの考察をし、戦後の分断のなかで『八つ墓村』に内包されたものとして、「つながり」を「回復」する物語としての側面を見出し、1970年代の社会的な横溝ブームはこの側面が抽出されながら生じたものであると論じたものである。

チャナカン・デーンプガー（チューラーロンコーン大学）の「タイ人の競技かるたの受容—覚え方を中心に—」は、競技かるたを始めた当時のタイ人の小倉百人一首の歌の覚え方を分類し、タイ人は歌を短時間で簡単に覚えるため、苦手な日本語の言葉や決まり字をそのまま覚えるのを出来る限り避け、自作の覚え方を用いていたことを考察したものである。

チョンプーニック・ロムワタナタム（チューラーロンコーン大学）の「『日本人オイン』における日タイ関係の表象」は、大佛次郎の少年小説『日本人オイン』

ン』を取り上げ、南進論言説の観点から、作品における日タイ関係の表象とその意味を明らかにしたものである。

最後に、橋本順光（大阪大学）の「マレー半島横断運河計画—クラ地峡をめぐる日英の相関と衝突—」は、近年盛んに、中国の一带一路構想に受け継がれたかのように提唱されるようになったクラ運河を含む汎アジア交通網を草野新平の回想をはじめ、高見順の従軍記、小説『共栄圏未来記』（1942）などを通して、1930年代後半から丁寧に追い、それをめぐる日英の相関と衝突について論じたものである。

この研究交流集会の企画・運営をしてくださった斎藤理生先生、大阪大学大学院文学研究科の大学院生の方々に感謝の意を表したい。また、論文査読にご協力くださった先生方に本号の編集長としてお礼を申し上げる。

(アッタヤ・スワンラダー)

『日本研究論集』 第 18 号
Japanese Studies Journal No. 18

2018 年 10 月発行

October, 2018

編集代表

Editor in Chief

チョムナード・シティサン (チューラーロンコーン大学助教授)

Chomnard SETISARN (Assistant Professor, Chulalongkorn University)

編集長

Issue Editor

アッタヤ・スワンラダー (チューラーロンコーン大学准教授)

Attaya SUWANRADA (Associate Professor, Chulalongkorn University)

査読委員

International Editorial Board

久保田裕子 (福岡教育大学教授)

KUBOTA Yuko (Professor, Fukuoka University of Education)

斎藤理生 (大阪大学准教授)

SAITO Masao (Associate Professor, Osaka University)

勢田道生 (大阪大学准教授)

SETA Michio (Associate Professor, Osaka University)

坪井秀人 (国際日本文化研究センター教授)

TSUBOI Hideto (Professor, International Research Center for Japanese Studies)

中井靖子 (チューラーロンコーン大学講師)

NAKAI Yasuko (Lecturer, Chulalongkorn University)

ナムティップ・メータセート (チューラーロンコーン大学助教授)

Namthip METHASATE (Assistant Professor, Chulalongkorn University)

Printed in Thailand

© Japanese Section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
(japsect@yahoo.com)

Studies in Japanese Literature, Graduate School of Letters, Osaka University

ISSN 1906-8891

印刷・製本

チュラーロンコーン大学印刷所

Chulalongkorn University Printing House

Bangkok 10330, Thailand

Tel. +66 (2) 218-3557, +66 (2) 218-3563

e-mail : cuprint@chula.ac.th

